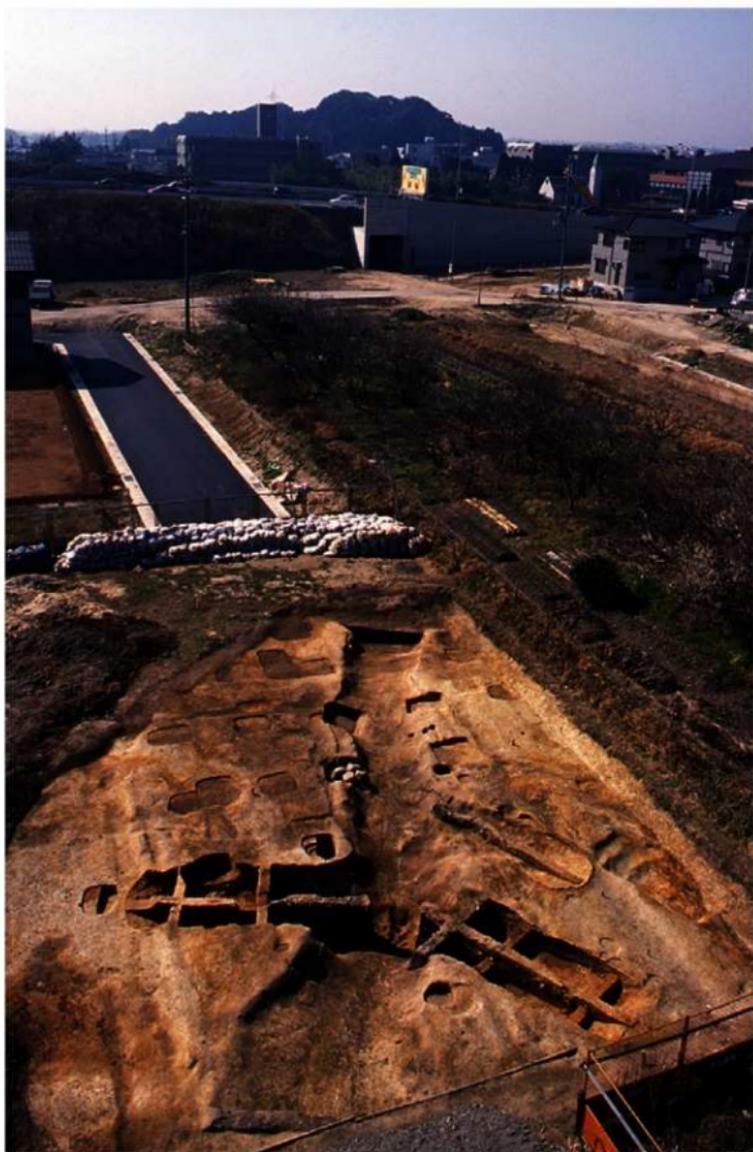


奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 30 (2018) 年度

奈良市教育委員会

2021



口絵1 菅原東遺跡1～3号埴輪窯と宝来山古墳(垂仁天皇陵古墳)(北東から)
菅原東遺跡埴輪窯跡群・平城京跡(右京三条二坊十五坪)の調査 HJ第371次(本文10～21頁)



口絵2 富雄丸山古墳等高線図(1/1,500) 富雄丸山古墳の調査 TOM第1次(本文56～65頁)



口絵3 富雄丸山古墳立体画像(南東から) 富雄丸山古墳の調査 TOM第1次(本文56～65頁)



口絵4 富雄丸山古墳 造出し北東斜面の墓石と埴輪列（北から） 富雄丸山古墳の調査 TOM 第3次 E発掘区（本文56～65頁）



口絵5 富雄丸山古墳 後門部埋葬施設の副葬品 富雄丸山古墳の調査 TOM 第2・3次 A発掘区出土（本文56～65頁）



口絵6 軒丸瓦 (平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松庵寺の調査 HJ第731次出土) (本文3～9頁)



口絵7 平松庵寺A群の瓦 (HJ第129・705次出土) (本文3～9頁)



口絵8 平松庵寺B群の瓦 (HJ第129・705・731次出土) (本文3～9頁)



口絵9 平松庵寺C群の瓦 (HJ第705・731次出土) (本文3～9頁)



口絵 10 発掘区第3区全景（北東から） 平城京跡（左京九条三坊五・六坪）の調査 HJ第727次（本文38～48頁）

例言

1. 本書は平成30(2018)年度に奈良市教育委員会が主として埋蔵文化財調査センターで実施した埋蔵文化財の発掘調査・保存活用・学習推進事業の概要と研究成果を、その後の遺物整理等の成果を加え、収録したものである。
2. 平成30(2018)年度～令和2(2020)年度の埋蔵文化財に係る事業は、下記の体制で実施した。
奈良市教育委員会事務局 教育部(平成30年度は教育総務部)

文化財課

課長 松浦五輪美(平成30年度は課長補佐)
立石堅志(平成30年度)

記念物係

係長 池田裕英
主任 久保邦江
主務 原田香織
再任用職員 藤原豊一

埋蔵文化財調査センター

所長 鐘方正樹(平成30年度・令和元年度は所長補佐、平成30年度は管理係長兼務)
三好美穂(平成30年度・令和元年度)

所長補佐 中島和彦(平成30年度・令和元年度は調査係長)

管理係

係長 奥和田佳邦(令和元年度から)
主任 松村健次
主務 山前智敬 新井信介(平成30年度・令和元年度)

調査係

係長 森下浩行(平成30年度・令和元年度は主任)
主任 秋山成人 安井宣也
主務 吉田朋史
主事 村瀬 陸
技術員 高岡桃子 桑原一徳(平成30年度)

活用係

係長 原田憲二郎
主務 永野智子 大窪淳司(平成30年度・令和元年度)

3. 事業を実施するにあたっては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。
4. 奈良市教育委員会が実施する発掘調査は、本調査では、遺跡ごとの略記号と通算番号(調査回数)を、小規模調査・試掘調査では、年度ごとに番号を付して整理している。本書で報告する遺跡は、平城京跡(略記号HJ)、史跡大安寺旧境内(同DA)、西大寺旧境内(同SD)、新薬師寺旧境内(同SY)、富雄丸山古墳(同TOM)、奈良町遺跡である(奈良町遺跡は、前述の遺跡と重複するため、略記号は付していない)。

5. 平成 30 (2018) 年度に実施した発掘調査は 15 件、小規模調査・試掘調査は 8 件である。それぞれ一覧表と位置図に示したとおりである。
6. 平成 30 (2018) 年度に実施した調査のうち、平城京跡第 722 次調査、同第 726 次調査、同第 729 次調査は、本書では報告しない。また、西大寺旧境内第 41 次調査は、平成 29 (2017) 年度に実施した同第 40 次調査と合わせて報告済である。
平成 8 (1997) 年度に実施した平城京跡第 371 次調査、平成 30 (2018) 年度～令和元 (2019) 年度に実施した平城京跡第 727 次調査は、本書で報告する。
富雄丸山古墳については、平成 29 (2017) 年度に実施した第 1 次調査 (測量調査)、令和元年度に実施した第 3 次調査をあわせて本書で報告する。
7. 本書に掲載した調査位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を、発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500) を使用している。
8. 奈良市内では、奈良市教育委員会以外の他機関も発掘調査を実施しており、これを区別するため、本書では下記の機関が実施した調査について、機関の略記号と調査回数・番号または調査年を組み合わせる形で表記している。
- | | |
|------------------------------|--------------|
| 奈良市教育委員会 | — 市 回数 |
| 独立行政法人奈良文化財研究所 (旧奈良国立文化財研究所) | — 国 回数 |
| 奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所 | — 県 番号または調査年 |
9. 本書で使用した遺構番号は、特に示さない限り、調査ごとに付した仮番号である。遺構の種類を示す以下の記号と番号を組み合わせる形で表記している。
- | | | | |
|-----------|-------------|------------------|---------|
| SA (柱列・塀) | SB (建物・門・橋) | SD (溝・濠・溝状遺構・暗渠) | SE (井戸) |
| SF (道路) | SK (土坑) | SX (その他) | |
- また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。
10. 本書で使用する遺物名・形式・型式は、特に示さない限り、下記の刊行物に準拠している。
- | | |
|------|--|
| 奈良時代 | 軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996 |
| | 土器：『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1976 |
| | 『平城宮発掘調査報告書ⅩⅠ』国立文化財研究所 1982 |
| 古墳時代 | 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 |
| 弥生時代 | 土器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003 |
11. 本書では、遺構等の位置を平面直角座標系第Ⅵ系 (世界測地系) の数値で示した。表・図では、単位 (m) を省略している。
12. 調査に関する記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。
13. 本書の作成は、令和 2 (2020) 年度に埋蔵文化財調査センター所長 鐘方正樹の指導のもとで行い、埋蔵文化財調査センター職員全員が分担した。文責は各文末に記した。所長補佐 中島和彦の校閲のもと、編集は、森下浩行・秋山成人が担当した。

平成 30 (2018) 年度実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

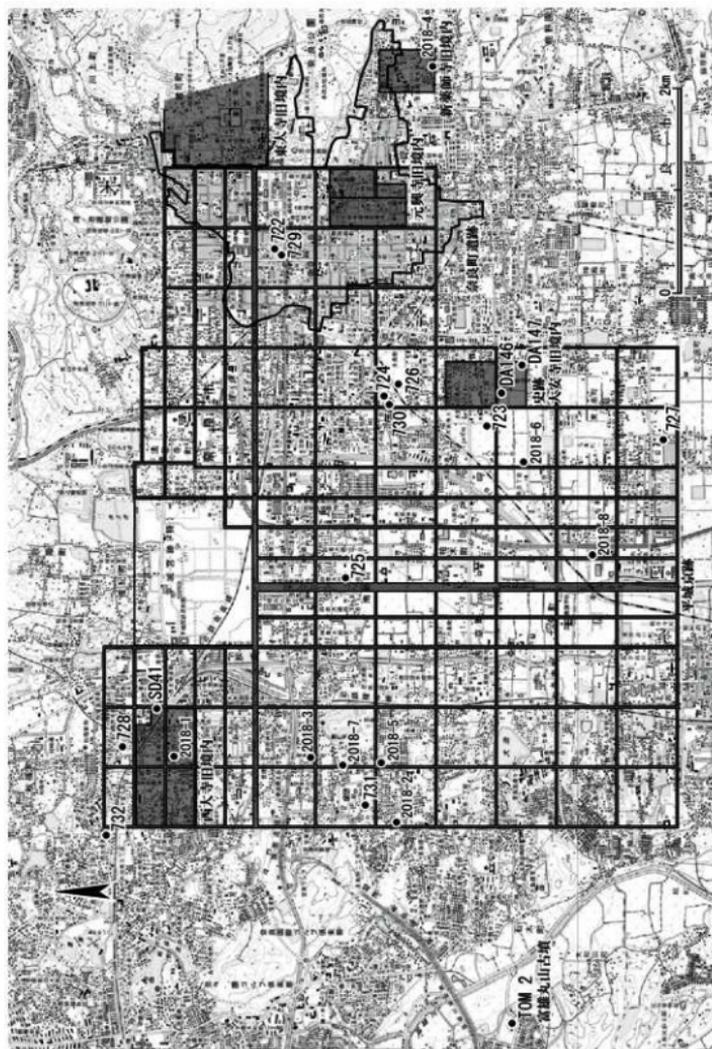
調査記号	道跡名	調査地	調査期間	調査面積 ㎡	調査担当者	調査原因・事業内容/ 届出者・申請者等	事業区 区分	届出等受理 年度・番号	
1	HJ722	平城京跡(左-3-6-10)、奈良町道跡	中筋町35番3	2018.4.16~4.27	49	中島	共同住宅新築/個人	緊急・原因者	H29-3438
2	HJ723	平城京跡(左-6-3-12)	大安寺二丁目48-1番地、他	2018.4.23~5.22	348	吉田	宅地造成/やまと不動産	原因者	H30-3540
3	HJ724	平城京跡(左-5-4-1)	大森西町187-2、他4棟	2018.5.30~7.2	218	安井・高岡	JR奈良駅南特定土地地区画整理事業/奈良市長	公共	H12-3145
4	HJ725	平城京跡(左-4-1-2、西条東四郎)	四条大路三丁目979番1	2018.6.11~6.22	200	中島・桑原	宅地造成/(株)日本ハウスホールディングス	原因者	H30-3017
5	HJ726	平城京跡(左-5-4-7)	大安寺七丁目671-1、他12筆	2018.7.18~11.9	1,204	安井・高岡	JR奈良駅南特定土地地区画整理事業/奈良市長	公共	H12-3145
6	HJ727	平城京跡(左-9-3-5-6)	西九条町四丁目1番地の11、他2筆	2018.7.23~2019.5.17	8,273	吉田・桑原	研修センター新築/大和ハウス工業(株)	原因者	H30-3487
7	HJ728	平城京跡(右-北辺-3-6)	西大寺北町一丁目1387-2、他4筆	2018.10.2~10.10	120	中島	共同住宅新築/(株)プラチナステージ	原因者	H30-3004
8	HJ729	平城京跡(左-3-6-10)、奈良町道跡	西御門町15-1	2018.10.15~11.16	100	中島	店舗新築/大和情報サービス	原因者	H30-3186
9	HJ730	平城京跡(左-5-4-1)	大森西町191-1	2018.12.12~12.26	85	安井	JR奈良駅南特定土地地区画整理事業/奈良市長	公共	H12-3145
10	HJ731	平城京跡(右-4-4-12)、平松庵寺	平松三丁目1657番の一部、他7筆	2018.12.20~12.26	90	中島・森下・高岡	宅地造成/(株)九州エイジェント	原因者	H30-3293
11	HJ732	平城京跡(右-北辺坊・西四坊大路)	西大寺北町二丁目812-1、他	2019.2.25~2019.3.15	120	安井	大和中央道街路整備単独事業/奈良市長	公共	H24-3045
12	DA146	史跡大安寺旧境内	東九条町1301-1、1302-1、1564-1	2018.9.5~11.15	207	原田	範囲確認調査/奈良市教育委員会教育長	緊急	H30-1010
13	DA147	史跡大安寺旧境内	東九条町1417番	2018.10.1~10.22	118	森下・秋山	個人住宅新築/個人	緊急	H30-1065
14	SD41	西大寺旧境内・平城京跡(右-1-3-2)	西大寺本町229番1、他2筆	2019.1.15~2.8	240	高岡	店舗新築/プレスタ(株)	原因者	H30-3339
15	TOM2	高塚丸山古墳	丸山一丁目1079番地の239	2018.12.3~2019.1.31	242.5	永野・村瀬	範囲確認調査/奈良市長	緊急	H30-1077

※平城京跡に付している(○●○●○)は、○京○条○坊○呼の略である。

平成 30 (2018) 年度実施 小規模調査・試験調査一覧

2018-1	西大寺旧境内	西大寺新田町541番1	2018.6.7、8、14	58	森下・秋山・吉田・桑原	個人住宅新築/個人	原因者	H29-3289
調査結果:遺構確認されず。								
2018-2	平城京跡(右-5-4-15-16)	五条堀一丁目600-1 他	2018.7.10	28	森下・吉田・桑原	宅地造成・賃貸住宅新築/(株)エターナル	原因者	H30-3110
調査結果:遺構確認されず。								
2018-3	三条大路・兵衛山古墳隣接地	宝来二丁目801-6	2018.7.30	1	中島・森下	個人住宅新築/個人	緊急	H30-3196
調査結果:室町時代の溝を確認。								
2018-4	新築師寺旧境内	高畑町181番4	2018.8.2、3	90	中島・森下・秋山	宅地造成/(株)日本中央住販	原因者	H30-3141
調査結果:遺構確認されず。								
2018-5	平城京跡(右-5-3-16)	平松二丁目224番1の一部	2018.10.3~5	30	鐘方・高岡	宅地造成/(株)レーブ	原因者	H30-3245
調査結果:遺構確認されず。								
2018-6	平城京跡(左-7-3-2)	八条二丁目88番1、他3筆	2019.2.14	30	森下・秋山・高岡	保育園開設/(福)バルファ事業会	緊急	H30-3281
調査結果:奈良時代の柱穴、溝を確認。								
2018-7	平城京跡(右-4-3-14)	平松一丁目835番1、836番1、836番2の各一部	2018.3.6、7	66	鐘方・中島・高岡	個人住宅新築/横水ハウス(株)	原因者	H31-3521
調査結果:奈良時代の柱穴、近代の建前室3基を確認。								
2018-8	東一坊坊間路	青町216-4、216-2、223-1、217-1	2019.3.20	67	森下・安井・高岡	物流倉庫新築/五条運輸(株)	原因者	H31-3522
調査結果:奈良時代の路面及び溝溝を確認。								

※平城京跡に付している(○●○●○)は、○京○条○坊○呼の略である。



平成30年度調査地位位置図

目次

第1章	平成30(2018)年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告	
1.	平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松庵寺の調査 第731次	3
2.	菅原東遺跡埴輪窯跡群・平城京跡(右京三条二坊十五坪)の調査 第371次	10
3.	平城京跡(右京北辺三坊六坪)の調査 第728次	22
4.	平城京跡(右京北辺坊・西四坊大路)の調査 第732次	24
5.	平城京跡(左京六条三坊十二坪)の調査 第723次	27
6.	平城京跡(左京四条条間路)の調査 第725次	32
7.	平城京跡(左京五条四坊一坪)の調査 第724・第730次	34
8.	平城京跡(左京九条三坊五・六坪)の調査 第727次	38
9.	史跡大安寺旧境内の調査	49
(1)	塔院北門・六条大路の調査 DA第146次	50
(2)	寺城東辺・花園院推定地の調査 DA第147・148次	54
10.	富雄丸山古墳の調査 TOM第1・2・3次	56
11.	平成30年度実施 遺跡有無確認踏査一覧	66
12.	平成30年度実施 工事立会一覧	66
第2章	平成30(2018)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告	75
第3章	資料報告	
1.	平城京出土の刺突痕がある土製品	89
2.	菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器	97

第1章 平成30(2018)年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告

1. 平城京跡 (右京四条四坊十二坪)・平松廃寺の調査 第731次

事業名 宅地造成

届出者名 株式会社 八州エイジェント

調査地 平松三丁目657番の一部 他7筆

調査期間 平成30年12月20日～12月26日

調査面積 93㎡

調査担当者 中島和彦 森下浩行 高岡桃子

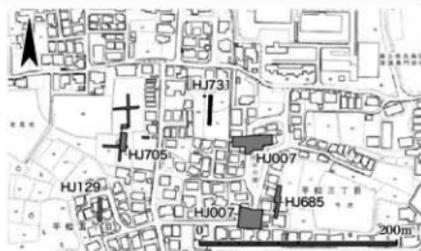
1. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によれば右京四条四坊十二坪の北東部にあたる。また周辺では従来古瓦が採取されており、当坪内に平松廃寺が推定されている。

十二坪内の発掘調査は、平成28年度に奈良市が調査地西側で実施しており、瓦が多量に出土する溝を検出し、周辺に平松廃寺に関する遺構が存在することが推定された(HJ第705次調査)。

今回の調査は、調査地の北側に想定されている四条条間南小路の検出及び、平松廃寺関連遺構の有無の確認を目的に、道路建設部分に東西3m、南北30mの発掘区(東発掘区)と東西2.0m、南北1.5mの発掘区(西発掘区)を設定して実施した。発掘調査後、下水管理設部分の立会調査(H30.3.29.3)を行い、整地層の西側への広がりを確認した。

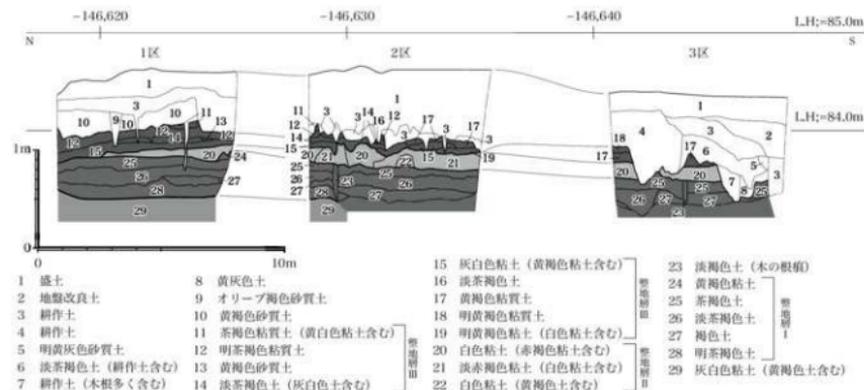
さらに令和2年度には、発掘調査隣接地の建物建築に伴う発掘届が順次提出された。西側隣接地の届出地(R02.3.42.5)においては、試掘調査(試掘20-05)を実施して遺構面の残存状況を確認し、建物の基礎構造を遺構面に影響しないものとした。この届出に伴う切土工事に際しては、立会調査を実施し記録を作成した。以下これらの調査成果をまとめて報告する。



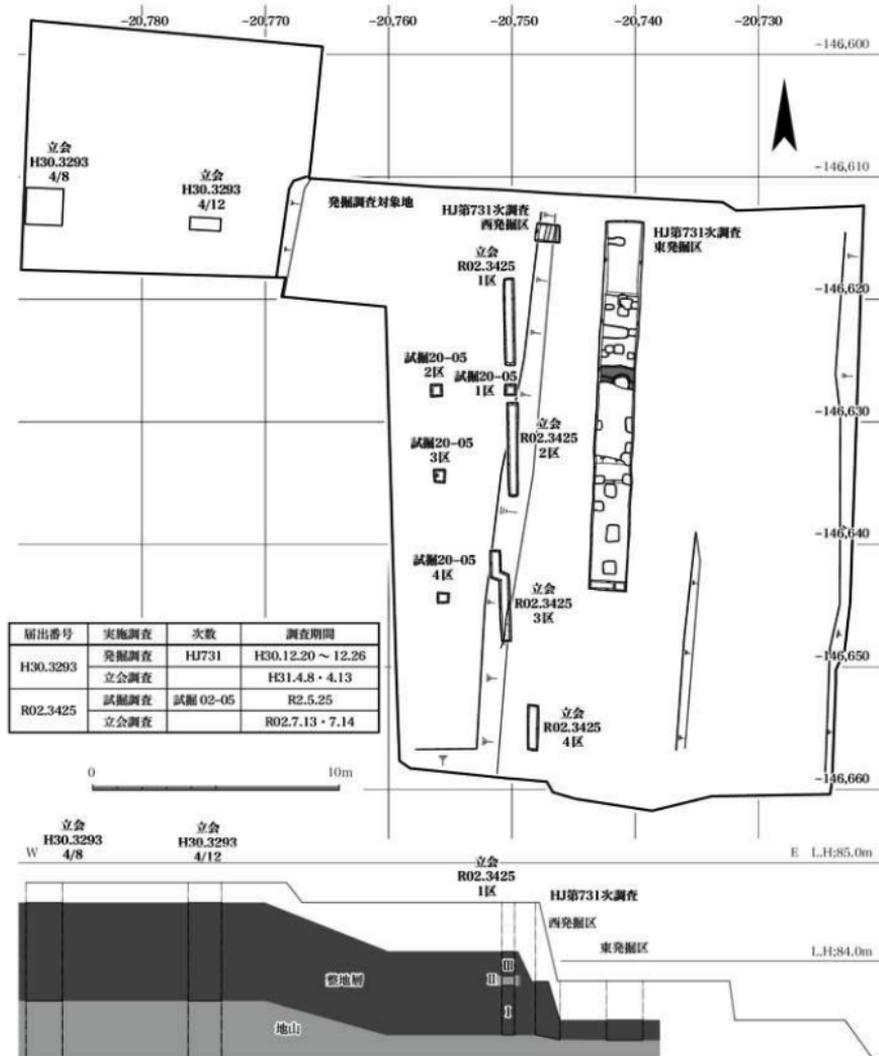
II. 基本層序

調査地は西から東へのびる丘陵の南側にあたり、調査前は北西から南東方向に礫壇状に下降する宅地と耕作地であった。敷地は大きく東西方向に4筆に分かれ、東西の地表面の標高は、西から84.8m、84.6m、83.8m、83.4mあり調査地中央の段差が0.8mと最も大きい。

調査地内のおおよその層位は、地表下0.2～0.5mで奈良時代の整地層となり、その下で地山となる。地山面の標高は調査地西端で83.6m、発掘区北端で83.2m、発掘区南端で81.7mと約2mの比高差がある。地山面の下降に合わせて整地層の厚さも、西端で1.0m、発掘区北端で0.2m、発掘区南端で1.4mと変化する。



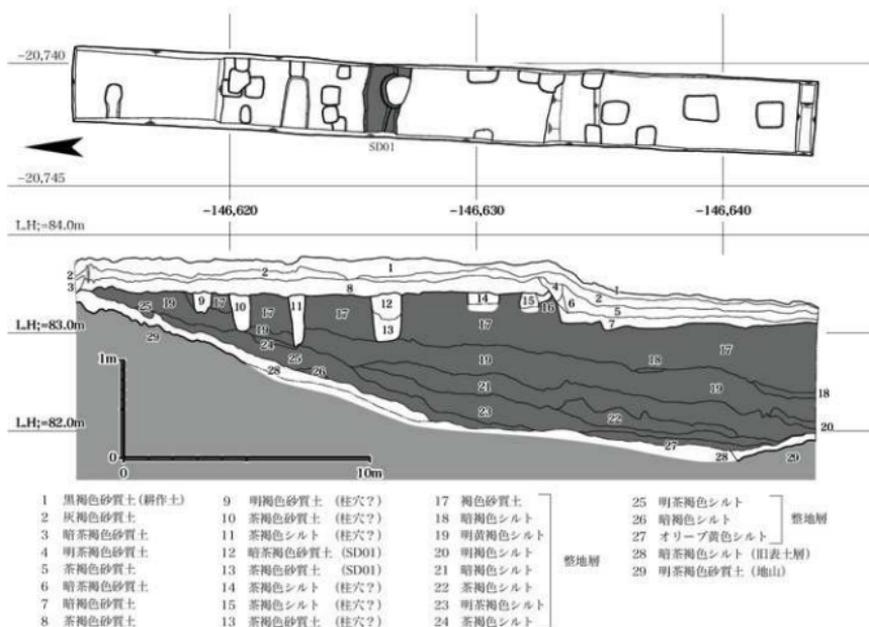
立会調査 R02.3.42.5 西壁土層図(縦:1/50・横:1/200、南北を反転して図示)



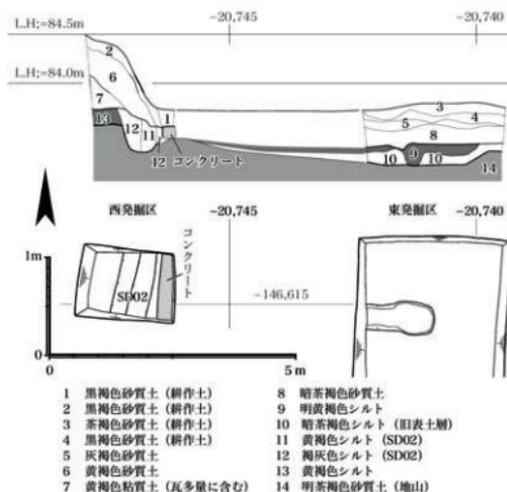
HJ 第731次調査 発掘区配置図 (1/400)・東西土層概念図 (縦: 1/50・横: 1/400)

立会調査 R02.3425 では、整地層が大きく I ~ III の 3 層に分かれることが確認できた。一番下の整地層 I は、厚さ 0.1 m 程の均質な茶褐色系の土が数層堆積し、地山が南へ下降するに従い整地層の厚さも増してゆく。整地

層 II は白色粘土を主体とした層で、厚さは約 0.1 m ありほぼ水平に堆積する。整地層 III は、白色粘土を含む黄褐色系の土の薄い層が幾層も複雑に堆積する。版築とまでは言えないが、比較的丁寧な地業が想定できる。



HJ 第731次調査 東発掘区平面図 (1/200)・東壁土層図 (縦:1/50・横:1/200)



HJ 第731次調査 発掘区平面図 (1/100)・北壁土層図 (縦:1/50・横:1/100)



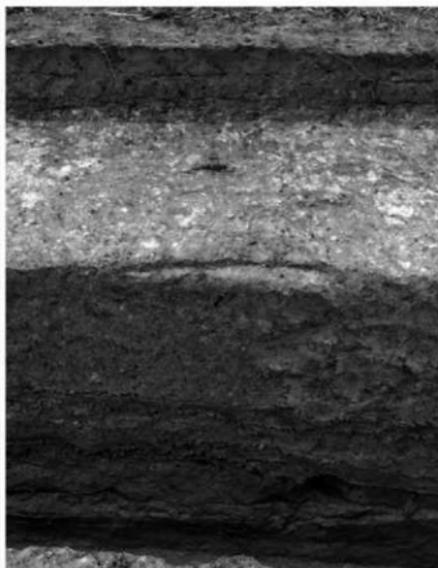
HJ 第731次調査 西発掘区全景 (南西から)



HJ 第731次調査 東発掘区全景（北から）



HJ 第731次調査 東発掘区全景（南から）



HJ 第731次調査 東発掘区南端部東壁土層断面（西から）

発掘調査区で確認した整地層は、その特徴から立会調査の整地層Ⅰに当たるものと考えられる。整地層Ⅱ・Ⅲが発掘区内まで及んでいたかは比高的に不明であるが、発掘区内で検出された奈良時代の溝等の遺構の残存状況から、調査地中央の南北の段差部分で途切れることも考えられる。いずれにせよ、もともと傾斜地であった当地に、大規模な造成が行われたことは明らかである。なおこの整地層の下層からは、後述する橿原市田中庵寺軒瓦ⅠA・ⅠBが出土している。

発掘調査は、整地土層の上面で遺構検出を行った後、さらに幅約1.0mの範囲で整地土を掘り下げ地山上面でも行った。

Ⅲ. 検出遺構

検出した遺構には、整地土層の上面で奈良時代の溝1条(SD01)と他に柱穴・土坑と考えられるものが数基あるが、調査範囲が狭く建物になるかは不明である。地山上面では調査範囲が狭く、遺構は確認できなかった。

また試掘・立会調査においても、顕著な遺構は検出できなかった。

SD01 幅約1.2m、長さ4m以上、深さ約0.5mの東西方向の溝で、東発掘区外東西へ続く。奈良時代の土器と共に、軒瓦Ⅰ6345型式A種(B群)、丸瓦、平瓦が多数出土した。平松庵寺造営後の遺構と考えられる。

SD02 西発掘区中央の段差の裾にある、幅約0.8m、長さ1m以上、深さ約0.4mの南北方向の溝。土層断面から掘り直しが確認できるが、時期は不明。

(中島 和彦)

Ⅳ. 出土遺物

遺物整理箱で7箱分の遺物(土器類1箱・瓦埴類6箱)が出土した。大半は瓦類で、奈良時代の土器が少量ある。

土器類 土器の多くは破片で、図示できるものは少ない。SD01からは土師器杯・蓋、須恵器杯B・蓋(1・2)等が、発掘区内の整地層からは、土師器杯、須恵器杯・蓋(3)等が出土している。

(中島 和彦)

瓦埴類 大半は丸瓦・平瓦であるが、軒瓦Ⅰ3点、軒平瓦3点がある。

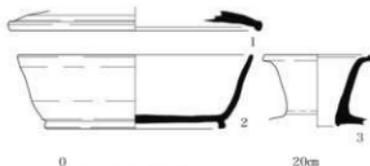
平松庵寺出土瓦類は色調・胎土・焼成具合から、表面が黒色で内部は淡褐色を呈し、胎土は緻密、焼成軟質のA群(口絵7)と、灰色を呈し、胎土に多量の白色砂粒が含まれ、焼成が硬質のB群(口絵8)に大別でき、A群が平松庵寺創建瓦で、B群が橿原市田中庵寺から運ばれた瓦であることが判明している¹⁾。今回の出土瓦類の検討から、表面が淡褐色、内部は黒色で、胎土は緻密、焼成軟質のC群が含まれることが判明した(口絵9)。



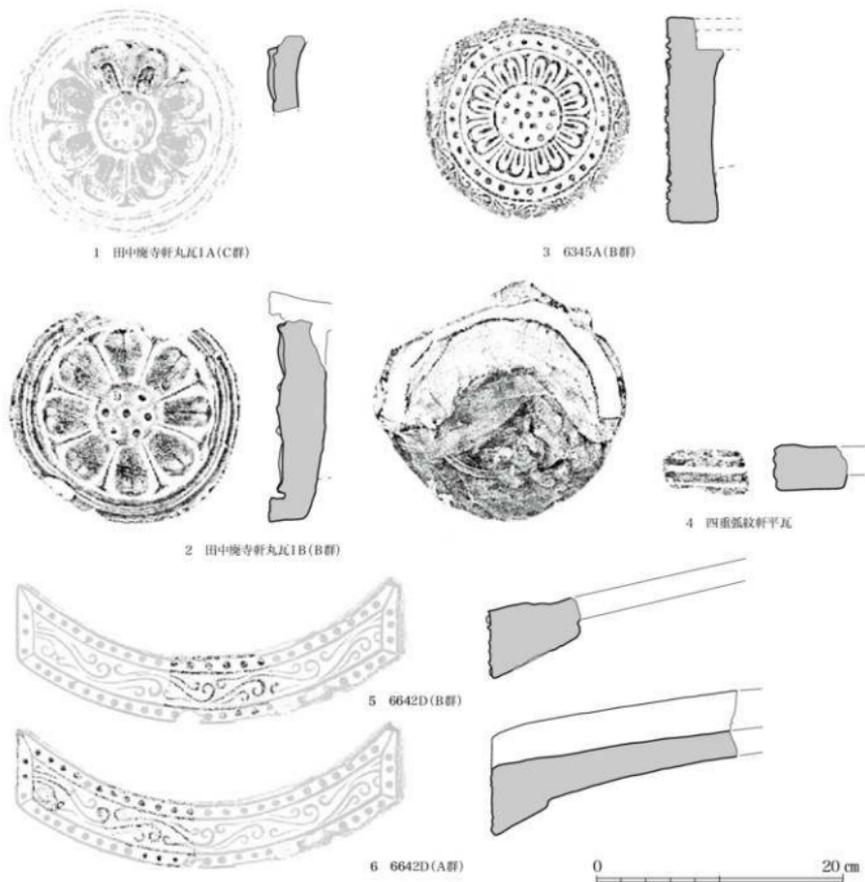
立会調査 R02.3425 掘削箇所全景 (北から)



立会調査 R02.3425 1区西壁土層断面 (東から)



HJ 第731次調査 出土土器 (1/4)



HJ 第731次調査 出土瓦類 (1/4)

1は外区に圏線を巡らす有子葉単弁蓮華紋の小片であるが、7世紀中頃の田中庵寺創建軒丸瓦であるIA種²⁾と実物照合の結果、弁の位置関係が一致し、同范とわかった。C群の瓦である。田中庵寺出土品では調整時のハゲ目が明瞭に残ることが特徴的だが、全体的に摩滅が著しく、瓦当裏面に接合線に沿うナデしか確認できない。胎土・焼成・色調は田中庵寺出土品と同じである。

2は外区に圏線を巡らす無子葉単弁蓮華紋軒丸瓦である(口絵6)。田中庵寺軒丸瓦IB種との実物照合の結果、間弁端から、外区の立ち上がりにかけての范傷が一

致し、同范であることがわかった。田中庵寺軒丸瓦IB種は、田中庵寺が藤原京に取り込まれた際の伽藍再整備期の瓦とみられている。B群の瓦である。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。丸瓦の剥離部分の観察から、接合される丸瓦は、凹面側をカットしているとみられる。瓦当裏面下半部には回転ナデとみられる痕跡が一部に残り、指による押圧の後、粗いナデを施す。瓦当側面下半部はヨコナデを施す。胎土・焼成・色調は田中庵寺出土品と同じである。

3は内区に複弁八弁蓮華紋を飾り、外区内縁に珠紋を、

外区外縁には偏行唐草紋を巡らす軒丸瓦 6345 型式 A 種である。平松廃寺ではこれまで A 群の 6345 型式 A 種しかみつかっていなかったが、本品は B 群である。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当側面・瓦当裏面は摩滅のため調整不明である。なお、田中廃寺でも 6345 型式 A 種は出土しており、本品と同じ B 群である³⁾。

4 は四重弧紋軒平瓦である。上から一つ目の弧線は他の弧線と比べて細く、田中廃寺軒平瓦 II B 種と同じ施紋原体によるものとみられる。頸の断面形態は段葺である。胎土は粗く、表面が橙灰色、内部が茶灰色を呈し、軟質である。

5・6 は内区に左方から右方へと偏行する唐草紋を飾り、外区には珠紋を巡らす軒平瓦 6642 型式 D 種であるが、5 は B 群、6 は A 群である。両者とも頸貼り付け削り出しの段葺で、凹面側瓦当付近をヨコケズりする。6 の凹面平瓦部には、横方向に 2 条の粘土の合わせ目が確認でき、粘土紐巻きつけ技法による成形とわかる。

丸瓦は 74 点 (12.841kg)、平瓦は 263 点 (45.011kg)、丸瓦・平瓦いずれか不明の瓦 40 点 (0.133kg) があるが、いずれも小片である。これらは胎土・焼成・色調から、A 群とみられる丸瓦 63 点、平瓦 188 点、B 群とみられる丸瓦 11 点、平瓦 62 点、C 群とみられる平瓦 1 点に分類できる。(原田 憲二郎)

V. 調査所見

今回の調査によって、十二坪北西部分では傾斜地を大規模に整地して平坦面を造成していることが明らかになった。整地の時期は奈良時代と考えられ、平松廃寺造営の一端が判明した。しかしながら、明瞭な建物遺構等は確認できず、平松廃寺内の様相については依然として不明である。今後の周辺の開発においてはさらに十分な注意を払う必要がある。

また平松廃寺出土瓦は、A・B・C 群に大別することができた。A 群の瓦が最も出土量が多く、8 世紀初頭の平松廃寺創建瓦である。B 群と C 群は A 群に比べ出土量が少なく、B 群は 7 世紀後半の田中廃寺伽藍整備期の瓦、C 群は 7 世紀中頃の瓦で田中廃寺創建瓦とみてよく、田中廃寺から運ばれて来たこととみられることから、平松廃寺の前身寺院が田中廃寺であったと考える。

(中島和彦・原田憲二郎)

補記 平松廃寺では、古くから瓦が採集されてきた。それら採集瓦のひとつに名古屋市博物館所蔵資料がある(田辺 1981・名古屋博物館 2006)。平成 29 年に、それらの採集者である山前陽氏から、採集地点等をご教示頂く機会を得たので、その内容について紹介する⁴⁾。



平松廃寺の位置と瓦採集地点 (1/5,000)

山前氏によれば、県立奈良病院の南側部分の擁壁設置工事中に採集したとのことで、その場所は図の位置となる。この場所は平松廃寺の寺院地と想定されてきた左京四条四坊十二坪ではなく、北側の十一坪の北辺にあたる。ただし、採集された軒丸瓦 5 種 12 点、軒平瓦 2 種 2 点(名古屋博物館 2006) は、これまで平松廃寺の発掘調査で出土した軒瓦とは異なる。

このようなことから、2通りの考え方ができる。ひとつは平松廃寺寺院地が十一・十二坪の 2 町古地であったとの考えである。この場合、十二坪は金堂院、十一坪が講堂院というように、軒瓦の違いは建物の違いに起因するものかもしれない。いまひとつは、十一坪にも別の寺院が存在したとの見方である。特に採集瓦の中には、平松廃寺・田中廃寺に同范例がみつからない 7 世紀後半の軒丸瓦があることは、この考えを補強する。

いずれにせよ、十一坪に遺構が残る可能性があり、留意すべきであろう。(原田 憲二郎)

注

- 1) 奈良市教育委員会 2019 「2. 平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松廃寺の調査 第 705 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 28 (2016) 年度』
- 2) 以下文中の田中廃寺の型式番号は、竹田政敬 1995 「平松廃寺一前身寺院は飛鳥に―」『シンポジウム古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所に拠る。
- 3) 橿原市教育委員会による田中廃寺出土品を写真実証確認した。田中廃寺出土軒瓦との実物照合にあたっては、橿原市教育委員会の松井一児氏のご協力を得た。
- 4) 山前陽氏のご息である、当センター職員山前智敬を通じてご教示頂いた。

参考・引用文献(刊行順)

- 田辺征夫 1981 「遺跡遺物からみた原始古代の伏見町」伏見町史刊行委員会『伏見町史』
名古屋博物館 2006 「名古屋博物館収蔵大和古瓦図録」

2. 菅原東遺跡埴輪窯跡群・平城京跡（右京三条二坊十五坪）の調査 第371次

事業名 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業
通知者名 奈良市長
調査地 奈良市西大寺国見町三丁目9

調査期間 平成9年1月7日～3月31日
調査面積 174㎡
調査担当者 鐘方正樹 原田香織

1. はじめに

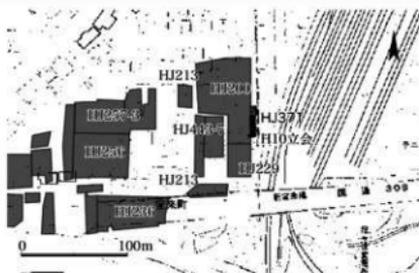
奈良市では昭和63年度から近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う発掘調査を開始し、平成29年度をもって30年間継続した調査をようやく終えることができた。事業範囲は総面積約32万㎡におよび、全域が平城京跡に相当する。そこで新設の区画道路位置に拘わらず、条坊遺構と各坪内の宅地利用状態を確認することを目的として全域を調査対象とする発掘計画が立てられた。

平成2年6月21日から右京三条二坊十五坪内の西半部で発掘調査を始めたところ、平城京造営時に削平されながらも下層に埴輪窯が残存しているのを確認できた。平城京の調査を終えて10月中頃から埴輪窯の調査に着手し、1～3号窯¹⁾とその灰原を鐘方・安井、4～6号窯とその灰原を中島・宮崎が担当して調査を進めた。調査が進展する中で遺跡の重要性が認識され遺構保存の協議が必要となったため、遺構を完掘せずに土層観察用あぜを残したまま平成3年2月で一旦調査を終了した。

調査後、遺跡保存の範囲や方法等について協議が行われ、市が窯跡群の一部を土地購入して街区公園を整備し、遺構表示施設を設けて公開することになった。ただし、土地の換地の都合で1～3・6号窯の位置に計画されていた区画道路の位置を変えることができなかったため、やむを得ずそれら4基の窯跡は切り取って公園内に移設保存することが決まった。この移設工事に伴う発掘調査が平成9年1月7日～3月31日に実施した平城京第371次調査である。調査終了後、遺跡保存整備報告と併せて調査報告書を作成する計画であったが諸般の事情で叶わず、これまで調査の内容は全く未報告のままである。調査から20年以上が経過し、区画整理事業も終了してしまったが、薄れゆく記憶を辿りながらここに調査の概要を記しておきたい。

II. 調査の経過

移設工事で壊される範囲の遺構を再検出することから始め、6号窯の灰原調査をまず行って移設工事に備えた。併行して、4基の窯跡の移設先である東発掘区及び4号窯東横における窯跡の有無を確認するための北発掘区を設定して調査した。1～3号窯は現地保存される可能性を考えて、第200次調査では上層整地土上面までで掘



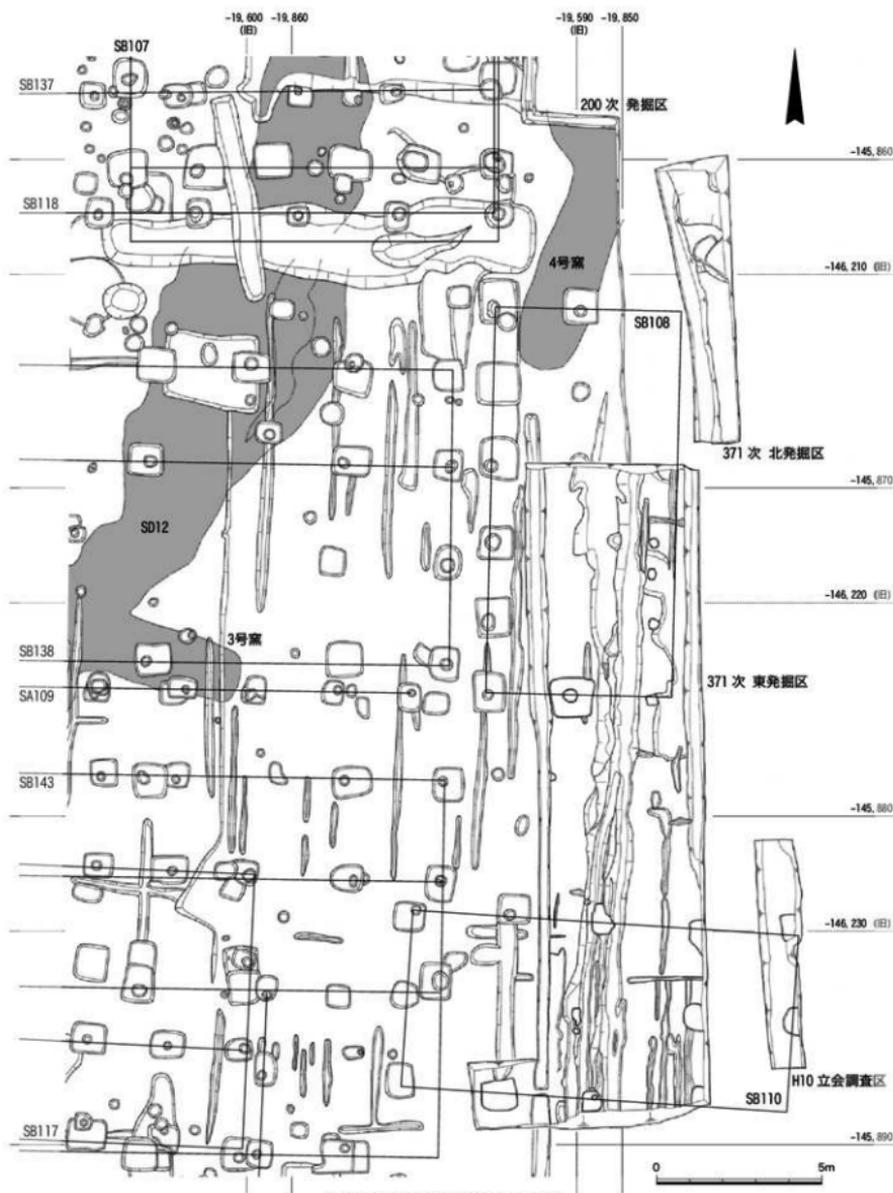
HJ 第371次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

削を止めて記録を作成していたので、まず下層整地土上面まで掘削して10cmコンタによる平面図を作成した。そして、1～3号窯の灰原に設定した土層観察用あぜを改めて観察して各土層の由来をできるだけ再確認しながら、各層ごとに掘削して遺物を取り上げた。下層整地土上面で全景写真撮影と平面図作成を行った後、下層整地土上面を掘り下げて、1～3号窯構築以前のSD12の状態を検出した。最後にSD12埋土を掘削してその構築時の形状を確認した。なお、1～3・6号窯内については移設保存のために新たな発掘を行わず、発掘は各窯周囲の壊される範囲のみで実施した。

調査終了後、直ちに1～3・6号窯の移設工事に着手した。各窯の周囲を幅1mほど掘削し、鉄骨で囲んで補強して発掘ウレタンで表面を包み込み、下に鉄板を挿し込んで遺構を切り離してクレーンで吊り上げ、あらかじめ設置しておいた公園内地下のコンクリートボックス内に安置した。そして、現地見学ができるように3号



移設工事中の2・3号窯 (南西から)



HJ371次調査 発掘区平面図 (1/150)

窯のみ覆屋を設けて露出展示し、その西側に型取りした作業面の敷設と剥ぎ取りした灰原土層を貼り付けて立体的に見学できるよう復元した。移設した1・2号窯はそれぞれ公園内表示箇所地下に、6号窯は露出展示する3号窯の南側地下に埋設してある。

なお、菅原にはお窯公園建設時に公園西面道路工事及び擁壁・側溝工事に伴って立会調査を実施している。前者の立会調査は平成9年8月27日に行い、土層断面を観察記録したとどまる。一方、後者の立会調査は平成10年12月15日に行ったが、遺構を確認したのでその内容もここに併載しておきたい（H10立会調査区）。

Ⅲ. 調査の概要

A. 東発掘区（104㎡）

3号窯東側の未調査箇所南北20m・東西5mの発掘区を設け、さらに南西隅を一部拡張して調査を行った。発掘区内の基本層序は、水田耕土の下に灰茶色土あるいは淡灰色土（厚さ0.05～0.1m）が堆積し、黄茶色砂質土あるいは黄灰色砂礫の地山となる。一段下がる東側には造成土（厚さ0.65m）を入れて、現地表を平坦に造成していた。



HJ 第371次調査 東発掘区全景（北から）

地山面は発掘区中央の南北溝を境にして東西で約0.6mの段差があり、水田造成時に東側が一段地下げされている。これに沿う南北溝は、水田耕作時の水路とみられる。地山面の標高は高い西側で72.3m、低い東側で71.3mである。南側でSB110の南北側柱穴の一部、北側でSB108の南妻柱穴とわずかに残る東側柱穴を確認した。これによってSB108が2×5間の南北棟建物で、桁行全長12.0m（柱間2.4m等間）・梁行全長5.0m（柱間2.5m等間）となることが判明した。

B. 北発掘区（15㎡）

4号窯の東側に南北8.5m・東西1.5～2mの発掘区を設けてさらに埴輪窯跡がないか調査した。発掘区内の層序は表土・造成土（厚さ0.2m）の下に旧耕土・淡灰色土（厚さ0.25m）が堆積して、茶色砂礫の地山となる。南半部は水田造成時に削平されて地山面は平坦であり、その標高は71.7mである。北側に北へ1.1m下がる傾斜面があり、これが4号窯構築面へと続いていくが、新たな窯跡は確認できなかった。

C. H10立会調査区（7㎡）

公園の東辺に沿って幅約1m掘削し擁壁と側溝敷設工事を行った際、公園南東隅付近で柱穴2基を新たに確認した。位置関係からSB110の北東隅柱穴と東妻柱穴と考えられ、SB110は2×4間の東西棟建物に復元できることが判明した。桁行全長11.4m（柱間2.85m等間）・梁行全長5.4m（柱間2.7m等間）となる。



HJ 第371次調査 北発掘区全景（南から）

D. 1～3号窯灰原と下層遺構SD12(約45m²)

公園西面道路工事及び移設工事によって壊れる1～3号窯の灰原とその下層遺構SD12を調査した。

1. SD12

西から東へ延びる低丘陵の先端に形成された東斜面

(発掘区北側)とそこから西へ入り込む小さな谷地形(発掘区南側)との間を貫くように掘削された南北方向の溝であるが、低丘陵東斜面と接続すると北西へ、谷地形と接続すると南東側へ屈曲して方向を変える。1～3号窯周辺の標高が72.5mで最も高く、そこでの深さは1.6～1.8mである。1号窯の残存高が0.5mほどであるため、周辺地形はさらに1m以上高かったと推測できるので、本来は3m近い深さがあったとみられる。まさに低丘陵を切通し状に掘削して構築されている。3号窯より北側は最大幅4mもあって幅広く、底には1.7～2.5mの平坦面が認められる。一方、南側は幅2.5mと狭くなり、底面も0.5mほどしか認められないため、断面はV字形に近い形状となる。このような特徴からみて、主に北側からの出入りを目的とする通路として機能した可能性が考えられる。

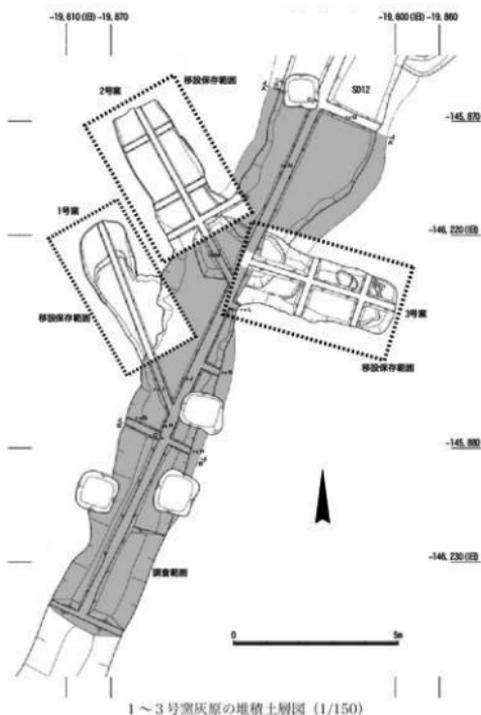
埴輪窯構築前の堆積土から布留式土器が出土するため、古墳時代前期の集落遺跡東限を区画するSD11の外側(東約7mの位置)に並行してSD12が掘削されたと考えられる。

2. 1～3号窯灰原

1～3号窯はSD12が0.6～0.9m埋没した時点でその溝壁面を利用し、地山を掘り抜いて構築されたと推定できる。焚口の高さがそれぞれ異なり、3号→2号→1号の順で高くなる点はSD12内に形成された灰原の堆積過程と連動しているため、その構築順序を反映している。最初につくられた3号窯が焚口を北に向けるのは、4～6号窯と方向性を整合させたためと思われるが、その後につくられた1・2号窯は焚口を南向きに変え主軸を揃えている。

灰原の堆積土層を観察して判明した1～3号窯の構築と操業の過程は概ね以下のとおりである。

3号窯構築直前に堆積した埴輪片を包含する炭混じり



1～3号窯灰原の堆積土層図 (1/150)



SD12堆積土層 (A-A'南から)



3号窯灰原 (北西から)

灰色土 (a 層) が 3 号窯より北側だけに堆積し、3 号窯構築時の整地土 (b 層) や 3 号窯操業当初 (床面 1) の灰原 (c 層) もやはり北側のみ広がる点から考えて、当初の出入りは SD12 機能時と同様に北側から行われていたと推測できる。この点は、4～6 号窯のある低丘陵東斜面において埴輪窯を構築できる適所が不足したために、SD12 の中へ入り込んで後から 3 号窯を構築したと考える想定と整合する。3 号窯操業当初の灰原 c 層を詳細に観察すると、中央に窯壁焼土が混在する抜き出し層を挟んで上下 2 層に黒色炭層が分かれるのを確認できたので、操業回数が 2 回であったことが判明した。その時期は 3 号窯床面 1 操業直後に堆積した窯体内改修

時排土 (h 層) 出土の須恵器杯身 (1・2) から MT15 型式期と想定できる。

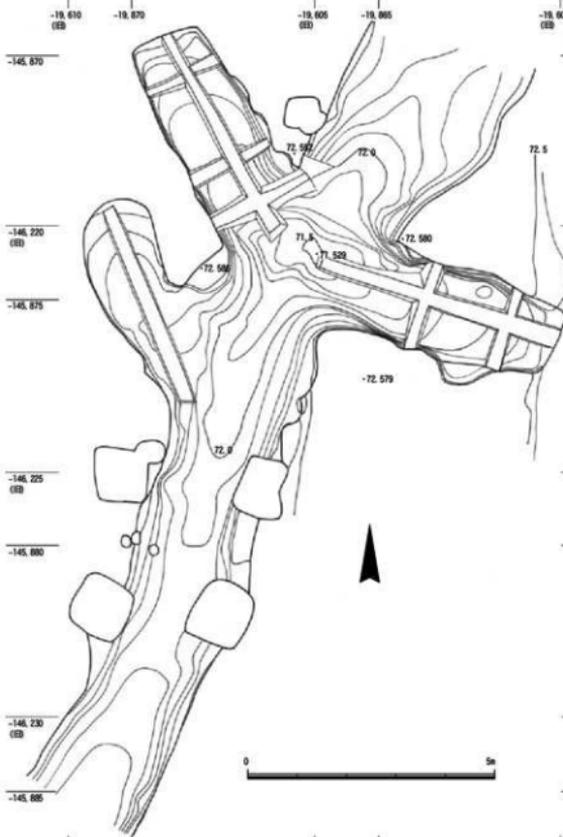
c 層の上には 2 号窯構築時の整地土 (d 層) が堆積し、2・3 号窯由来の灰原がその上に堆積する。したがって、3 号窯操業中に 2 号窯が構築され、両窯で同時期に埴輪焼成が行われていたことがわかる。d 層は 3 号窯の南側にも広がって堆積し、2 号窯の焚口を南向きに変える点も勘案すれば、この時に SD12 南側からも出入りができるよう整備されたと推測できる。2 号窯当初の操業時 (床面 1・2) には 3 号窯床面 2 が併焼し、この時点で 3 号窯北側は灰原堆積層でほぼ満たされて出入りが困難な状態となる。

2・3 号窯はともに床面 3 の時点で一度嵩上げ補修されており、その操業時から灰原は南へ大きく広がり始める。3 号窯床面 3 から TK10 型式期の須恵器杯蓋 (3) が出土している。その後、両窯の床面 4、2 号窯床面 6 と 3 号窯床面 5 での併焼を確認できる。3 号窯が先に閉窯し、2 号窯床 7 以降は単窯での操業が行われたとみられる。これによって、2 号窯焚口付近は灰原堆積層でほぼ埋没した。2 号窯床 7 に対応する層位から TK10 型式期の須恵器杯身 (7) が出土している。

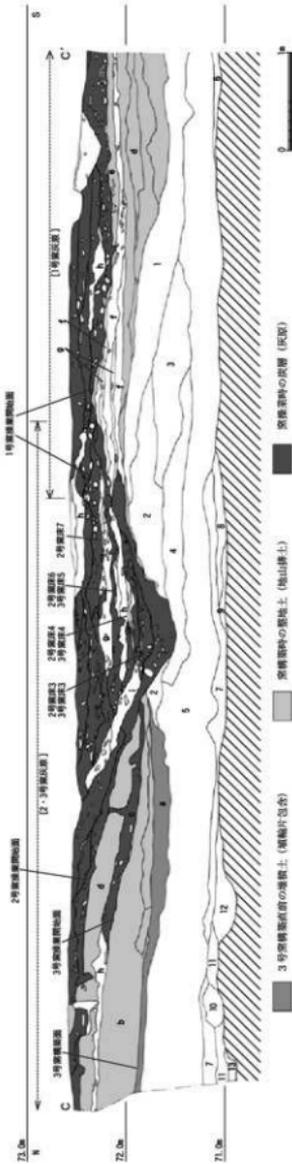
2 号窯に代えて 1 号窯がそのすぐ南側に構築される。1 号窯構築時の整地土 (e 層) が 1 号窯以南のみ堆積し、1 号窯由来の灰原堆積層のみがその上に堆積するので、1 号窯は単独で操業されたと推定できる。1 号窯の灰原堆積層は黄色土・焼土ブロック混合土 (h 層) によって上下に分かれるが、この層を窯体内改修時の整地土とみれば、床面 3 構築時の嵩上げ補修に対応する可能性がある。1 号窯の灰原下層から TK10～MT85 型式期の須恵器杯身 (4・8)、灰原上層から MT85～TK43 型式期の須恵器杯蓋 (5・6)・杯身 (10～12)・横瓶 (14)、1 号窯廃絶後の SD12 堆積層から TK209～TK217 型式期の須恵器杯身 (9・13) が出土した。

E. 6 号窯灰原とその下層 (約 10m)

6 号窯の移設工事によって壊れる灰原部分を基盤層まで掘削し、遺構面の形成過程について調査した。また、5 号窯と隣接す



2号窯操業開始面 (d層上面) と1～3号窯床面1の形状図 (1/100)

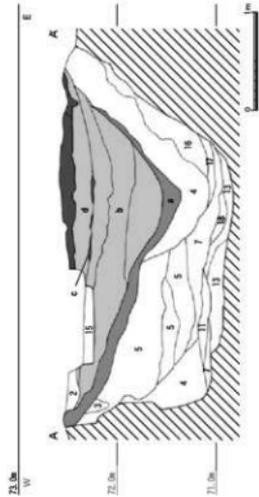


【1～3号遺構遺跡の上層】

- a. 黒褐色土
- b. 黒褐色土・シルト・フロック成分を含む褐色土 (3号埴輪遺跡の埴輪土)
- c. 黄色泥層 (3号埴輪遺跡当分の灰区)
- d. 黄褐色土・フロック成分土 (2号埴輪遺跡の埴輪土)
- e. 黄褐色土・フロック成分土 (1号埴輪遺跡の埴輪土)
- f. 赤褐色土 (埴輪多く含む)
- g. 赤褐色土 (埴輪多く含む)
- h. 黒色土・焼土・フロック成分土 (埴輪片包含の埴輪土)
- i. 黒茶褐色土

【SD12ほかの埴輪土層】

- 1. 暗茶褐色土 (埴輪土層含む、埴輪含まない)
- 2. 黄褐色土
- 3. 黄褐色土
- 4. 黄褐色土
- 5. 黄褐色土 (埴輪土層含む)
- 6. 黄褐色土
- 7. 黄褐色土・シルト混じり黄褐色土
- 8. 黄褐色土
- 9. 黄褐色土
- 10. 黄褐色土 (埴輪土層含む)
- 11. 黄褐色土・砂
- 12. 黄褐色土
- 13. 黄褐色土
- 14. 黄褐色土
- 15. 黄褐色土 (柱穴内土)
- 16. 黄褐色土・シルト混じり黄褐色土
- 17. 黄褐色土
- 18. 黄褐色土



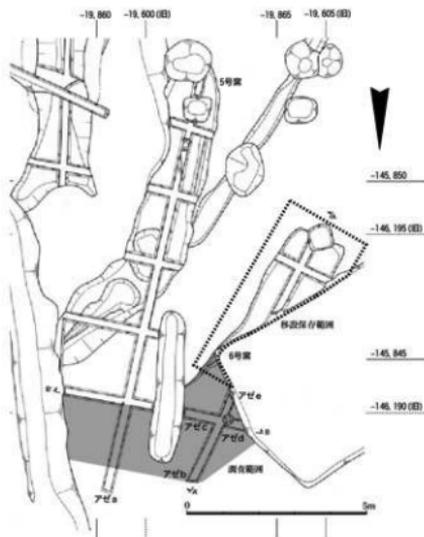
1～3号埴輪遺跡の埴輪土層図 (1/50)

るため、その灰原との層位の関係を検討するため、アゼcに沿って北側を約1.5m幅で掘削した（網伏せ部分）。

6号窯の焚口周辺は攪乱で壊されており、窯体と灰原の層位関係を直接確認できない。窯体は地山を掘り込んで構築され、その排土を灰原が形成される低い場所に広げて整地している。これが窯構築時の整地土（j）で、地山由来の黄色シルトブロックあるいは黄茶色砂礫ブロックで構成される。窯体北端にみられる床面1直上の黒色炭屑が整地土（j）直上の黒色炭屑と対応する可

能性はあるが、灰原の高さが床面よりも高くなる。整地土（j）の下には布留式土器を多く含む茶褐色土（7層）、灰茶色砂質土（8層）、暗青灰色砂質土（9層）が堆積して地山となる。茶褐色土は、3号窯より南側のSD12内に堆積する整地土（D）直下の暗茶褐色土と特徴が共通する点から考えて、SD12の北端延長上に形成された同様の包含層とみられる。

地山は幅1.5m前後の平坦面をつけて2段に北へ下がっている。北端に堆積する最下層の紫灰色シルト（11



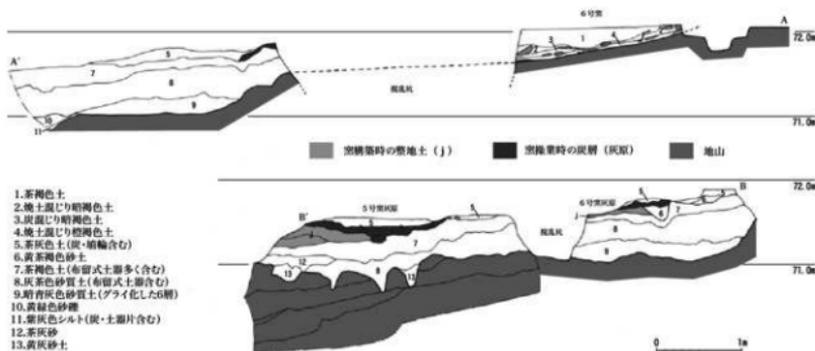
5・6号窯灰原の調査範囲と移設範囲図 (1/150)



6号窯灰原と下層の堆積土層 (南東から)



5号窯灰原と下層の堆積土層 (北から)



6号窯灰原の堆積土層図 (1/50)

層)には炭や土器細片(時期不明)が含まれる。

また、隣接する5号窯の灰原とも層位関係を直接確認できず、両窯の先後関係は不明である。ただし、5号窯灰原部分での層序も茶褐色土(7層)⇒整地土(j)⇒黒色炭層と同じであり、同時操業されていたと想定しても矛盾はない。整地土(j)直下でTK23型式期とみられる須恵器壺体部片(15)が出土しており、5号窯構築時期の上限を示す資料と考えられる。

IV. 出土遺物

遺物整理箱で48箱出土した。ほとんどが灰原出土の埴輪であり、次いで古墳時代の土師器・須恵器がある。飛鳥時代以降の出土遺物は極めて少量である。遺物整理ができていないため、ここでは埴輪窯操業時期に関わる須恵器と1～3号窯灰原出土の形象埴輪の一部について記す。

須恵器 1・2は3号窯床面1操業後に行われた改修時の排土(h層)から出土したと考えている須恵器杯身である。1は復元口径11.3cm、器高4.6cmで、約1/3を欠失する。2は完形で、口径12.0cm、器高5.3cm。3は3号窯床面3から出土したほぼ完形の須恵器杯蓋で、口径15.0cm、器高5.0cm。天井部と口縁部の境に線痕を残す。

4は2号窯床7に対応する黒色炭層から出土した須恵器杯身で、直接接合しないが同一個体と認める2片より図上復元した。復元口径12.4cm、復元器高4.9cm前後となる。

7・8は1号窯の灰原下層から出土した須恵器杯身である。7は約1/2が残存し、口径12.7cm、復元器高4.75cm前後。8は約1/3が残存し、復元口径14.7cm、復元器高5.2cm。

5・6の須恵器杯蓋、10～12の須恵器杯身、14の横瓶は1号窯の灰原上層から出土した。5は口縁部の約1/6が残存し、復元口径13.1cm、復元器高3.8cm前後。6は口縁部の約1/4が残存し、復元口径12.95cm、復元器高3.45cm前後。10は口縁部が約1/4残存し、復元口径12.0cm、復元器高3.9cm前後。11は約1/8が残存し、復元口径14.0cm、復元器高3.05cm。12は約2/3が残存し、口径14.15cm、器高4.0cm。14は口縁部が約1/2残存し、口径11.35cm、残存高3.5cm。口縁部外面に「x」のへら記号があり、体部外面にカキメ、体部内面に青海波文の当て具痕が残る。

15は5号窯構築時の整地土直下から出土した須恵器壺の肩部片で、肩部最大径は14.0cmに復元できる。体部下半にカキメ調整を行い、肩部との境に弱いヨコナデで2条の凹線をつけてその下に1条の波状文を入れる。約1/3の残存部分に穿孔を確認できないが、甕の可能性もある。

形象埴輪 16は家形埴輪の隅角部分で、外面タテハケ調整、内面ヨコナデ調整を行う。方形の一部が残り、

その側面に沿って二条の線刻がある。2号窯床4・3号窯床4に対応するh層から出土した。

17は朝形埴輪の鉄部である。鉄部を形成する粘土板を筒形の矢筒部に上から挿入し、下半を矢筒部及び左右の背負板と接合した後、端部を削って全体形状をつくり出し指ナデ調整する。表面に鉄6本と背負板の覆輪・連弧文様を線刻し、線刻刻の下端に沿って4個の粘土粒を横一列に貼り付けている。1号窯灰原上層から出土した。

18は盾形埴輪の側面端部である。周縁を二条の平行沈線で線取りし、内部には1条の沈線で鋸歯文を描く。2号窯床4・3号窯床4に対応する黒色炭層から出土した。

19・20は石見型埴輪の一部とみられる。19は上方へ通常尖るように伸びる部分を切り取ったような形状をしている。表面中央付近に一つの刺突孔があるが、裏面まで貫通しない。20は上方へ伸びる鱗状の破片で円筒形体部からの剥離面が残る。平行する横方向の二条の沈線を表面に描くが、端部まで達していない。19は2号窯床6・3号窯床5に対応するg層、20は1号窯灰原下層から出土した。

21は人物埴輪の手の部分で、2号窯床3、3号窯床3に対応する黒色炭層から出土した。

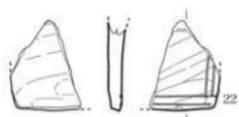
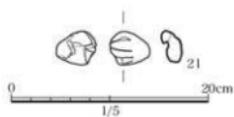
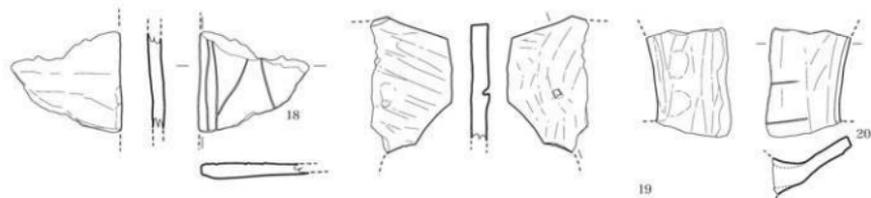
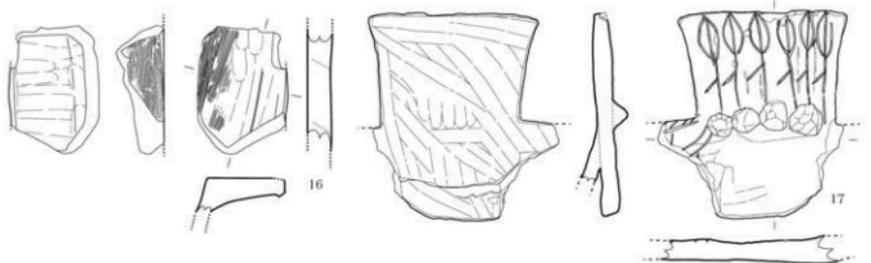
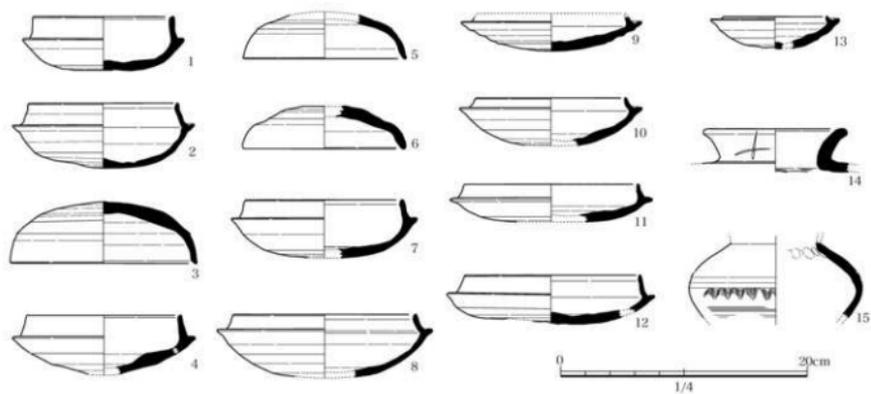
22は盾形埴輪あるいは盾持人物埴輪の一部と思われる。表面の周縁を二条の平行沈線で線取りする。1号窯構築時整地土下のf層から出土した。

23は不明形象埴輪の一部である。二条の平行沈線で文様を描き、文様内部の一部に粘土粒を貼り付ける。2号窯最終操業の床面9に対応する黒色炭層から出土した。

V. 調査所見

1～3・6号窯の移設保存工事に伴ってやむを得ず保存できない箇所を中心に発掘調査を実施し、埴輪窯跡群の構築順序や操業時期について再確認できた。低丘陵東斜面地の4・6号窯が造られた後、1～3号窯がSD12の中に構築される。1～3号窯の構築順序と時期は、その灰原堆積土の層序や出土須恵器からみて、3号窯単独操業(MT15型式期)⇒2・3号窯同時操業(TK10型式期)⇒2号窯単独操業(TK10型式期)⇒1号窯単独操業(TK10～TK43型式期)と推定できる。埴輪生産のピーク時はTK10型式期であり、現在判明している供給先の天理市星塚古墳群や大和郡山田市水晶塚古墳等へはまさにこの時期に搬出されている。奈良盆地中央の低地に築造される古墳群への埴輪供給を担うのが菅原東遺跡埴輪窯跡群の一つの役割であったと考えられる。(鐘方 正樹)

註1) 本稿における遺物番号と各埴輪の床面番号は「菅原東遺跡の調査 第200次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』(奈良市教育委員会1992)の記載に従う。



HJ 第200次・371次調査 出土土器・形象埴輪



1～3号窟 全景(北から)



1～3号窟 全景(南から)



1～3号窯とSD12 完掘状態（北東から）



1～3号窯とSD12 完掘状態（南西から）



1号窯（南東から）



2号窯（南東から）



3号窯（北西から）



SD12と2号窯操業開始面（南西から）



5・6号窯灰原下層調査区（東から）

3. 平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査 第728次

事業名 宅地造成

届出者名 株式会社 ブラチナステージ

調査地 西大寺北町1丁目387-2,-3,-4,-7,-8

調査期間 平成30年10月2日～10月10日

調査面積 120㎡

調査担当者 中島和彦

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原による平城京右京北辺三坊六坪の北西隅にあたる。六坪内では、過去に発掘調査が4件行われている。市HJ第618次調査では奈良時代の柱穴と土坑を検出しているものの、その他の調査では顕著な遺構は確認されていない。今回の発掘調査は、六坪内での奈良時代の遺構の確認を目的として行った。

II 基本層序

発掘区内の層序は、発掘区西端で上から造成土(1)、耕作土(2)、灰色砂質土(3)、淡灰色粘土(6)、淡茶灰色粘土(7)とつづき、現地表下約1.0mで地山の明黄褐色粘土となる。地山面は東に向かい下降し、東端では現地表下約1.6mで明灰色粘土の地山となり、その上に淡茶褐色粘土(8)と淡茶灰色粘土(9)が堆積する。地山上面の標高は、発掘区西端で75.5m、東端で74.8mである。遺構検出は地山上面で行った。



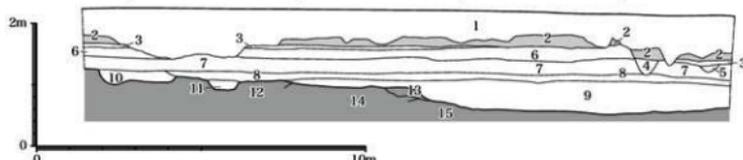
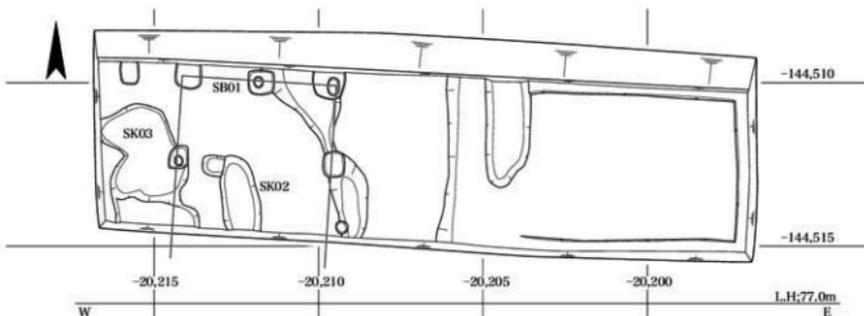
HJ第728次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

III 検出遺構

奈良時代の掘立柱建物1棟と土坑2基がある。

SB01 梁行2間(4.8m)、桁行2間以上(5.7m以上)の南北棟掘立柱建物で、北側妻柱を確認し発掘区外南側につづく。

SK02 東西約1.2m、南北2.3m以上、深さ約0.15



- | | | | | |
|-------------|-----------|---------------------|-------------------------------|---------------|
| 1 造成土 | 5 淡黒灰色砂質土 | 8 淡茶褐色粘土 | 11 暗茶灰色粘質土
(炭・土器多く含む SK02) | 13 明黄褐色粘土(地山) |
| 2 黒褐色土(耕作土) | 6 淡灰色粘土 | 9 淡茶灰色粘土 | 12 明黄褐色粘土
(砂礫含む・地山) | 14 灰色砂(地山) |
| 3 灰色砂質土 | (中や砂を含む) | 10 暗茶褐色粘土
(SK03) | | 15 明灰色粘土(地山) |
| 4 黒灰色土 | 7 淡茶灰色粘土 | | | |

HJ第728次調査 遺構平面図 (1/150)・発掘区南壁土層図 (横1/150・縦1/80、図面は東西を反転)



HJ第728次調査 発掘区全景（東から）

mの平面長楕円形の土坑で、発掘区外南側につづく。奈良時代後半の土器と瓦とともに、製塩土器の破片がまぎって出土した。

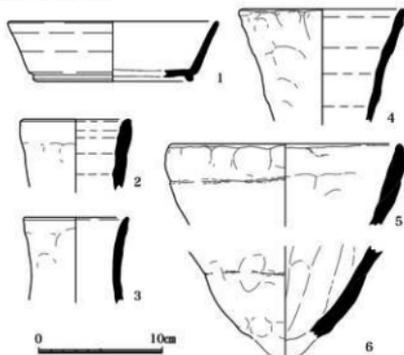
SK03 東西約2.6 m、南北3.7 m以上、深さ約0.25 mの平面不整形の土坑で、発掘区外南側につづく。

IV 出土遺物

遺物整理箱2箱分の土器類と瓦類がある。土器類は、奈良時代後半の土師器、須恵器、製塩土器で、瓦類は軒丸瓦1点(6236A)・軒平瓦1点(6691A)・丸瓦・平瓦である。土坑S SK K 02 出土資料を報告する。

SK02からは、土師器碗・高杯・甕、須恵器杯・壺・甕が合計約50点、製塩土器が約120点(約1.2kg)、軒丸瓦1点、丸瓦・平瓦が24点(約2.4kg)出土した。

1は須恵器杯Bで、2～6は製塩土器である。製塩土器は小破片が多く、全形をうかがえるものは少ない。2～4は体部が筒形の器形で、2と4の内面はヨコナデ調整による凹凸がはげしい。5と6は鉢形の器形で、器壁が厚く内面は口縁部を除き縦方向のナデ調整である。いずれも外面は未調整で不規則な凹凸があり、粘土組接合痕が残るものもある。この他内面に布目が残る内型作り



HJ第728次調査 SK02出土土器(1/4)

のものが少量ある。

V 調査所見

調査の結果、六坪内には奈良時代の遺構が存在することが確認された。建物の全容は不明なものの、出土遺物から奈良時代後半以降のものと考えられ、出土遺物には製塩土器の比率が高い特徴が指摘できる。(中島 和彦)

4. 平城京跡（右京北辺坊・西四坊大路）の調査 第732次

事業名 大和中央道街路整備単独事業
 通知者名 奈良市長
 調査地 西大寺赤田町二丁目 812 - 1 他

調査期間 平成31年2月25日～3月15日
 調査面積 120㎡
 調査担当者 安井宣也

I. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京北辺坊北西隅の西四坊大路とその西隣接地にあたる。また、京北条里の三条一里の南辺部で、鎌倉時代の「大和国添下郡京北条里班田図」（年代不詳、東京大学所蔵）や「西大寺与秋篠寺堺相論絵図」（1302年、同所蔵）に描かれた「赤皮田池」がすぐ東方に推定される。地形的には秋篠川支流の赤田川の河谷内の低地及び丘陵裾の微高地に位置する。宅地化する前は水田で、「赤皮田池」の推定地付近では、河谷を北西から南東及び南北に横切る大畦畔に囲まれた範囲に2条の旧流路の名残が認められた。

調査地の約50m南東の右京北辺坊内では、平成19年度に市HJ第591次調査を実施し、丘陵斜面が厚いシルト・砂互層で覆われた後に水田化することがわかった。河谷の対岸の丘陵斜面で実施した赤田横穴墓群の市第1～3次調査（昭和58年度、平成22・23年度）では、古墳時代後期～飛鳥時代の横穴墓を16基確認し、丘陵斜面では奈良～室町時代前半に形成された古土壌（森林を反映する可能性）の上が厚さ1mほどのシルト・砂互層の堆積層で覆われた後に水田化することがわかった。

今回の調査は、右京北辺坊の北西隅及びその西隣接地の様相の確認を主な目的とし、道路予定地内の丘陵裾の微高地にA・B発掘区、低地にC発掘区の計3箇所の発掘区を設定して実施した。なお、C発掘区は西四坊大路の想定地、A・B発掘区は京外である。

II. 基本層序・検出遺構

A発掘区（12㎡） 現GL-2.7m（標高88.8m）まで掘り下げた。層序は、宅地の造成土（厚さ0.1m）の下に旧水田耕土・床土層（同0.5m）、丘陵裾の微高地の堆積層（同1.6m）があり、その下に沼沢地の堆積層（同0.4m）、流路か旧河川の堆積層となる。丘陵裾の微高地の堆積層はシルト・砂互層や砂・礫互層、沼沢地の堆積層はシルト層、旧河川の堆積層は砂層である。検出遺構・出土遺物はない。

B発掘区（9㎡） 現GL-1.2m（標高88.4m）まで掘り下げた。層序・層相はA発掘区とほぼ同様で、旧水田耕土・床土層（同0.3m）、丘陵裾の微高地の堆積層（同0.7m）があり、その下に沼沢地の堆積層（同0.15



HJ 第732次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



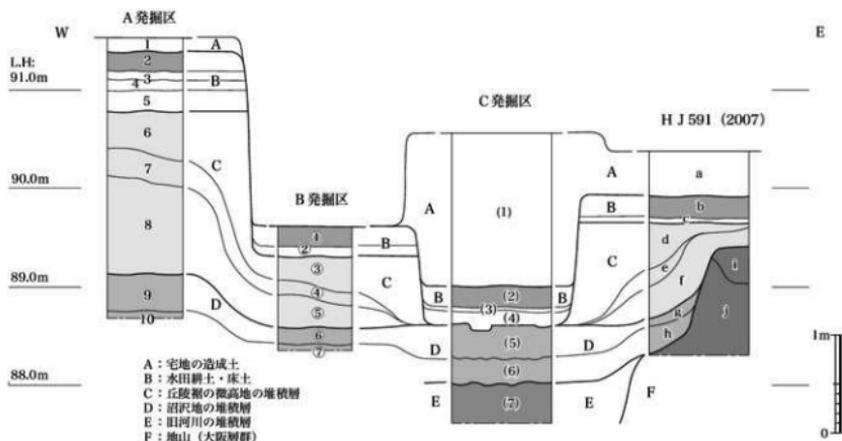
HJ 第732次調査 周辺の田状と遺跡・調査地
 (奈良文化財研究所作成地形図に加筆、1/8,000)

m)、旧河川の堆積層となる。

検出遺構・出土遺物はない。

C発掘区（99㎡） 発掘区の南半部で現GL-3.0m（標高87.5m）、北半部で同-2.0m（同88.5m）まで掘り下げた。層序は、宅地の造成土（厚さ1.5m）、旧水田耕土・床土層（同0.4m）の下に沼沢地の堆積層（同0.3m）、流路か旧河川の堆積層（同0.3m）があり、その下に低地の基盤層となる。沼沢地の堆積層は粘土・砂互層、旧河川の堆積層は礫混じり砂層である。低地の基盤層は粘土層である。

発掘区の南部では検出遺構はない。北半部では、旧水田床土層の灰白色シルトブロック層（土層図(4)層）とその直下の灰白色シルト・砂互層（同(5)層）の各上面で遺構検出を行い、前者では耕作溝、後者では人の足跡らしい窪みを検出した。



【A発掘区】

- 1 造成土
- 2 暗灰色シルト質砂
- 3 暗黄褐色シルトブロック
+浅黄色砂
- 4 にぶい黄色砂
- 5 灰白色粘土
- 6 灰色シルト混砂・砂互層
- 7 灰色砂・礫混じり砂互層
- 8 灰白色シルト・砂互層
- 9 灰白色シルト
- 10 灰白色砂

【B発掘区】

- ① 暗灰色シルト質砂
- ② 灰色シルト質砂
- ③ 灰白色シルト・砂互層
- ④ 灰白色砂・礫互層
- ⑤ 灰白色砂・粘土互層
- ⑥ 灰白色砂質粘土
- ⑦ 淡黄色礫混じり砂

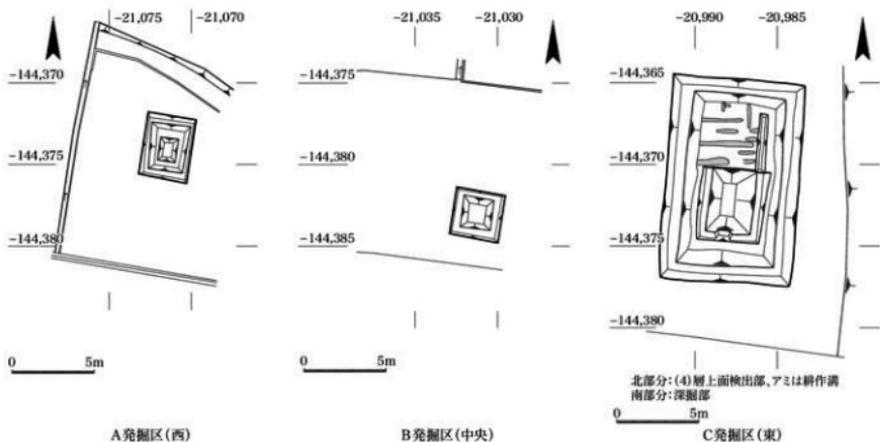
【C発掘区】

- (1) 造成土
- (2) 暗灰色シルト質砂
- (3) 灰白色シルト質砂
- (4) 灰白色粘土ブロック
- (5) 灰白色シルト・砂互層
- (6) 灰白色礫混じり砂
- (7) 明緑灰色粘土

(HJ591)

- a 造成土
- b 暗灰色シルト質砂
- c 淡灰色砂質土
- d 青灰色粘土・シルト・砂互層
- e 灰白色砂
- f 青灰色粘土・灰白色砂互層
- g 青灰色粘土
- h 灰白色砂
- i 灰白色砂質土
- j 灰白色粘土

HJ591・732次調査 土層柱状図 (縦: 1/50)



HJ 第732次調査 発掘区平面図 (1/300)

III. 出土遺物

C発掘区の灰白色シルトブロック層（土層図（4）層）から、古墳時代後期の円筒埴輪片や時期不明の丸・平瓦片、17世紀以降の肥前産磁器碗・信楽産摺鉢・土師器皿の破片が遺物整理箱で1箱分出土した。

IV. 調査成果

奈良時代の遺構はなかった。

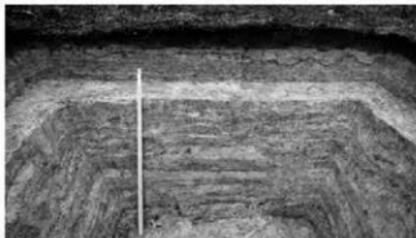
調査地付近の丘陵斜面は厚いシルト・砂互層の堆積層で覆われ、丘陵裾の低地では沼沢地の堆積層上を覆って

微高地を形成することが確認できた。同様の堆積層は河谷対岸の赤田横穴墓群のある丘陵にも認められ、奈良～室町時代前半の古土壌を覆うことから、室町時代の森林伐採に伴う土砂流出を反映する可能性がある。

低地の旧水田床土直下でみられる沼沢地の堆積層及びその下層の流路が旧河川の堆積層が鎌倉時代の「赤皮田池」と関連する可能性がある。宅地化前の水田は、西方の菖蒲下池を水源とする水利形態と一連で江戸時代にその原形が形成された可能性が高い。（安井 宣也）



A発掘区 上：全景（北から）、下：東壁土層断面（西から）



B発掘区 上：全景（西から）、下：西壁土層断面（東から）



C発掘区 南半部（南西から）



C発掘区 北半部検出遺構（東から）



C発掘区 深掘部東壁土層断面（北西から）

5. 平城京跡（左京六条三坊十二坪）の調査 第723次

事業名	宅地造成	調査期間	平成30年4月23日～5月22日
届出者名	株式会社やまと不動産	調査面積	348㎡
調査地	大安寺二丁目48-1番地他	調査担当者	吉田朋史

I. はじめに

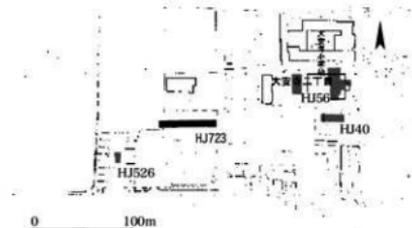
調査地は平城京の条坊復原では左京六条三坊十二坪中央の東側及び北側にあたり、約150m東側には大安寺が位置する。十二坪内中央には東堀河が南北に貫流しており、その遺存地割と東側接続地に相当する。調査地周辺での東堀河調査事例は、北側約200mの地点で実施した市HJ第52次調査（昭和58年）、北側約160m地点で実施した市HJ第141次調査（昭和62年）があり、幅約5.8m・深さ0.7mであることが確認されている。今回の調査は、東堀河の確認とその東側に接続する宅地の様相解明を目的として、東西58m・南北6mの発掘区を設定し、調査を実施した。

II. 基本層序

発掘区内の基本層序は、上から順に黒褐色砂質土（耕作土、厚さ0.2m）、灰褐色砂質土（床土、厚さ約0.1m）、灰黄褐色砂質土（旧耕作土、厚さ約0.2m）、茶褐色砂質土（約0.2m）の順に堆積し、現地地表下約0.7mで灰黄色砂・灰黄褐色砂質土の地山上面（標高57.0～57.2m）に至る。地山面は西側に向かって緩やかに傾斜している。

III. 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、奈良時代～平安時代の掘立柱列4条（SA01～04）、掘立柱建物2棟（SB05・06）、東堀河と推定される南北方向の溝1条（SD07）、東西方向の溝4条（SD08～11）、井戸2基（SE12・



HJ 第723次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

13)、土坑1基（SK14）、舟入遺構1基（SX15）を検出した。以下、その概要について述べる。

SA01 東西方向4間以上の掘立柱列である。柱間は3.0m等間、西から1間目の柱穴は新しい土坑に壊されている。発掘区外東側に延びる可能性が高い。

SA02 東西方向4間の掘立柱列である。西端の柱間が広く見えるのは西から1間目の柱穴が残存しないためである。重複関係からSD08より新しい。

SA03 東西方向2間の掘立柱列である。

SA04 東西方向3間の掘立柱列である。西から2間目の柱穴がSK14に壊されている。

SB05 梁行2間の南北棟掘立柱建物で、発掘区外南側へ続くと考えられる。梁行柱間は3.6m等間。妻柱穴がSK14に壊されている。

HJ 第723次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (間)		全長 (m)	柱間 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		桁行 × 梁行					
SA01	東西	4間以上		12以上	3.0等間	0.2	西から1間目の柱穴は残存しない
SA02	東西	4間		10.3	西から4.5-1.5-1.9-2.4	0.2～0.5	SD08より新しい
SA03	東西	2間		6.5	西から3.5-3.0	0.1～0.2	
SA04	東西	3間		8.6	西から3.2-2.7-2.7	0.2	西から2間目の柱穴がSK14で壊される
SB05	南北	1間以上 × 2間		不明	梁行3.6等間	0.1～0.2	SK14より新しい
SB06	南北	2間 × 2間		3.3	桁行1.8-1.5、梁行1.3等間	0.2～0.3	SD11より古い

遺構番号	掘方等			井戸枠		時期	主な出土遺物
	平面形態	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)		
SE12	楕円形	東西2.6 南北2.3	1.9以上	採取の為不明		8世紀後半	土師器・須恵器・奈良三彩小壺
SE13	不整形	東西2.5 南北2.2	1.5	方形横板組	一辺0.6	10世紀末～11世紀初頭	土師器・須恵器・黒色土器・灰輪陶器・瓦器、銅鏡・曲物



HJ 第723次調査 SD07 (南から)

SB06 梁行2間・桁行2間の南北棟掘立柱建物で、南西隅柱穴が残存しない。梁行柱間は1.3m等間、桁行柱間は北から1.8-1.5m。重複関係からSD11より古い。

SD07 東堀河と考えられる南北方向の溝である。東岸から約4.3mまでを検出したが、西端は発掘区外のため全幅は不明である。検出面の標高は56.6mで、検出面から最深部底面までの深さは約0.7mである。東側より検出面が約0.4m低く後世に削平を受けていると判断され、本来は深さ1.1m前後あった可能性がある。断面形状は2段の逆台形で、河底はほぼ平坦である。河底の標高は55.9mで、市HJ第141次調査で確認した河底標高と同じである。

堆積土層は、下層から順に灰色粗砂、灰色細砂、黒褐色粘質土、淡灰色細砂、暗灰色粗砂、灰色細砂となる。埋土から奈良～平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、軒丸瓦(6225-A)、平瓦、丸瓦の他、墨書土器や土馬が出土した。

SX15 東堀河(SD07)の東側に接続し、船入に関わる遺構と推定される。北端が発掘区外へ続くものの、平面形は概ね東西に長い長方形である。規模は東西17.0m、南北6.0m以上、深さ0.8m。西端が幅2.2mまで狭まり少しくびれて東堀河と接続するが、接続箇所の底は0.2

m前後高まる。東堀河底との高低差は0.3mである。埋土は上から茶褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、暗灰色粗砂で、底には部分的に粗砂が堆積する。8世紀後半の土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器杯・壺・甕・平瓶、墨書土器、軒平瓦(6663-F・6663-J)、軒丸瓦(6314-A)、平瓦、丸瓦が出土した。

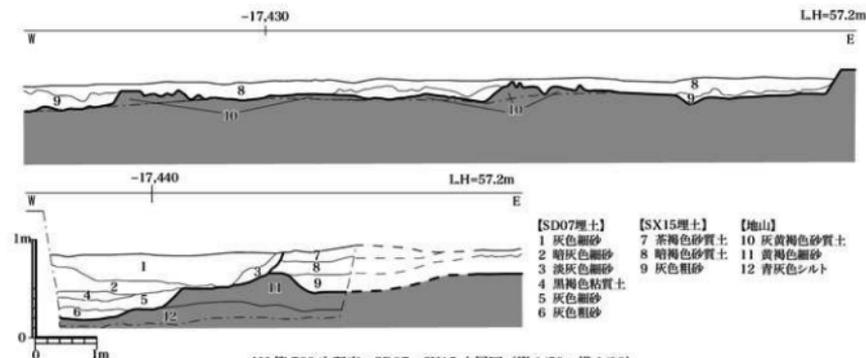
SD08 SX15の北東側に接続する東西溝で、長さ6.8m、幅0.4～0.7m、深さ0.1m。重複関係からSA02・SD10より古い。

SD09 SX15の南東側に接続し、SD08と併行する東西溝で、長さ5.2m以上、幅0.55～0.9m、深さ0.1m。SB05北西隅柱穴で東端が壊されるが、SD08と東端をほぼ揃えていたと考えられる。SD08とSD09の距離は心々で3.0～3.1mであり、この間に坪内通路を推定できる。重複関係からSD11より古い。

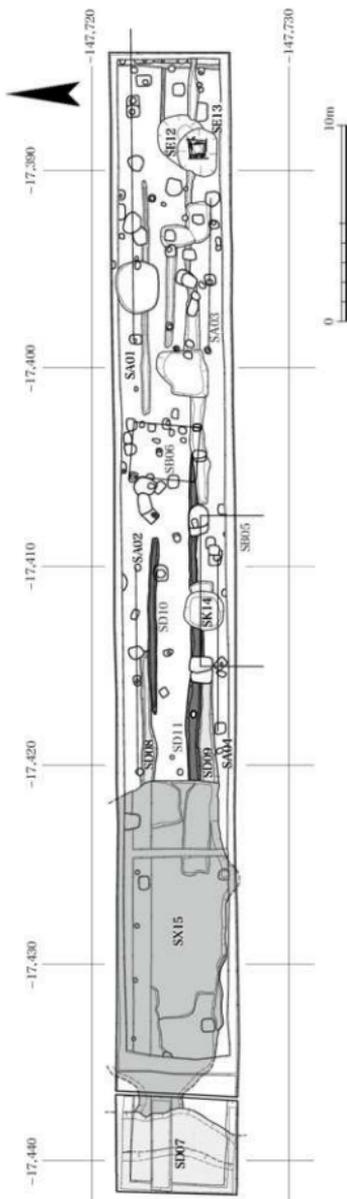
SD10 SD08の南側に沿って併行する東西溝で、長さ8.9m、幅0.4m、深さ0.05mである。重複関係からSD08より新しい。

SD11 SD09の北側に沿って併行する東西溝で、長さ16.5m以上、幅0.4～0.7m、深さ0.1mである。重複関係からSD09より新しい。SD10・11は、SD08・09の間に取まり併行することから、坪内通路の改修に伴う側溝と推定できる。両溝間の距離は、心々で2.1～2.4mである。

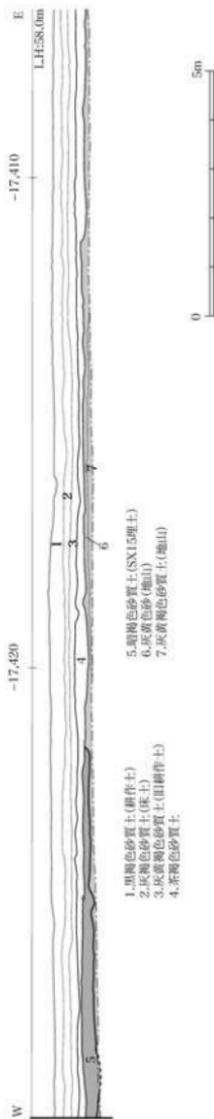
SE12 東西2.6m・南北2.3mの平面楕円形溝で、深さ1.9m以上の井戸である。井戸枠は抜き取られており、完掘できなかったため井戸底の構造は不明である。埋土は、上から黄褐色砂質土・淡灰色粘質土が堆積する。検出面から約0.3m下の中央北東よりの黄褐色砂質土から完形の奈良三彩小壺1点が、8世紀後半の土師器、須恵器とともに無蓋で出土した。



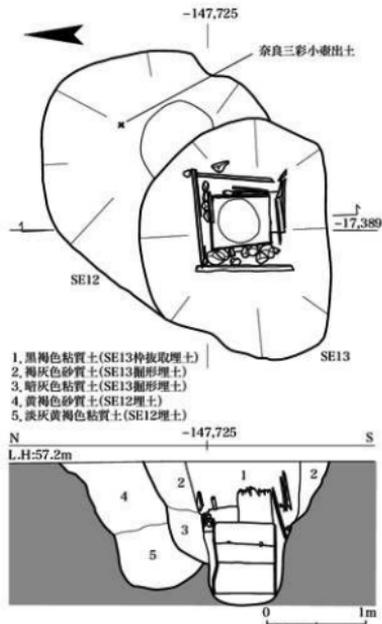
HJ 第723次調査 SD07・SX15土層図(縦1/50・横1/80)



HJ 第723次調査 遺構平面図 (1/250)



HJ 第723次調査 北壁土層図 (1/100)



HJ 第723次調査 SE12・13 平面・立面図 (1/50)



HJ 第723次調査 SE12・13 (西から)

SE13 東西2.5m、南北2.2mの平面不整形掘方内に方形井戸枠を組んだ深さ1.5mの井戸である。重複関係からSE12よりも新しい。井戸枠は2段構造になっている。下段は内法0.6m、高さ0.72mの方形横板組型で、1段目を目違納組、2段目を相欠き組でつくる。上段は内法0.9mの方形横板組型であるが、腐朽が著しくて仕

口構造等の詳細は不明。下段と上段の間に0.15mの平坦面を設けて段差をつくり、北側と西側に礎を敷くが、南側と東側には縦板を立てている。上段南面の横板の残存状態が悪い点からみて、縦板は補修時に追加された構造の可能性がある。枠内埋土は黒褐色粘質土で、10世紀末～11世紀初頭頃の土師器・須恵器・灰陶器・瓦類の他、銅碗、曲物が出土した。

SK14 平面隅丸方形で、南北1.8m、東西1.85m、深さ0.6mの土坑である。重複関係からSA04・SB05・SD11より新しい。8世紀後半頃の土師器が出土した。

IV. 出土遺物

出土遺物は遺物整理箱で31箱分が出土したが、大半はSD07・SX15出土遺物である。種別は、弥生土器、奈良時代の土師器・須恵器・奈良三彩小壺、軒丸瓦(6314-A・6225-A)・軒平瓦(6663-F・J)・丸瓦・平瓦・埴、平安時代の土師器・黒色土器・灰陶器、曲物、銅碗、釘、砥石などがある。

V. 調査所見

SD07(東堀河)と接続するSX15(船入遺構)を確認した。両遺構の堆積土層には重複関係があり、SX15が8世紀後半に先に埋没した後、SD07は10世紀頃まで存続して埋没することがわかる。しかし、SD07及びSX15の底には灰色粗砂が堆積しており、SD07の水位が0.5mを上回るとSX15に水が流れ込む構造となっていることから、8世紀後半以前の時期には同時に併存していたと推定できる。また、東堀河の下流にはその水位を調節するための施設がいくつかあったと仮定すれば、それと連動させてSX15に水を入れることで舟を坪内へ引き込んで荷揚げを行うことは可能であったと推定できる。

また、SX15の東端にSD08・09あるいはSD10・11とした2条の併行する東西溝が接続する。重複関係からSD10・11はSD08・09の内側に廻りなおした溝であり、SX15から東へ延びる坪内通路の南北側溝とその補修溝と考えられる。この坪内通路は十二坪を南北に2分割する位置にあり、宅地分割の機能も有している。SA01～04の掘立柱列は、この坪内通路に沿って認められることから、通路と宅地を区画するための跡跡と推定できる。

そして、SD11埋没後につくられたSB05・06、SE12・13は、8世紀後半以降にSX15とこれに接続する坪内通路がなくなり、宅地に編入された様相を暗示する。

このような船入施設とこれに接続する通路によって水運の荷揚げ場所を推測できる遺構は、平城京で初めて確認されたものであり、物資の輸送方法を具体的に検討できる点で重要な調査成果といえる。(吉田 朋史)



HJ 第723次調査 発掘区全景(東から)



HJ 第723次調査 SD07・SX15(南西から)

6. 平城京跡（左京四条条間路）の調査 第725次

事業名 宅地造成

届出者名 日本ハウスホールディングス奈良支店

調査地 四条大路三丁目979番1

調査期間 平成30年6月11日～6月22日

調査面積 200㎡

調査担当者 中島和彦 桑原一徳

1. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によれば四条条間路にあたり、西側には朱雀大路が位置する。西側隣接地では、平成7年に平城京第328次調査を実施し、四条条間路の南北両側溝と朱雀大路東側溝が検出しされ、その交差状況が確認できた。四条条間路は溝芯々距離で幅約8.4mあり、朱雀大路との交差点部分では、東側溝上に架けられた幅約7mの橋を確認した。

また、弥生時代の溝や土坑も見つかっており、平城京跡と重複して弥生時代の遺跡が周囲に存在することが判明している。

今回の調査は、四条条間路の検出及び、奈良時代以前の遺構の有無の確認を目的に、道路建設部分に東西40m、南北5mの発掘区を設定し調査を実施した。

II. 基本層序

発掘区内の層序は、発掘区西側で耕作土（厚さ約0.2m、土層図1・2、以下同じ）の下に灰色砂質土（約0.1m、3）、黄褐色砂質土（約0.1m、4）、明茶褐色砂質土（約0.2m、5）、弥生時代中期～後期の遺物を含む灰黄褐色砂質土（約0.2m、12）と続き、現地地表約

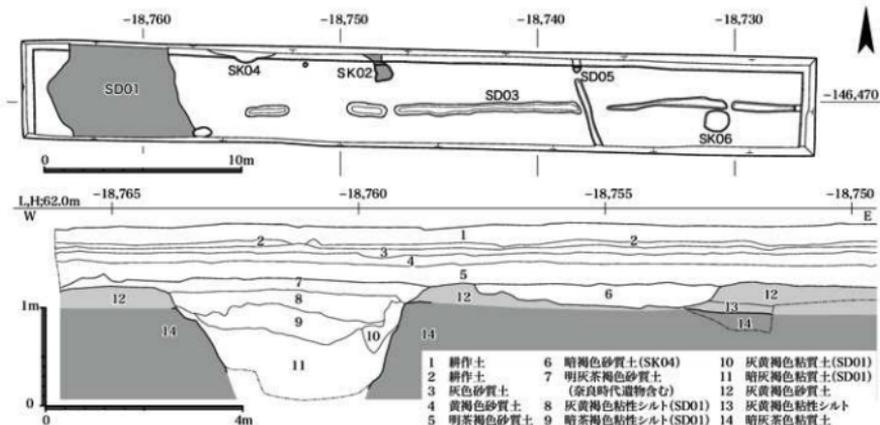


HJ第725次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

0.8mで暗茶褐色粘質土（14）の地山に至る。地山面の標高は発掘区西側で約60.0mである。発掘区東側では、明茶褐色砂質土の下に奈良時代以降の堆積土の暗茶褐色砂質土（約0.07～0.2m）がある。遺構検出は灰黄褐色砂質土の上面で行い、弥生時代後期、奈良時代以降の遺構を検出した。

III. 検出遺構

検出した遺構は、弥生時代後期の溝1条と土坑1基、奈良時代以降と考えられる溝1条と土坑1基、時期不明の溝1条と土坑1基がある。



HJ第725次調査 発掘区平面図 (1/250)・北壁土層図 (縦:1/50・横:1/100)



HJ 第725次調査 発掘区全景（西から）

弥生時代の遺構

SD01 東西幅 5.5～6.5 m、長さ 4.6 m以上の南北方向の溝で、発掘区外南北へ続く。検出面から約 1.1 m 掘り下げたが、底には至らなかった。埋土は上から灰黄褐色粘性シルト、暗茶褐色粘性シルト、暗灰褐色粘質土で、弥生時代後期の土器片が少量出土した。

SK02 東西 0.5～1.0 m、南北約 1.4 m以上の不整形の土坑で、発掘区北側へ続く。検出面からの深さは、約 0.1 mである。弥生時代後期の土器片が少量出土した。

奈良時代以降の遺構

SD03 幅 0.2～0.7 m、長さ 28.0 m以上の東西方向の溝で、発掘区外東西に続く。途中 4 か所ほど途切れているが、一連のものと考えられる。また西側の平城京第 328 次調査地内でも、同規模の溝がこの溝の延長上に存在しており、あるいは一連のものと考えられる。出土遺物が少量で、詳細な時期は不明である。

SK04 東西 5.0 m以上、南北 0.5 m以上の半円形の土坑で、大半が発掘区外へ続くため平面形状は不明である。深さは約 0.2 mあり、瓦が少量出土した。四条条間路の北側溝に近く、あるいはそのあふれ部分とも考えられる。

時期不明の遺構

SD05 幅 0.3～0.35 m、長さ 4.5 m以上の南北方向の溝で、発掘区外南北に続く。検出面からの深さは約 0.1 mで、北でやや西に振れる。遺物が出土せず詳細な時期は不明だが、主軸の方向がSD01と同じであることから見て奈良時代以前のものと考えられる。

SK06 東西 1.3 m、南北 1.0 mで平面楕円形の土坑で、検出面からの深さは 0.2 mである。遺物が出土せず時期は不明。

IV. 出土遺物

弥生時代中期～後期の弥生土器と奈良時代の土器（土師器・須恵器）、平瓦・丸瓦が、遺物整理箱で 1 箱分出土した。

V. 調査所見

今回の調査区は四条条間路の路面上に位置し、南北の側溝はいずれも発掘区外と考えられ、四条条間路の規模は確認できなかった。また、弥生時代後期の溝や土坑を検出し、周辺の調査と同様に同時期の遺構が存在することが明らかとなった。

(中島 和彦)

7. 平城京跡（左京五条四坊一坪）の調査 第724・730次

事業名 JR奈良駅南特定土地区画整理社会資本整備総合交付金事業
 通知者名 奈良市長
 調査地 ①（第724次）大森西町187-2他4筆
 ②（第730次）大森西町191-1

調査期間 ① 平成30年5月30日～7月2日
 ② 平成30年12月12日～12月26日
 調査面積 ① 218㎡ ② 85㎡
 調査担当者 ① 安井宣也・高岡桃子
 ② 安井宣也

1. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条四坊一坪の西辺中央付近（第724次）及び南西隅（第730次）にあたる。地形的には能登川扇状地の扇端部で、東三坊大路の位置を踏襲して北から南に流れる菩提川の東側に位置する。旧状は条坊の遺存地帯が残る水田で、堤防沿いの東西30～50mの範囲が東側の水田と段差を介して一段低い。現状は、第724次調査地北寄りと第730次調査地は盛土造成されており（前者：宅地、後者：空き地）、第724次調査地南寄りには休耕田である。

一坪内の発掘調査は、これまでに中央～東部分で実施しており、市HJ第626・666・667・668・680次調査（平成21～26年度）では、水田面下0.4～0.5mの地山上面（標高60.7～61.3m）で奈良時代後半から平安時代前半にかけての宅地関連の遺構を検出した。²¹⁾

今回の調査は平城京の宅地関連の遺構の遺存状態や様相の確認を主な目的とし、第724次で3箇所（A～C、A・Bは宅地、Cは休耕田）、第730次で1箇所の発掘区を設定して実施した。

II. 基本層序

第724次調査地 A・B発掘区では旧水田面上に宅地の造成土層があり、厚さは前者が0.9mで後者が1.4m。

A発掘区とB・C発掘区の東寄りには近接する第680次調査地と同じで、黒色シルト質砂の水田耕土層（厚さ0.2m）、黄灰色や褐灰色の粘質土やシルト質砂からなる同床土層（3～4層あり、同0.3m）の下で黄褐色の粘質土や砂質シルトの地山上面（標高：60.6m）となる。

B発掘区の西寄りとC発掘区の西・南寄り、は、オリブ黒色シルト質砂の水田耕土層（厚さ0.1m）、褐灰色粘土混じりシルトからなる湿地堆積層（3～4層あり、同0.7m）の下で明黄褐色砂質粘土～シルトの地山上面（標高：60.1m）となる。湿地の堆積層は一段高い旧水田の形成後に堆積しており、地山上面は旧水田畔畔に沿う西落ちの段差を介して低くなる。

いずれも、地山上面が奈良時代の遺構面である。

第730次調査地 現地地表下3.8m（標高58.9m）



HJ 第724・730次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

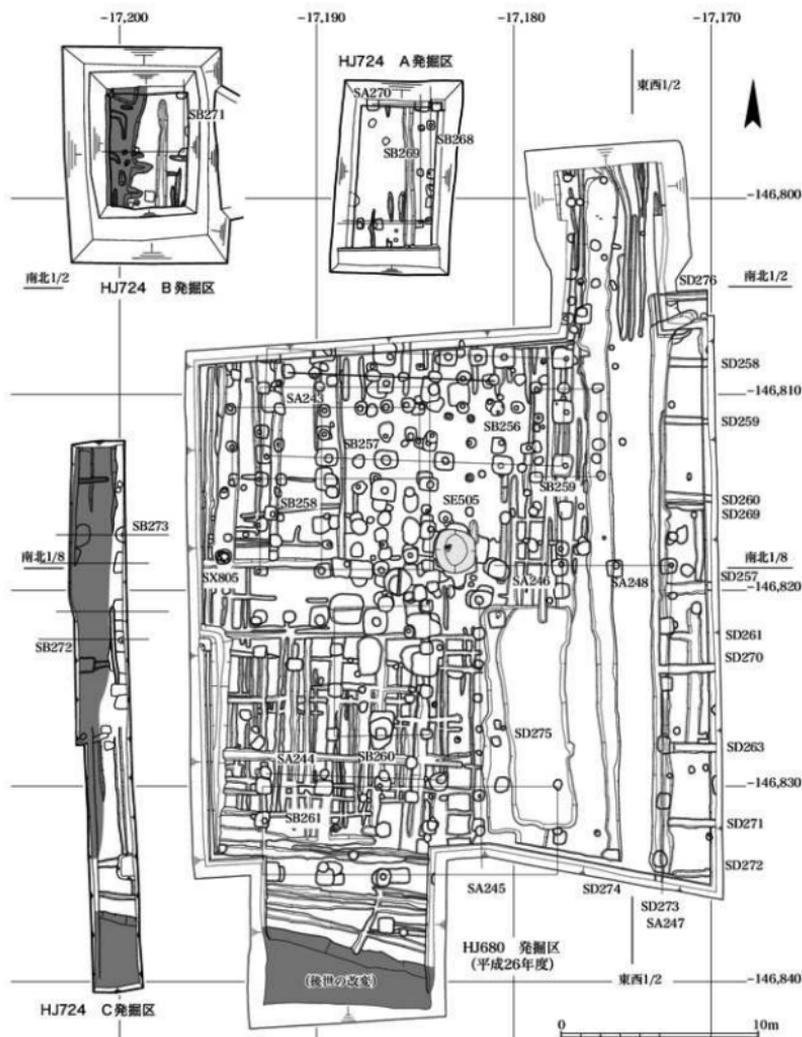


HJ 第724・730次調査 調査地周辺の旧状 (1/3,000)

まで掘り下げた。層序は、造成土（厚さ1.9m）の下に黒褐色砂質シルトの水田耕土層（厚さ0.6m）、灰色や黒褐色の粘土からなる湿地堆積層（5層あり、厚さ1.4m）があり、その下で菩提川の旧河道内に堆積する灰色砂礫層となる。灰色砂礫層上面の標高は59.0mで、前述の第724次調査地の地山上面より1.1～1.6m低い。

III. 検出遺構

第724次調査地では、地山上面で奈良時代の掘立柱建物5棟（SB268、269、271～273）、掘立柱列1条（SA272）を検出したが、第730次調査地では奈良時代の遺構はなかった。検出した遺構の概要は下記の通りで、遺構番号は坪ごとの通し番号である。



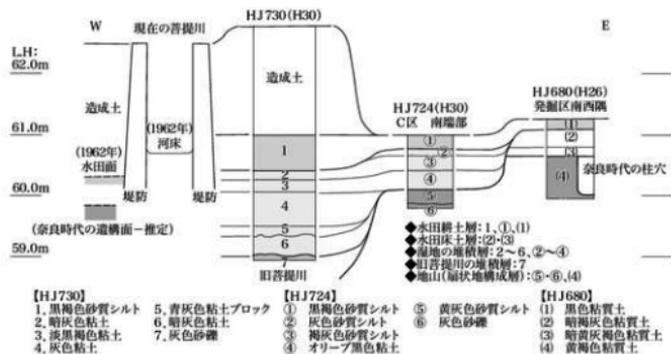
HJ 第724次調査 遺構平面図 (1/250)

SB268・269 とともにA発掘区で検出した東西1間(2.4m)以上、南北2間(4.8m、柱間:2.4m等間)以上の建物の南東部分で、ほぼ同じ位置に重複することから建て替えとみるが、新旧関係は不明。SB268と第680次調査地のSB258、SB269と同SB257はともに東

側柱の柱筋が揃う。

SA270 A発掘区で検出した東西1間(2.4m)以上の柱列。SB268・269と位置が重複し、これらとの同時併存はない。聖か建物の一部の可能性がある。

SB271 B発掘区で検出した東西1間(2.4m)以上、



HJ724・730次調査 土層断面模式図 (縦: 1/80)



HJ724次調査 A～C発掘区

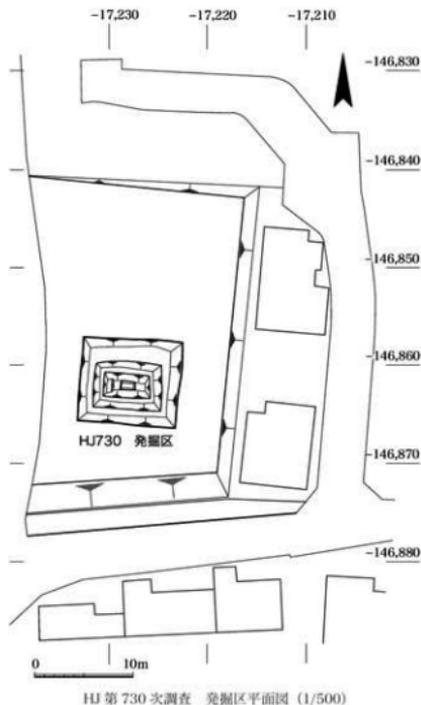
左段上: A発掘区全景 (北から)

左段下: B発掘区全景 (北東から)

右段上: C発掘区北部分 (北から)

右段中: 同上 中央部 (北から)

右段下: 同上 南部分 (南から)



HJ 第730次調査 発掘区全景(北から)



HJ 第730次調査 南壁土層断面(北から)

南北1間(3.0 m)以上の建物の南東部分。

SB272・273 C 発掘区の東辺北寄りに4.2 m隔てて南北に並ぶ2基の柱穴が重複して2組あり、柱間寸法と配列から重複する2棟の東西棟建物の側柱列の一部(南:SB272、北:SB273)と推定した。柱筋が揃うことから建替えの可能性がある。

IV. 出土遺物

第724次調査地 遺物整理箱で9箱分が出土した。大半が奈良時代の土器片(土師器・須恵器・製塩土器)で、他に奈良時代の瓦片、時期不明のサヌカイト片、室町時代以降の瓦質土器片や国産陶磁器片がある。柱穴の埋土やA発掘区の地山上面から奈良時代の土器片、B発掘区の湿地堆積層の最下層から奈良時代の土器片とともに瓦質土器片と国産陶磁器片が出土している。

第730次調査地 湿地堆積層の下位の層(土層図4～6層)から遺物整理箱1箱分の土器片が出土した。全て土師器で磨耗が著しく、器種や時期は不明。

V. 調査所見

第724次調査地では、奈良時代の遺構面である地山上面が後世の改変を受けているものの、平城京の宅地関連の遺構は残存し、少なくとも3時期の変遷があることがわかった。また、第730次調査地は室町時代以前の菩提川の旧河道内で、埋没後に湿地となった後に水田化したことがわかった。

これらの調査地で確認した湿地堆積層は旧河道にあたる西寄りが厚く、最上層の上面が現菩提川を挟んで西側の水田面よりも高い。また、砂礫層を挟まないことから堆積の原因が破堤ではなく氾濫であることがわかる。現河道の形状と第724次調査地での出土遺物の時期を勘案すると、この湿地はもともと現菩提川東側に残った旧河道の窪地を活用した江戸時代の遊水池で、埋没した後に水田化したことが推察できる。(安井 宣也)

註 奈良市教育委員会「平城京跡(左京五条四坊一坪)の調査 第626・656・666～668・680次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成26(2014)年度』2017

8. 平城京跡（左京九条三坊五・六坪）の調査 第727次

事業名 研修センター新築

届出者名 大和ハウス工業株式会社

調査地 西九条町四丁目1番11他2筆

調査期間 平成30年7月23日～令和元年5月17日

調査面積 8,273㎡

調査担当者 中島和彦 吉田朋史 桑原一徳

I. はじめに

調査地は、平城京南端の左京九条三坊五・六坪東半部分を占める。調査地内には九条条間南小路が想定され、南に九条大路、東側に東三坊坊間路、北側に九条条間路が隣接する。調査地東側の発掘調査（市HJ第538次調査）では、九条条間南小路・東三坊坊間東小路と南側の十二坪の宅地内の一端が明らかになっている。

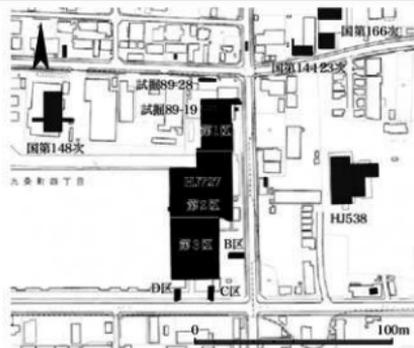
発掘調査は、調査区を北から第1～3区の3地区に分け実施した。また条坊道構の確認のために小規模な発掘区（B～D区）を設けた。

本調査は別に概要報告書を刊行予定のため、本年報では調査成果の概略を記すにとどめる。

II. 基本層序

調査地の基本的層序は、上から現代の造成土（厚さ0.5～1.2m）、耕作土と床土（厚さ0.2～0.3m）で、現地表下0.9～1.5mで奈良時代の遺構面となる。発掘区中央部分には、奈良時代の遺物包含層（厚さ約0.2m）が遺構面上に部分的に堆積する。奈良時代の遺構面は、北東部分が最も高く標高約55.4mで、南に向かい下降し調査地南端では標高約54.5mとなり、約0.9mの比高差がある。

遺構面を形成する土壌は、黄灰色砂・黄灰色粘質土等の水性堆積土から成り、複雑に重複した時期不明の数条の河川が遺構面下に存在する。古墳時代前期の溝が奈良時代と



HJ 第727次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

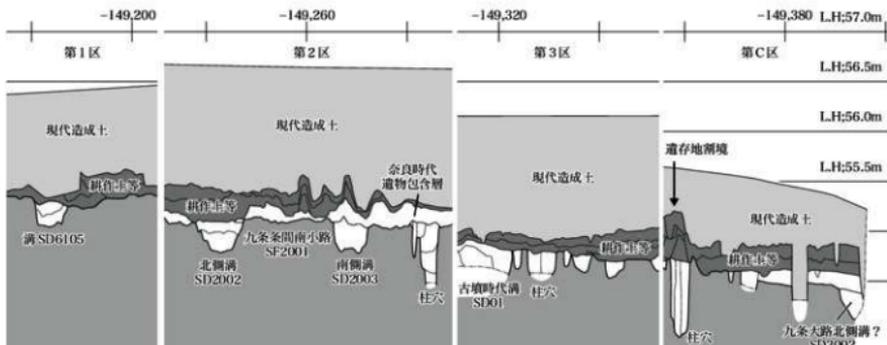
同じ遺構面上にあり、それ以前の堆積であることがわかる。

III. 検出遺構

奈良・平安時代の九条条間南小路と南北両側溝、東三坊坊間小路西側溝、九条大路北側溝、掘立柱建物89棟、掘立柱列8条、井戸20基、溝34条、土坑10基他、古墳時代前期の溝3条を検出した。以下主要なものについて記す。

奈良時代の遺構 桑坊関係

九条条間南小路 (SF2001) 溝心々間距離で幅約6.7m、路面幅は約5.0mで、路面上は土のままで舗装等は確認し



HJ 第727次調査 発掘区東壁土層図 (縦1/50・横1/250)



HJ 第727次調査 C区全景(北から)



HJ 第727次調査 九条大路北側溝SD3002(北東から)

ていない。南北両側溝(SD2002・2003)は幅約1.7m、深さ約0.4mで、いずれも宅地側の肩はしっかりしているが、道路側は大きくあふれ路面を侵食している。

九条大路北側溝(SD3002)C・D区南端で溝の北肩を検出したのみで、調査地南側に続き幅は1.0m以上、深さ0.3m以上である。

九条条間南小路心 $X=-149,259.24$ からそのまま1坪分の375大尺(約133.2m)分南側の地点に九条大路心があると想定すると、その値はおおよそ $X=-149,392.44$ となる。九条大路北側溝と考えたSD3002の北肩の座標 $X=-149,382.8$ との距離は、9.64mとなり、これを2倍した値19.28mが九条大路の最大幅と推定できる。近年の発掘調査成果から平城京内の大路の幅は16m余りと判明しており、九条大路の幅としてはおおよそ妥当なものと考えられ、SD3002を北側溝として認識した。

東三坊坊間路(SF1001)第1区とB区で西側溝SD1002を検出した。路面上に舗装等は確認できない。西側溝SD1002はB区で幅2.0m、深さ約0.35mあり、道



HJ 第727次調査 B区全景(南西から)

HJ 第727次調査 条坊間遺構の座標値

遺構	遺構番号	X座標	Y座標	備考
九条条間南小路	SF2001	-149,259.24	-17,559.00	路面幅約5.0m
九条条間南小路 北側溝	SD2002	-149,262.58	-17,559.00	
九条条間南小路 南側溝	SD2003	-149,255.90	-17,559.00	
九条大路 北側溝 北肩	SD3002	-149,382.80	-17,567.00	溝幅1.0m以上
東三坊坊間路	SF1001			道路幅推定9.68m
東三坊坊間路 西側溝	SD1002	-149,337.00	-17,502.34	



HJ 第727次調査 第1区全景 (南西から)



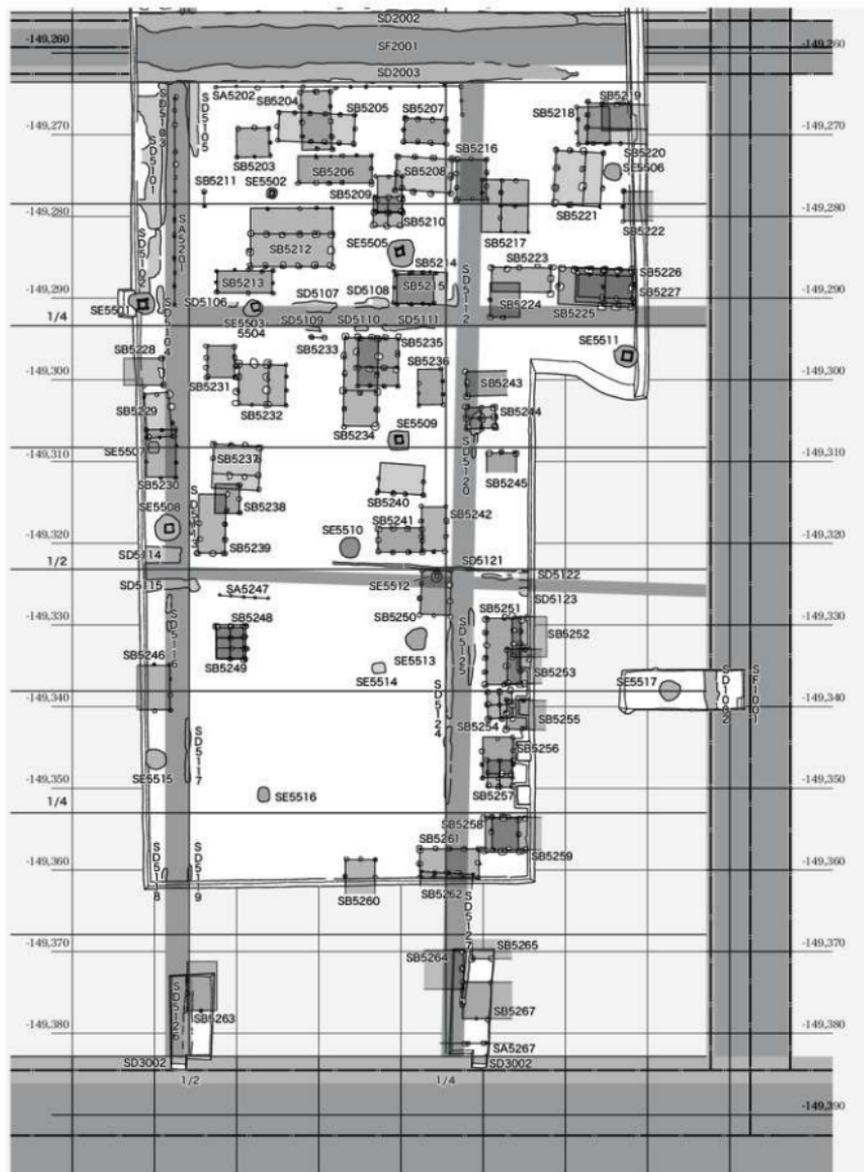
HJ 第727次調査 第2区全景 (西から)



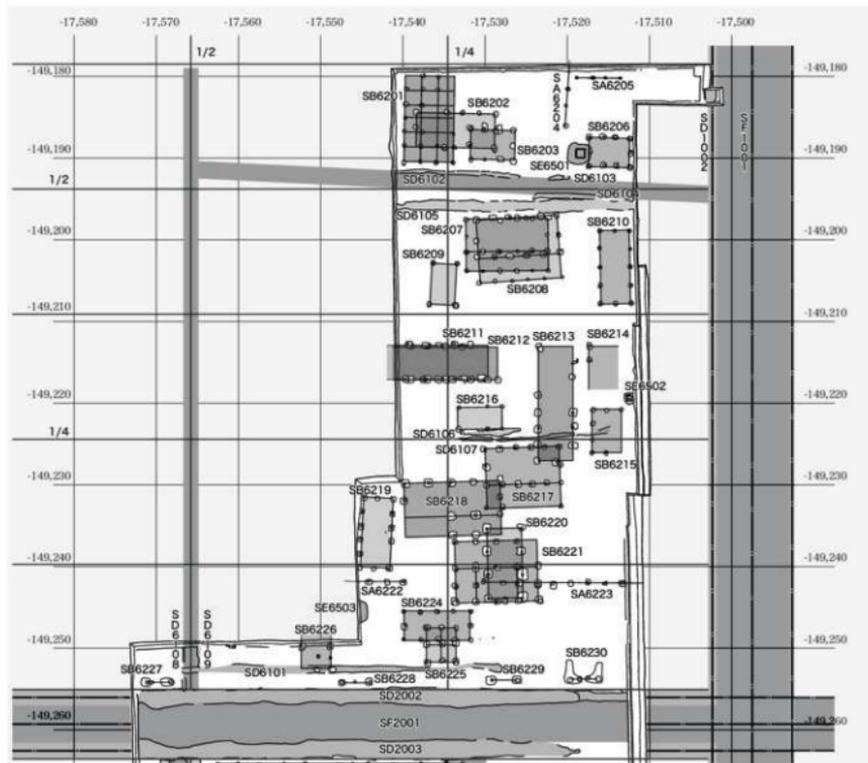
HJ第727次調査 第2区全景（北東から）



HJ第727次調査 第3区全景（西から）



HJ 第727次調査 五坪遺構配置図 (1/600)



HJ 第727次調査 六坪遺構配置図 (1/600)

路側にあふれて路面を侵食している。東側のHJ第538次調査で東三坊坊間東小路心が判明しており、その調査結果から道路心を復原するとおおよそ $Y=-17,497.50$ となる。東三坊坊間路西側溝SD1002溝心の座標との距離は4.84mで、この2倍の値9.68mが道路幅と推定される。

奈良時代の遺構 五坪内の遺構

遺構の重複関係からは、大きく3時期の遺構変遷が追える。また坪内通路によって坪内を分割しており、さらに建物・井戸の分布から1/16町・1/32町規模の小規模宅地の存在が明らかになった。特に五坪中央部の南北に列ぶ1/16町・1/32町規模宅地については全域を調査し、小規模宅地内の建物配置が判明した点は大きな成果となる。

1期 坪内通路で、五坪内を1/16町規模宅地に分割する。ただし、五坪東西中央ラインと南北1/4ラインの南側にあたる地点では坪内通路が確認できない。1/16町規

模の宅地はおおよそ東西31.5m、南北29.8m、面積938.7㎡で、1宅地は3～4棟の中小規模の掘立柱建物と井戸1基で構成される。建物の方位は概ね真北方向である。

Ⅱ期 新たに五坪中央に南北方向の坪内通路が設置され、坪内を東西二分する。坪南北1/2ライン上に東西方向の細い溝があるのみで、南北の区画を示す明瞭な区画施設はない。しかし、井戸SE5504・5510・5513が1/16分割した推定宅地内の範囲に1つずつ分布すること、五坪北端の掘立柱塼SA5202の東端が坪の東西1/4ライン近くで南へ折れ曲がることから、1/16町規模の宅地が復原できる。ただし南端の宅地7は、東西1/4ライン上に建物SB5262があり、1/8町規模宅地とも考えられる。

進入路の関係上、坪中央の宅地5・6は入口を西側の坪内通路に面せざるをえず、宅地1～3の入口も隣接する条坊道路と限定される。

またこの時期の掘立建物の特徴として、建物の方位が北で東に傾く点があげられる。全般的に建物数が少なく、当該期の遺構を確認できない宅地もある（宅地2・3）。

Ⅲ期 Ⅱ期から引き続き、五坪中央には南北方向の坪内通路が存続し坪内を東西二分するが、南北の区画を示す遺構はない。しかしながら、ほぼ五坪内を1/32分割する区画内に井戸1基が取まっており、井戸1基が1宅地に配されると想定すると、1/32町規模宅地が復元できる。また1/32分割線をまたぐ掘立建物もほとんど無いことも、1/32町規模の宅地の存在を示しているよう。

これらのことから、当該期は五坪中央を南北方向の坪内通路で東西二分し、さらに東半部を東西二分、南北八等分して小規模宅地を作り出していることが判明する。1つの小規模宅地の規模は東西31.5m、南北14.9m、面積469.35㎡である。南北の幅は、南側の九条大路北側溝北肩から北側の九条条間小路南側溝南肩との間の距離を八等分した値となっている。

宅地が隣接し合うことから、五坪中央の宅地10～15は宅地内への入口を西側の坪内通路に開かざるを得ず、またその東に隣接する宅地2～8も入口を東に面する東三坊坊間路に開かざるを得ないこととなる。

建物の建替が一部の宅地であり、Ⅲ-1期とⅢ-2期の2時期に細分できる。Ⅲ-2期には宅地7と15、8と16がそれぞれ合わさり、1/16または1/8町規模の宅地となる。

宅地は中小規模の掘立建物2～3棟と井戸1基で構成される。建物には附付建物や総柱建物もあり、桁行も2～5間と多種多様である。建物の方向はおおむね真北を向く。

宅地14は井戸SE5516を1基検出したのみで、建物跡を確認していない。

奈良時代の遺構 六坪内の遺構

遺構の重複関係から大きく3時期の遺構変遷が確認でき、また建物配置と溝の位置関係から1/4・1/8町規模の宅地が復元できる。

六坪の東西中央部の南端では、南北溝が2条平行しており、この溝に挟まれた幅約1.5mの空間が、六坪内中央を南北に分割する坪内通路と考えられる。長さ約5.0m分を検出したのみで消長は不明であるが、奈良・平安時代を通じて存在したと仮定して以下各時期ごとに記述する。

Ⅰ期 坪内南北1/2ライン上に東西方向の坪内通路があり、坪内を南北二分する。坪内通路は西で北に傾き、南北両側溝間で幅約1.6mある。通路北側に1/16町規模以上の宅地1が、南側に東西に長い1/8町規模の宅地2・3が南北に並ぶ。いずれも桁行5間の南附付き東西棟建物SB6207・6217を、宅地中央北端に建て中心建物とする。

Ⅱ期 南北1/2ライン上の坪内通路は引き続き機能し、Ⅰ期の宅地配置を踏襲する。宅地2では東西棟建物SB6208がⅠ期のSB6207とほぼ同じ位置に同規模で建て替えられる。宅地3では九条条間小路北側溝に沿って宅地南端に東西溝SD6101が掘られ、道路との間約1.9m間に遺構として残らない何らかの閉塞施設があったと考えられる。この部分には柱間2間以上の柱列（SB6228・6230）があり、道路に開く門と推定される。

Ⅲ期 坪内南北1/2ライン上にある東西通路が廃され、溝SD6105で南北の宅地を区画する。溝の北側には1/16町規模以上の宅地1が、南側には1/4町規模の宅地2がある。宅地2では建物の建替がありⅢ-1期とⅢ-2期に分かれる。Ⅲ-1期の宅地2では桁行5間の南附付き東西棟建物SB6218と桁行5間以上の東西棟建物SB6212を、宅地中央に南北に並べ、東側に桁行7間の南北棟建物SB6213を配し「コ」字型の建物配置をとる。しかしながら、各建物の主軸や柱筋が不揃いで、やや整然さに欠ける。宅地南西部には、井戸SE6503があり、南端には門と考えられる柱列SB6229がある。（中島 和彦）

IV. 出土遺物

遺物整理箱106箱分の遺物が出土した。内訳は土器類が91箱、瓦類が10箱、木製品他が5箱である。大半は奈良・平安時代のもので、他に弥生・古墳時代、鎌倉時代以降のものも少量ある。

奈良・平安時代のもは、土師器、須恵器、黒色土器、奈良三彩、緑釉陶器、製塩土器、ミニチュア土器、土馬、陶甕、軒丸瓦（6229種別不明1点、6282D1点、型式不明3点）、軒平瓦（6691A1点、6721C1点、6802B1点、新形式1点）、刻印瓦（「里」）1点、丸瓦、平瓦、銭貨2点、鉄製品（刀子・釘）銅製品（鞘金具・釘）、彌羽口、鉄滓、木製品（斎巾、馬形、曲物、箸、横櫛等）、植物遺存体（桃種、瓢箪）、ガラス玉、ガラス増堀、磁石、井戸枠（建築部材再利用品含む）がある。また弥生・古墳時代のものには、弥生土器、石包丁・石鎌（以上弥生）、土師器（古墳）がある。新形式軒平瓦は左端部の小片で、左端の唐草が上方に巻き込み、上外・下外・脇区に杏仁形珠紋を巡らす。直線型。凹凸面はタテナデ調整で、凹面の瓦頭付近をヨコナデ調整する。（中島 和彦・原田 憲二郎）



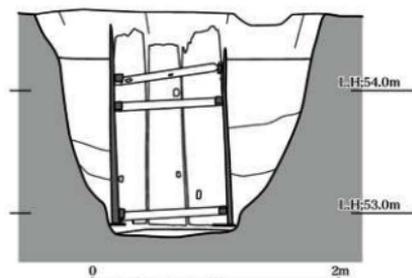
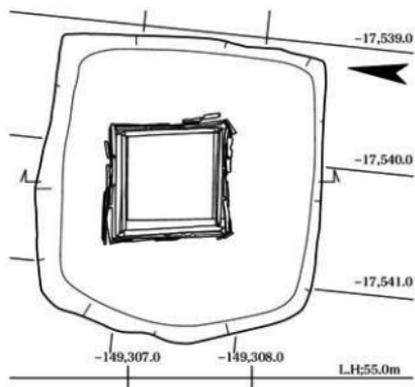
HJ 第727次調査 新形式軒平瓦（1/4）



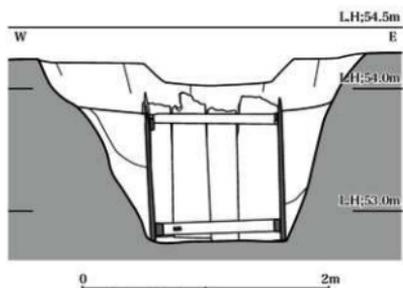
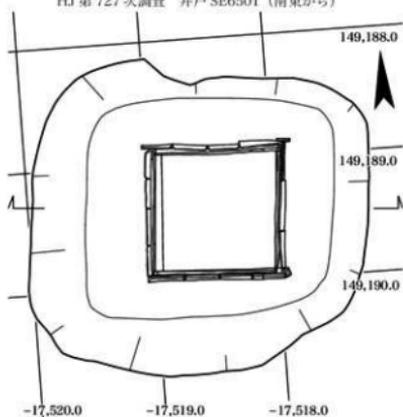
HJ 第727次調査 井戸SE5509 (西から)



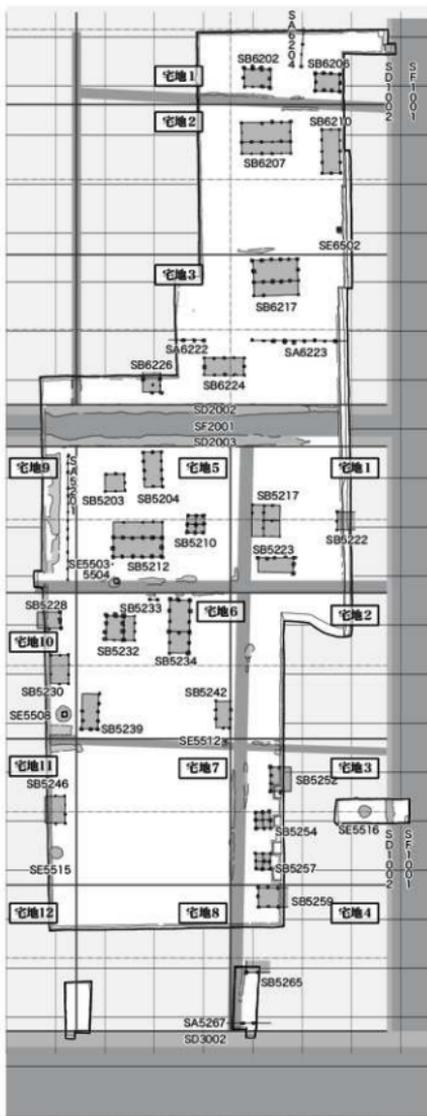
HJ 第727次調査 井戸SE6501 (南東から)



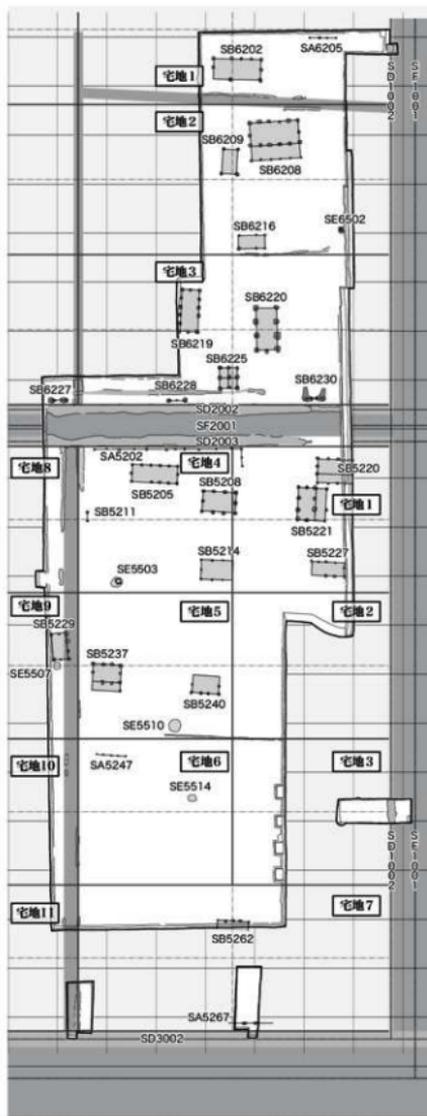
HJ 第727次調査 井戸SE5509 平面図・立面図 (1/50)



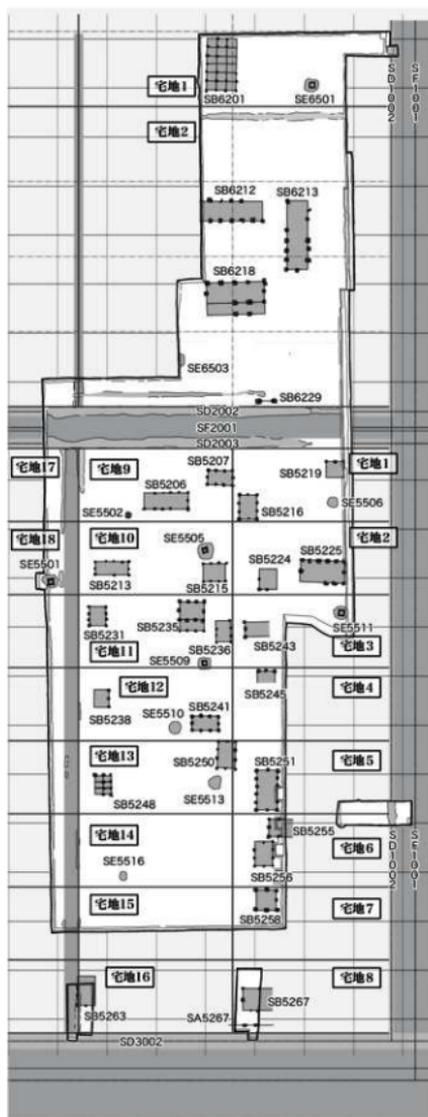
HJ 第727次調査 井戸SE6501 平面図・立面図 (1/50)



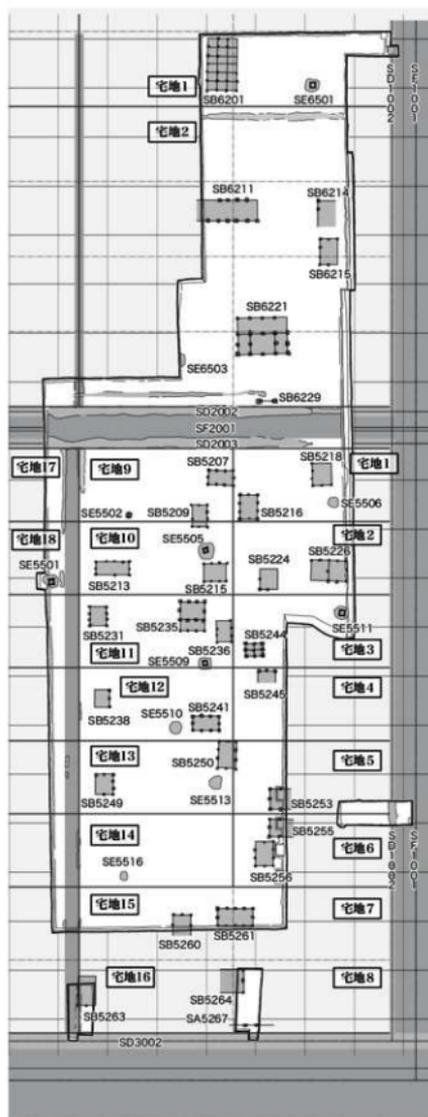
HJ 第727次調査 遺構変遷図（Ⅰ期）



HJ 第727次調査 遺構変遷図（Ⅱ期）



HJ 第727次調査 遺構変遷図 (Ⅲ-1期)



HJ 第727次調査 遺構変遷図 (Ⅲ-2期)



HJ 第727次調査 五坪宅地割変遷図

V. 調査所見

今回の調査の成果として下記の2点があげられる。

1 平城京の南京極である九条大路の一部を確認し、その復原の資料を得た。

従来九条大路の南北側溝と考えられる遺構は、数カ所の発掘調査で検出されていたが、大路の位置を確定するには至らなかった。今回の調査では九条条間南小路を検出し、平城京の条坊計画通りに小路が設置されていたことが判明した。条坊施工が通常通り行われているとすると、九条条間南小路から単純に1坪分(375大尺=133.2m)南に、九条大路が想定できる。C区で検出した東西溝SD3002を九条大路北側溝とすると、九条大路の幅は19.28m以下となり、三条以南で確認されている大路幅(約16m=45大尺)と遜色のない値となることから、九条大路の復原としては妥当と考えられる。

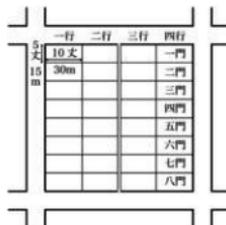
また従来、九条大路跡と推定されていた東西方向の遺存地割は五坪の宅地内にあることがわかり、九条大路を反映したものでないものと考えられる。

2 平城京内の小規模宅地の様相と変遷が判明した。五坪東半部では、坪内通路と井戸の配置から1/16～1/32町規模の小規模宅地が確認でき、奈良～平安時代にかけての変遷が明らかになった。

五坪内の宅地規模はおおよそ1/16町→1/16町→1/32町と変遷する。宅地分割の方法は、坪内を東西南北に四等分して1/16町規模宅地を創出し、これをさらに南北二等分して1/32町規模宅地とする。

また、当初は坪内通路を東西南北方向の縦横に設け1/16町規模の宅地を区画していたが、その後坪内中央の南北方向の坪内通路1条のみとして、通路両側に1/16町規模の宅地を配し、さらにその後この宅地を南北二分し1/32町規模の宅地とする。

坪内通路を南北方向の1条のみとすると、各宅地の出入口が南北通路または条坊道路に面した東西側に限定される一方、坪内の宅地利用可能面積は通路分が差し引



平安京四行八門制

かれることなく最大限に利用できる利点がある。奈良時代後半の平城京では小規模宅地の増加が指摘されており、人口増による宅地不足に対する宅地班給上の対策とも考えられる。この宅地配置形態は、平安京に見られる「四行八門制」と同形態といえよう。

文献資料には、平城京の小規模宅地を示す記述に「十六分半」(1/32)、「十六分之四一」(1/64)との記述があり、宅地面積の基準として1/16町が当てられている。これより当初1坪を16等分する宅地区画があり、時代が降るに従い細分化されたことがうかがえる。奈良時代の1/16町規模宅地は、一辺1/4町四方の正方形の区画であることが原田憲二郎氏によって指摘されており、その後の発掘調査成果からも肯定できる。今回の調査では、この正方形の1/16町規模宅地が南北に分割され1/32町規模宅地に変化したことが明らかになった。

以上の点から五坪の宅地変遷をまとめると、

- I期 東西南北方向の坪内通路で区画された、奈良時代的な1/16町規模宅地
- II期 四行四門制ともいえる宅地分割
- III期 四行八門制と同形態の宅地分割となる。平城京内では同様の変遷が追えない調査例もあり一般化できないが、奈良から平安時代への小規模宅地の変化を考える一例として貴重な成果といえよう。

(中島 和彦)

9. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成30年度に史跡大安寺旧境内において2件の発掘調査を実施した。

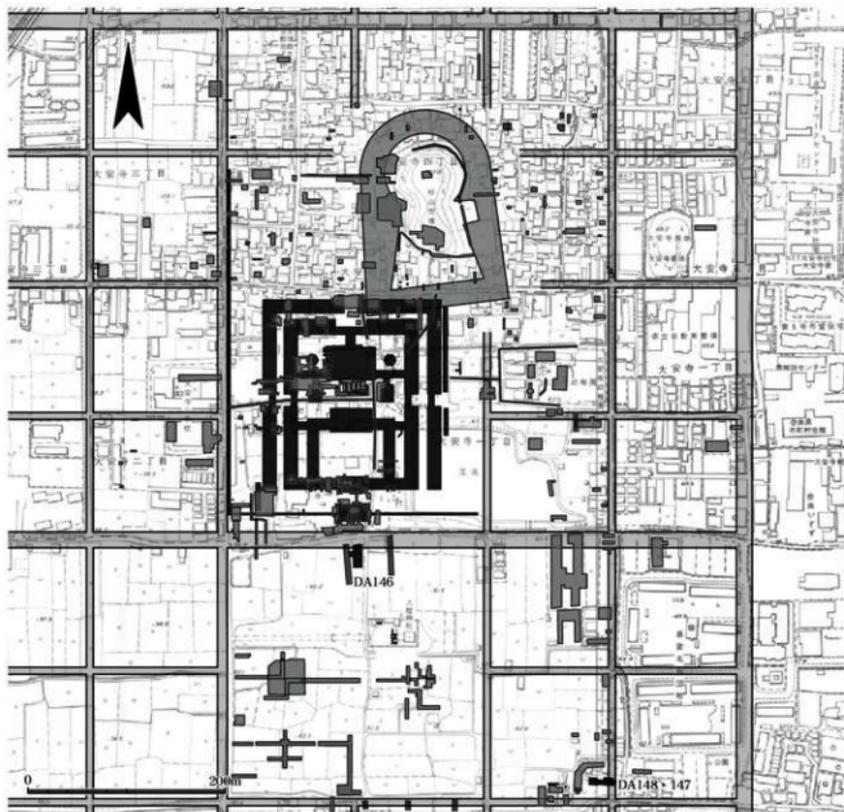
第146次調査は、塔院の北辺を確認する範囲確認調査で、第147次調査は、住宅の新築にあたって、大安

寺の東限の確認調査を実施した。

なお、平成31年度に実施した第148次調査は、第147次調査の西隣で遺構が両調査区にまたがるため、今回、まとめて報告する。

史跡大安寺旧境内 発掘調査一覧表（本書掲載分）

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA 第146次調査	範囲確認調査	東九条町1301-1、1302-1、1564-1	2018.9.5～11.15	207㎡	原田憲二郎
DA 第147次調査	戸建て住宅の新築・地盤改良	東九条町1417番	2018.10.1～10.22	118㎡	森下・秋山
DA 第148次調査	戸建て住宅の新築・地盤改良	東九条町1416番、1417番の一部	2019.4.12～4.25	56㎡	高岡桃子



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図（1/5,000）

(I) 塔院北門・六条大路の調査 DA 第146次

I. はじめに

奈良市では史跡大安寺旧境内の範囲確認を主目的とした調査を、平成28年度から継続して実施しており、本年度で3回目の調査となる。

大安寺寺院地の復元案については、現在大きく2つの案¹⁾があり、いずれか判断する手掛かりの一つとしては、まず六条大路の有無確認が必要と考えられる。

このため平成28年度は南大門の南西側で、六条大路南側溝の確認を目的として調査(市DA第139次調査)を行い、約2m間隔を空けて並行する東西方向の溝2条を確認し、いずれかが南側溝であることが推定された。平成29年度は、南大門の南東側で六条大路南北両側溝の確認を目的として調査(市DA第143次調査)を行い、3条の並行する東西方向の溝を確認し、北から北側溝・南側溝・築地塙の雨落溝と推定された。

これらの成果を受け、本年度はまず南大門南側に推定される塔院北門の検出を目的とし、その位置関係から六条大路南側溝を確定させ、ひいては六条大路の存在を確実にすることを主目的として調査を実施した。

II. 基本層序

調査区内の基本的な層序は、上から暗褐色土(耕土、厚さ約0.1m)、礫混じりの黄褐色土(造成土、厚さ約0.6m)、黒灰色土(旧耕土、厚さ約0.2m)、暗灰色土(厚さ約0.2m)と続き、地表下約1.1mで黄灰色粘土か黄灰色礫土の地山に至る。地山上面の標高は、概ね60.3mである。

遺構検出は、基本的に地山上面で行なった。ただし調査区南半では整地層があり、ここでは、整地土上面と整地土除去後の地山上面の2面で遺構検出を行った。

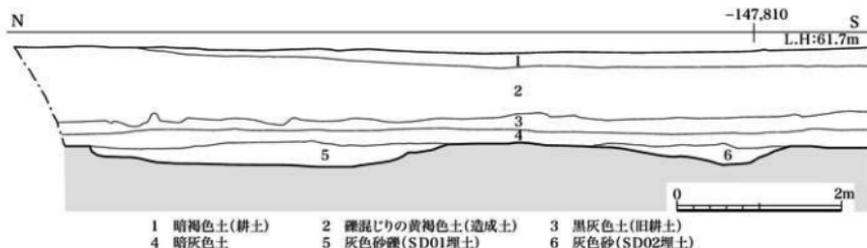
III. 検出遺構

検出した主な遺構には、溝2条、門1棟、橋1梁があ

る。他に地盤を均すための整地を調査区南半で確認した。SD01は調査区北辺で検出した東西方向の溝で幅は約3.5mである。東西長は約7.0m分を検出した。発掘区西辺では南側の南側に広がるあふれを確認した。遺構検出面からの深さは発掘区東端で約0.3m、発掘区西端で約0.45mで、溝底は西方へ緩やかに下る。埋土は灰色砂礫で、南側にあふれた部分は灰色細砂を多く含む。溝内埋土からは瓦類が多く出土し、8世紀から14世紀中頃までの軒瓦を含む。溝心の座標値はX=-147,803.800m、Y=-17,103.000mである。なお、溝SD01と一連の溝は平成28年度調査区でも確認しているが、平成29年度調査区には無く、今回の調査区東側で北に曲がるとみられる。

SD02は溝SD01の約2.2m南側で検出した東西方向の溝で、幅約2.0m、東西長は約10.5m分を検出した。遺構検出面からの深さは約0.2mである。埋土は小さな礫を含む灰色砂で、溝SD01と同様に埋土から瓦類が多く出土したが、出土軒瓦の年代は8世紀から9世紀におさまる。溝心の座標値はX=-147,810.600m、Y=-17,103.000mである。なお、溝SD02と一連とみられる溝は平成28・29両年度の調査区でも確認している。

SB03は溝SD02の南約1.2m離れた場所で検出した東西2本の柱からなる門である。門柱跡は東西とも南北約1.0m、東西約1.5mの平面隅丸方形であること、掘方内には拳大・人頭大の栗石とみられる川原石があることから、柱座だけではなく、扉の軸受けの穴や、方立穴を設けた唐居敷を用いた礎石建ちの門であったと考えられる。唐居敷を用いたとみると、門の東西1間の規模は5.1mとなる。2つの門柱跡の中央では、南北約1.0m、東西約0.5mの小穴を確認したが、これは扉の召し合わせ部分の留め、あるいは蹴放の土台となる礎石を据えたも



DA 第146次調査 東壁土層図 (1/60)

のとみられる。西側門柱跡と門柱跡中央の小穴の遺構検出面からの深さは約0.15 mである。なお、西側門柱跡では礎石除去後、北東部が深く掘り下げられていた。栗石を採取する目的で掘削されたものとみられる。門柱跡から少量の土器が出土したが、細片の為、詳細な時期は不明である。

SB04は梁行1間(5.7 m)、桁行は1間分(6.0 m)確認した。溝SD01との位置関係から、これに架かる南北方向の橋と考える。北側は発掘区外に延びるとみられるが、南側の柱跡は溝SD01の南肩から約3.0 m南に位置しており、橋南端を示す親柱と考える。南東の親柱の掘方には栗石とみられる拳大の川原石が6つあり、礎石建ちと考える。溝SD02との重複関係から、溝SD02埋没後に橋SB04が架せられたとみることができる。

SX05は発掘区南半部に広がる整地で、南北約12.3 m分、東西7.0 m分を検出した。整地土の厚さは0.1～0.4 mで、埋土は灰褐色砂質土である。整地土を除去した底面は、概ね南方に向かって下がるが、場所によって凹凸がある。整地層上面でも遺構検出を行なったが、顕著な遺構は無かった。なお、一連とみられる整地層は平成28・29両年度の調査区でも確認している。

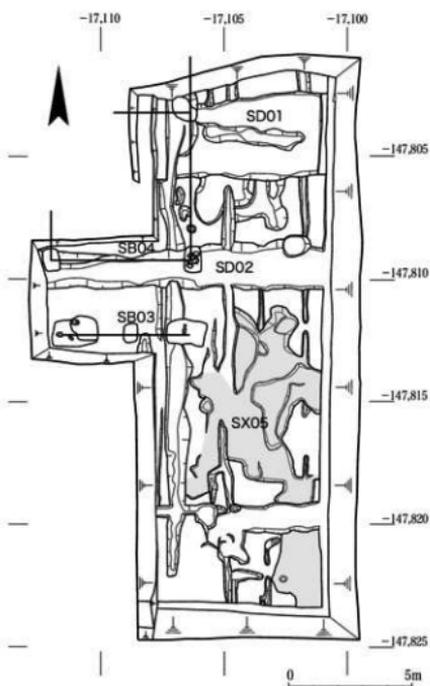
IV. 出土遺物

出土した遺物は遺物整理箱で63箱分ある。出土遺物の大半は瓦類である。出土遺物には奈良時代の土師器・須恵器、軒丸瓦(6138Cb 2点・62351 1点・6304D 5点・型式不明2点)・軒平瓦(6661B 1点・6712A 3点・6712B 2点・6717A 2点・型式不明3点)・丸瓦・平瓦・契斗瓦、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・青磁・白磁碗、軒丸瓦(大安寺51Ad²⁾ 1点・型式不明1点)・軒平瓦(大安寺251A 2点)・丸瓦・平瓦、鎌倉時代の瓦器碗、軒丸瓦(大安寺111D 1点・大安寺173A 1点・大安寺175A 1点)・軒平瓦(型式不明1点)、室町時代の瓦質土器、軒丸瓦(大安寺88A 1点)・軒平瓦(大安寺241Aa 1点・大安寺248A 2点・大安寺250Ba 4点)・丸瓦・平瓦がある。これらの出土遺物の大半は溝SD01から出土した。

V. 調査所見

①門SB03の東西1間の規模5.1 mという数値は、調査区北方に位置する南大門の柱間と同じである。また東西門柱跡の中間ラインが南大門東西中軸ラインに一致する。このようなことから、門SB03は塔院北門とみてよく、築地塀の棟通りに取り付く棟門と考える。

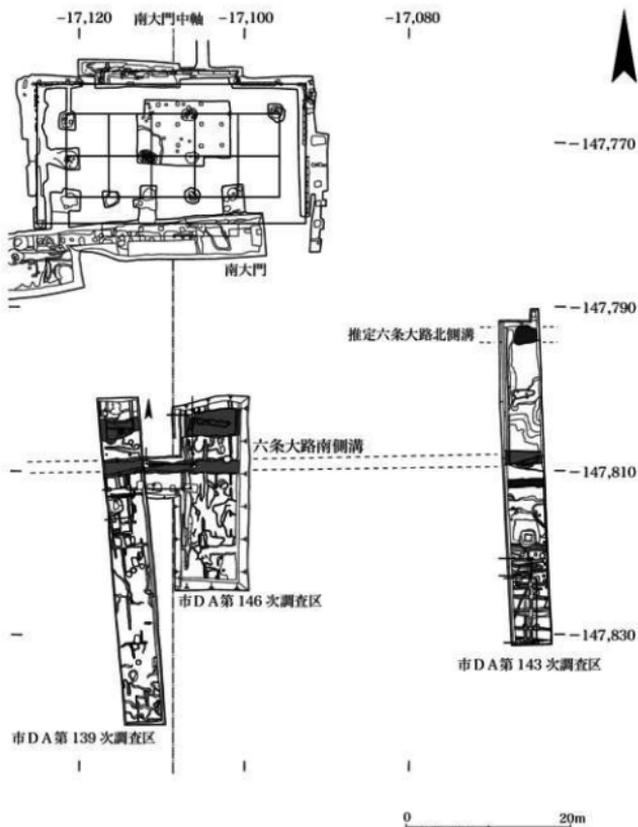
②平成28・29年度の調査ではいずれの調査区でも六条大路南側溝と推定される溝は検出されていたが、断定



DA 第146次調査 遺構平面図 (1/200)

できるまでには至らなかった。今回の調査で塔院北門SB03を確認でき、その位置関係から六条大路南側溝は、塔院北門SB03から約1.2 m北側に位置する溝SD02と考えるのが妥当である。溝SD02と一連の溝は、平成28・29年度の調査でも確認されており、今回の調査区東方では、ほぼ溝SD02の延長線が、現在の水田あるいは宅地の境界線となっている。これが遺存地割とみられることから、東西に続くことも想定できる。

③今回の調査区で溝SD01に架かる橋SB04を確認し、その重複関係から、六条大路南側溝SD02埋没後に架橋されたことと判明したため、溝SD01の掘削も六条大路南側溝SD02埋没後とみられる。大安寺南大門は寛仁元年(1017)に焼失し、しばらく後の13世紀半ば頃に再建が始まったことが史料³⁾と発掘調査⁴⁾から明らかになっている。このようなことから、中世の南大門再建とその周辺整備の際に、溝SD01が掘削され、橋SB04が架橋されたと考えられる。(原田 憲二郎)



六条大路に係る遺構平面図 (1/600)

注

- 1) 左京六条四坊二～七・十～十二坪と左京七条四坊一・二・七～十坪の15町とみる考え (村田治郎 1954 『業師寺と大安寺の古地』 『史迹と美術』 240号 史迹・美術同致会) と、左京六条四坊一～十一坪と左京七条四坊一・二・七・八坪の15町で、天平19年の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』 勘録以降に、左京六条四坊十二坪が寺院地に加わったとみる考え (鎌方正樹 1997 『大安寺寺地の復元に関する問題点の検討』 『史跡大安寺旧境内Ⅰ 杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告』 奈良市教育委員会の2案。なお、六条大路がみつからないこと等から、

- 後者の案を疑問視する見方 (石毛彩子 2001 『平城京内寺院における雑舎群』 『古代』 第110号 早稲田大学考古学会) がある。
- 2) 「大安寺」を付した軒瓦の型式番号と年代観は、原田憲二郎 2009 『大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦』 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成18 (2006) 年度』 奈良市教育委員会に拠る。
- 3) 『最勝講問答記』 紙背文書 (大安寺史編集委員会 1984 『大安寺史・史料』 所収)
- 4) 奈良市教育委員会 1990 『史跡大安寺旧境内の調査 第38次の調査』 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』



DA 第146次調査 発掘区全景 (南から)



DA 第146次調査 発掘区全景 (北から)



DA 第146次調査
六条大路南側溝 SD02・塔院北門 SB03 (北東から)

(2) 寺域東辺・花園院推定地の調査 DA 第147・148次

I. はじめに

調査地は史跡大安寺旧境内の南東隅にあたり、花園院と推定される地区である。周辺に過去の調査例はあるが、古い調査のため正確な発掘区の位置は不明である。

今回の調査は、奈良時代の大安寺の東辺を限る施設の確認を目的として行った。第147次調査は平成30年10月1日から10月22日まで118㎡を、第148次調査は第147次調査の結果を踏まえ平成31年4月12日から4月25日まで56㎡を調査した。

II. 基本層序

発掘区の基本層序は、上から黒色砂質土が約0.2m、灰色砂・灰茶褐色砂質土の床土が約0.4m堆積し、その下に灰色砂礫層が約0.3～0.5m堆積する。江戸時代に川の氾濫があり、砂礫の上に土を入れて耕作地としたことが地元で伝わっており、この灰色砂礫層は江戸時代の河川の氾濫による堆積とみられる。その下には土器片を含む灰色粘土質シルト層（15層）が約0.4～0.5m堆積し、黄灰色粘土の地山に至る。

第147次調査区の東端では、江戸時代の堆積層である灰色砂礫層の下に淡灰色粘土質シルトが約0.2～0.3m、灰色砂土が0.5～0.9m、灰色砂（19層）が厚いところで約0.3m堆積し、灰色砂礫の地山に至る。後述するSD01の東肩は灰色砂（19層）の上面から掘り込まれている。遺構検出は黄灰色粘土の地山面および灰色砂（19層）上面で行った。

III. 検出遺構

検出した遺構には、南北方向の素掘溝1条（SD01）、掘立柱建物1棟（SB01）がある。

SD01 幅約2m、深さ約0.25mで、長さ4m分を検出した。溝の西肩は緑黄灰色粘土（地山）上面で検出したが、東肩は灰色砂（図2-19層）上面から掘り込まれていることを確認した。両肩ともにほぼ垂直に立ち上がっており、東肩が脆弱であるゆえ板等で護岸していた可能性があるが、板を留める杭跡は検出できなかった。埋土下層の暗灰色砂礫層から8世紀後半～9世紀の土器が多く出土している。

検出位置からみて、大安寺の東を限る東西坊間東小路西側溝の可能性はあるが、溝が掘り込まれる灰色砂（19層）から平安時代の土器が出土していることから、検出したSD01は奈良時代当初のものではないと考えられる。溝心の座標値はX=-148,042.00m、Y=-16,845.46mである。

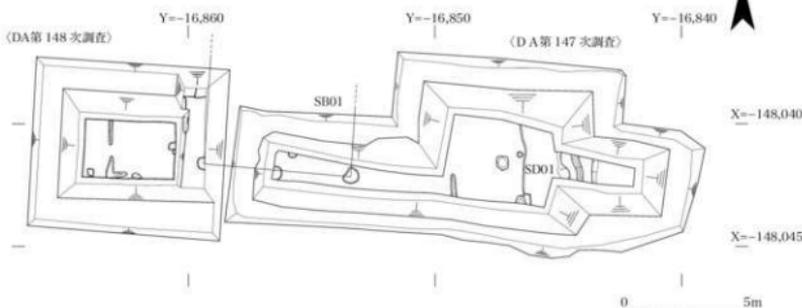
SB01 東西2間（6.0m）、南北1間（3.0m）以上の南北棟建物と考えられ、今回の調査では南妻柱列と西側柱列を検出した。

IV. 出土遺物

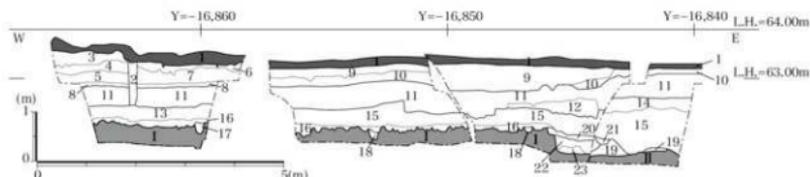
遺物整理箱6箱分が出土し、その大半がSD01からである。8世紀～9世紀の土器器、須臾器、黒色土器、灰釉陶器、土馬、丸瓦、平瓦、15世紀の土器羽釜がある。

V. 調査所見

目的としていた奈良時代の大安寺の東辺を限る施設については、想定位置に南北溝SD01を検出することができたが、出土遺物からみて平安時代の遺構と考えられる。SD01が掘り込まれている灰色砂層も、河川の氾濫で堆積したものとみられ、当初の溝が氾濫によって削平されたと考えられる。（高岡 桃子）



DA 第147・148次調査 発掘区平面図 (S=1/200)



- | | | | |
|------------|-------------------|-------------|-----------|
| 1. 黒色砂質土 | 8. 明褐色粘土質シルト | 15. 灰色砂土 | 22. 暗褐色土 |
| 2. 灰褐色砂質土 | 9. 礫混じりの灰色砂 | 16. 灰色砂質土 | 23. 暗灰色砂礫 |
| 3. 淡茶褐色砂質土 | 10. 黄褐色土混じりの淡灰色砂土 | 17. 暗灰色砂質土 | |
| 4. 茶褐色砂質土 | 11. 灰色砂礫 | 18. 暗灰色土 | |
| 5. 黄白色砂質土 | 12. 灰色細砂 | 19. 灰色砂 | |
| 6. 灰茶褐色砂質土 | 13. 灰色粘土質シルト | 20. 暗茶褐色砂質土 | |
| 7. 暗褐色砂質土 | 14. 淡灰色粘質土 | 21. 暗灰色土 | |

(1: 耕土 2: 攪乱 3~10: 床土 11・12: 江戸時代の河川氾濫堆積層 13~16: 15 世紀の河川氾濫堆積層 17・18: 柱穴埋土 19: 河川氾濫堆積層 20・21: SD01 埋没後の堆積層 22・23: SD01 埋土 I・II: 地山)

DA 第 147・148 次調査 北壁土層図 (縦: 1/100 横: 1/200)



DA 第 147 次調査 全景 (南東から)



DA 第 148 次調査 全景 (北西から)



DA 第 147 次調査 SD01 (東から)



DA 第 148 次調査 柱穴検出時 (北西から)

10. 富雄丸山古墳の調査 TOM 第1・2・3次

奈良市教育委員会では、平成29年より奈良市西部の文化財保存・活用の一環として、富雄丸山古墳の範囲確認発掘調査を計画した。これに先立ち、現状を把握する

目的で航空レーザ測量（第1次調査）を実施し、その成果をもとに5年計画の発掘調査を実施している。ここでは、第1～3次調査について概要を報告する。

富雄丸山古墳の調査一覧表

調査回数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
TOM 第1次調査	富雄丸山古墳範囲確認発掘調査事業	丸山一丁目 1079-239	平成29年5月22日～8月31日	20,267㎡	鎌方
TOM 第2次調査			平成30年12月3日～平成31年1月31日	242.5㎡	永野・村瀬
TOM 第3次調査			令和元年10月21日～12月20日	275㎡	森下・村瀬

I. はじめに

富雄丸山古墳は、奈良市西部の矢田丘陵から派生する尾根上に位置する。すぐ東側には富雄川が流れ、その先には西の京丘陵が位置し、丘陵上には弥生時代後期の六条山遺跡がある。これを越えると奈良市街地となり、北東方向には宝来山古墳などの佐紀古墳群が広がる。

江戸時代には、富雄丸山古墳が河上陵（藤原帯子墓）とされていたことが『聖蹟圖志』に記録されており、古くから墓として認識されてきた。明治時代には盗掘を受けたものの、その時出土した遺物が現在一括して京都国立博物館に所蔵（重要文化財）されている。

調査来歴は、1972年に奈良県教育委員会が県第1次調査¹⁾を行い、墳頂部で粘土椀を検出し多数の遺物が盗掘坑などから出土した。粘土椀は2段築成で1段目上端が南北10.6m、東西6.4mあり、犬走り部分には敷石を施していた。また、この時実施された測量調査によって、直径約86mの円墳であると報告された。

県第2次調査²⁾では、墳丘裾付近に発掘区が設けられ、墳丘北東部に造出しが取りつき、直径も約102mとなる可能性が指摘された。

その後、緑地公園として保存されてきたが、遺跡の重要性から、奈良市西部の文化財活用を図るべく、5ヶ年の範囲確認発掘調査を計画した。これに先立ち、調査活用計画策定のために航空レーザ測量を実施した。ここでは、航空レーザ測量（第1次調査）、発掘調査（2・3次調査）の概要を報告する。

II. 第1次調査

第1次調査は富雄丸山古墳の規模や形状を把握する目的で、航空レーザ測量を実施した。

調査の結果、これまで2段築成とされてきたが、3段築成の大型円墳であることが判明した。その規模は、直径約110mに復元でき、墳丘の北東側に造出しが取りつくことを再確認した。



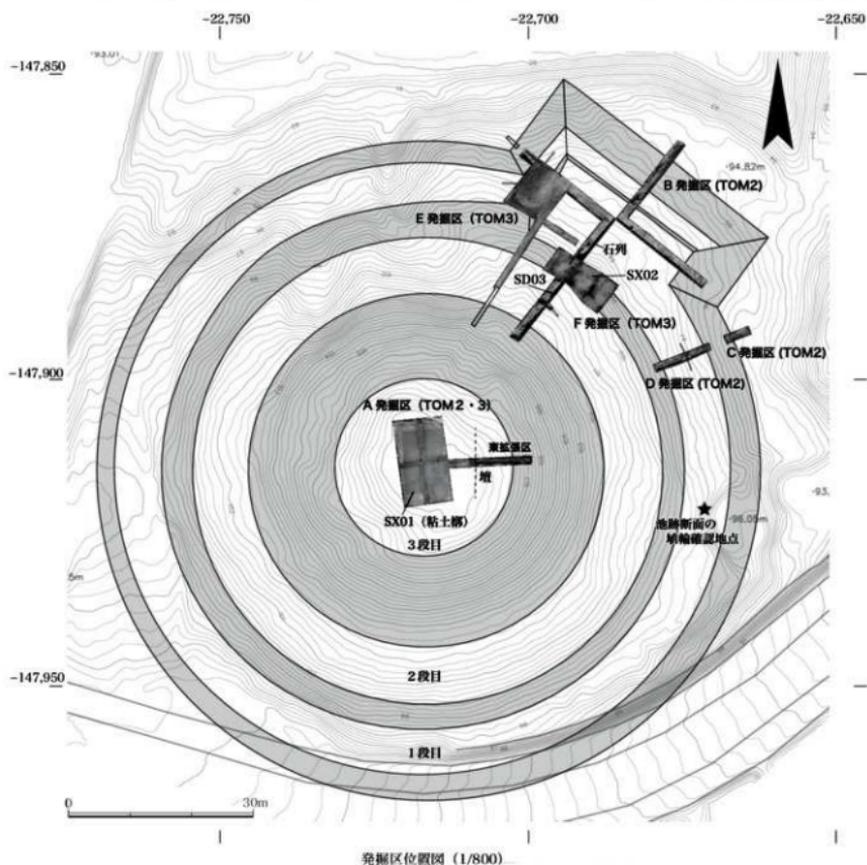
富雄丸山古墳の位置と周辺遺跡（1/50,000）

III. 第2・3次調査

第2次調査より、5年計画の範囲確認発掘調査事業として実施している。発掘区は第2次調査がA～D発掘区の4ヶ所、第3次調査がA・E・F発掘区の3ヶ所である。

A発掘区（2・3次） 1972年に奈良県が実施した埋葬施設の粘土椀SX01の再確認を行うために発掘区を設定した。掘削は、同時並行で実施した古墳学習事業に係り参加した一般市民等と共に進めた。2ヶ年で概ね現地表下約0.4mまで掘り下げが完了し、墓坑1段目の輪郭を検出した。一度掘削されているため、やや不整形であるが長さ約10m、幅約7mで、南東隅は盗掘坑により壊されているようである。

A発掘区東拡張区 墳頂部の埴輪列や埴の有無を確認することを目的として、A発掘区の東側に試掘トレンチを設定した。墳頂の中心から約8.5mの位置で高さ0.8m

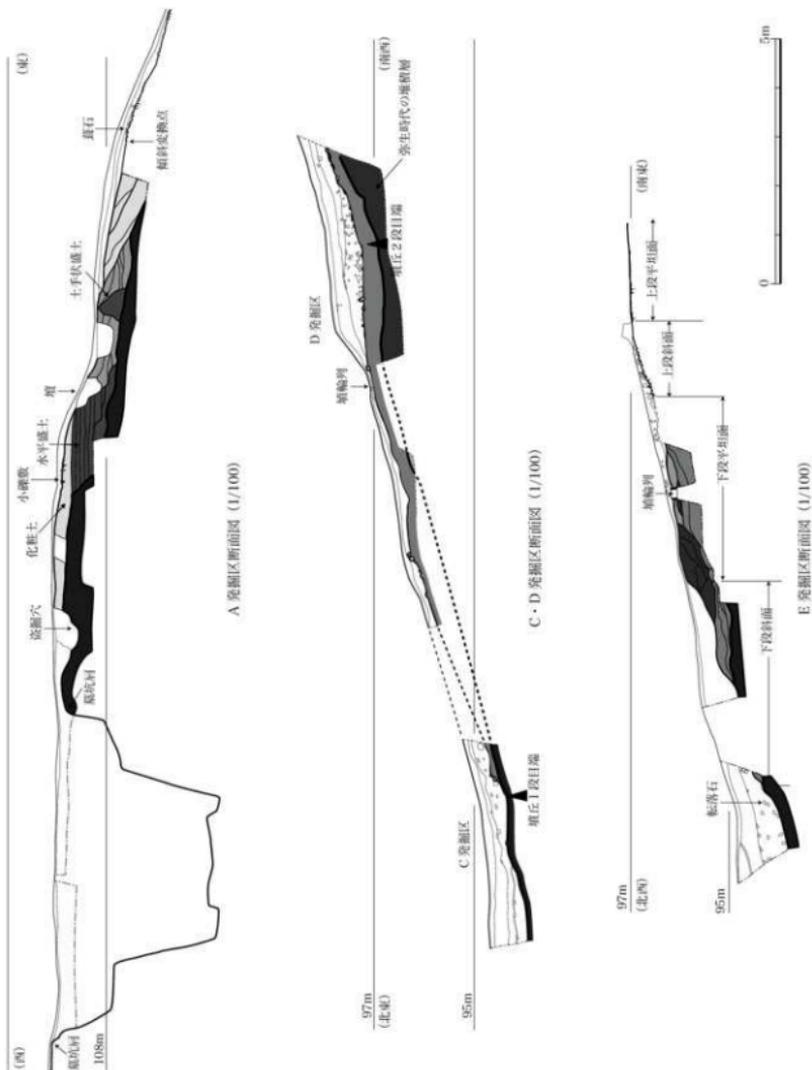


の壇を確認した。壇部分では、砂質の地山を削り出し、その周縁に厚さ0.1mずつ水平に盛土して高まりをつくり出している。その上には厚さ0.2mの化粧土をおき、表面の一部で小礫敷を確認した。壇の斜面部分は、擾乱により壊されていたため形状は不明である。3段目の平坦面は地山上に高さ約0.6mの盛土を土手状にめぐらせながら成形している。

概ね現地地形から推定した位置で3段目斜面との傾斜変換点、および斜面の葺石を検出した。墳頂部中心の埋葬施設に併設するような埋葬施設を東側では確認できない。

B発掘区(2次) 推定される造出し中心部を基準に推定した主軸に沿って四分法で発掘区を設定した。造り出し部分は棕色土の地山を成形した後、厚さ約0.5mの白色粘土ブロック混じりの黄褐色土で盛土が行われている。造り出し中心部から墳丘本体との接続部分にかけて近代以降に削られたと考えられ、本来の墳丘面が残っていないことがわかった。造出し斜面は、場所により様相が異なる。

発掘区北東部(造出し前面)では、表土下に埴輪片や転落石を多く含むオリブ褐色土が堆積し、それを除去すると墳丘面となる。墳丘面に残存する葺石は部分的に



しなく、ほとんどが転落している。裾付近では人頭大の基底石を確認した。ただし、目地等は確認できず、いくらか崩れた状態であると考えられる。埴輪列は確認できなかった。

発掘区南東部（造出し南東側面）では、表土掘削後に拳大の敷石を検出した。ただし北西側面のように明確な平坦面や斜面への傾斜変換がみられない。このため、造出しは左右対称の形状にならない可能性が考えられる。

発掘区南西部は、墳丘の3段目斜面まで発掘区を伸ばして調査した。造出し平坦面で盛土の状況を確認するために墳丘の断面調査を行ったところ、地山直上面で1条の石列を検出した。この位置は1段目平坦面の円筒埴輪列復元ラインとほぼ一致する。

2段目平坦面は、墳丘が崩れており残存状態は悪いが、幅約8.8mの平坦面とその中央に円筒埴輪列を検出した。埴輪列は地山を布掘りして据えられており、この付近では地山を削り出して埴輪が構築されたことがわかる。埴輪列は約20cm間隔で立て並べられ、概ね直径30cmの個体を主とするが、直径約35cmとやや大きめの個体もみられる。なお、埴輪列よりやや北側では、その下層に弥生時代後期の土器を含む堆積層があり、この部分では地山をL字状に掘り込んで平坦面をつくりだしている。平坦面の端には地山を掘り込む溝SD03も確認できることから、弥生時代後期の竪穴建物や墳丘下に埋もれている可能性がある。後述するD発掘区でも弥生時代後期の堆積層を確認しており、弥生時代の遺跡が下層に重複する可能性が高い。

3段目斜面は、葺石がほとんど残存しないが、平坦面との接続部分付近にやや大きめの石が散在する。現位置

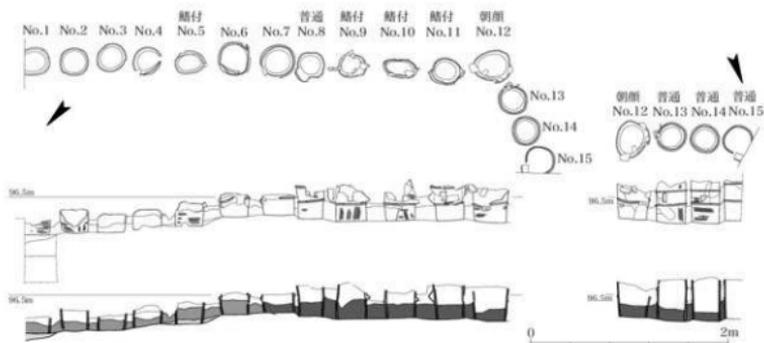
ではないが、3段目斜面の根石としてやや大きめの基底石を用いていたことが想定できる。

C発掘区（2次） 埴輪裾の確認を目的に発掘区を設定した。表土下に転落石を含むオリーブ褐色土の流土が堆積し、その下にわずかに黄褐色粘質土の盛土が確認できる。盛土下は橙色砂礫土の地山が削り出されており、1段目斜面の傾斜が水平に屈曲する部分で盛土もみられなくなる。盛土直上面で葺石はほとんど残存しておらず、基底石も確認できなかったが、この傾斜変換点が埴輪裾である可能性が高い。裾から約1.4mの平坦面があり、その先は地形に沿って下降している。

D発掘区（2次） 1段目平坦面付近の埴輪構造を確認するために発掘区を設定した。表土掘削後、オリーブ褐色土、転落石を多く含む褐色土の流土があり、それを除去すると埴輪面となる。2段目平坦面と同様に幅約7.2mの平坦面ほぼ中央で円筒埴輪列を検出した。ただし、崩れており、埴輪の設置方法等は不明確である。平坦面には拳大の礫および2cm前後の小礫が敷かれている。前後の斜面にもわずかに葺石が残存する。埴輪面を一部掘り下げたところ、弥生時代後期の遺物包含層があり、これを成形した後、黄褐色土の盛土で埴輪を整形している。

E発掘区（3次） 造出し北西側面に設定し、南西・南東方向へ幅約1mの拡張区を追加で設定した。

造出し北西側面は、斜面が2段に築成されており、平坦面には3cm前後の小礫を敷き、斜面には拳大の葺石を施す。上段葺石では斜面下部に横目地となる石列を確認したが、その他の目地は崩れていて不明瞭である。明確な基底石はなく、横目地となる石列より下部は付け足し



造出し (E 発掘区) の埴輪列 (1/50)

たような印象をもつ。

上段平坦面は墳丘本体側へ向かって高くなり、斜面との変換線は外側へハの字形に開く。これに従って上段斜面の高さも墳丘本体側が高く、造出し前面側が低くなるため、前面に向かって上段平坦面と上段斜面が収斂するような形状になると考えられる。造出し下段平坦面は幅約4mで、小礫数は上段斜面の裾付近にのみ原位置をとどめていたが、その他は流出して埴輪片とともに散らしていた。

円筒埴輪列は造出し下段平坦面のほぼ中央で検出した。発掘区内で15本確認し、円丘に沿って途中で屈曲する。埴輪の設置レベルが第2次調査で確認した墳丘1段目平坦面の埴輪列とほぼ同様であることから、これに接続するものと考えられる。埴輪列には堀方がなく、土層断面の観察から盛土で造出しを構築した後、埴輪を設置して1段目突帯付近まで埴輪の内外を埋め、敷石を施していた。

造出し下段斜面をトレンチで確認し、墳丘裾と考えられる盛土と地山の接する傾斜変換を確認した。この標高は94.2mで、第2次調査で確認した造出し前面裾が94.5mであることから、概ね一致する。この墳丘裾以下には転落石が多く溜まっていた。部分的に確認しただけであるため、今後くびれ部を含めて墳丘裾を再確認する必要がある。

また、造出し下段平坦面のくびれ部付近で葦石とは異なる集石を確認した。葦石より大きめの石材が多く、石組のようにもみえる。重複関係から、下段平坦面の小礫敷を行なった後に配石されている。集石の南東側にあたる造出し上段斜面の葦石が崩れており、相互関係があるようにもみえる。性格等は不明であるが、墓道状遺構の一部である可能性もある。

南西方向に拡張したトレンチでは、2段目平坦面と前後の斜面を確認した。概ね第2次調査成果から復元した位置で傾斜変換点を確認した。また、円筒埴輪列が想定される部分には埴輪を確認できなかったが、布置りの痕跡を確認した。南東側に拡張したトレンチでは、小礫敷が部分的に残存する部分を確認したが、ほとんど流出していた。

F発掘区(3次) 第2次調査で確認した掘り込みSX02の範囲を確認するために設定した発掘区である。SX02の輪郭は幅約3m、長さ約9mの長方形となる。造出しおよび墳丘本体との関係は、まず地山を削り出して墳丘を成形した後、造出しを盛土で成形する。この際、主軸上の造出しと墳丘本体の接続部分に、造出し上段平

坦面よりさらに1段高い高まりを設け、その平坦面に葦石と同様の石材で礫敷を行う。その後、この礫敷を埋めて再度盛土を行い、その上からSX02を掘り込んだ後埋め戻して石を葺く。土層断面の観察では、SX02を埋めた土は中心部分が陥没し、そこに葦石や埴輪片を含む流土が堆積している。これらの状態から、SX02の内部には何らかの施設があり、それが腐朽し陥没したなか、葦石が崩れて堆積した状況を想定できる。なお、遺構の性格を特定できるような遺物は出土していない。

IV. 出土遺物

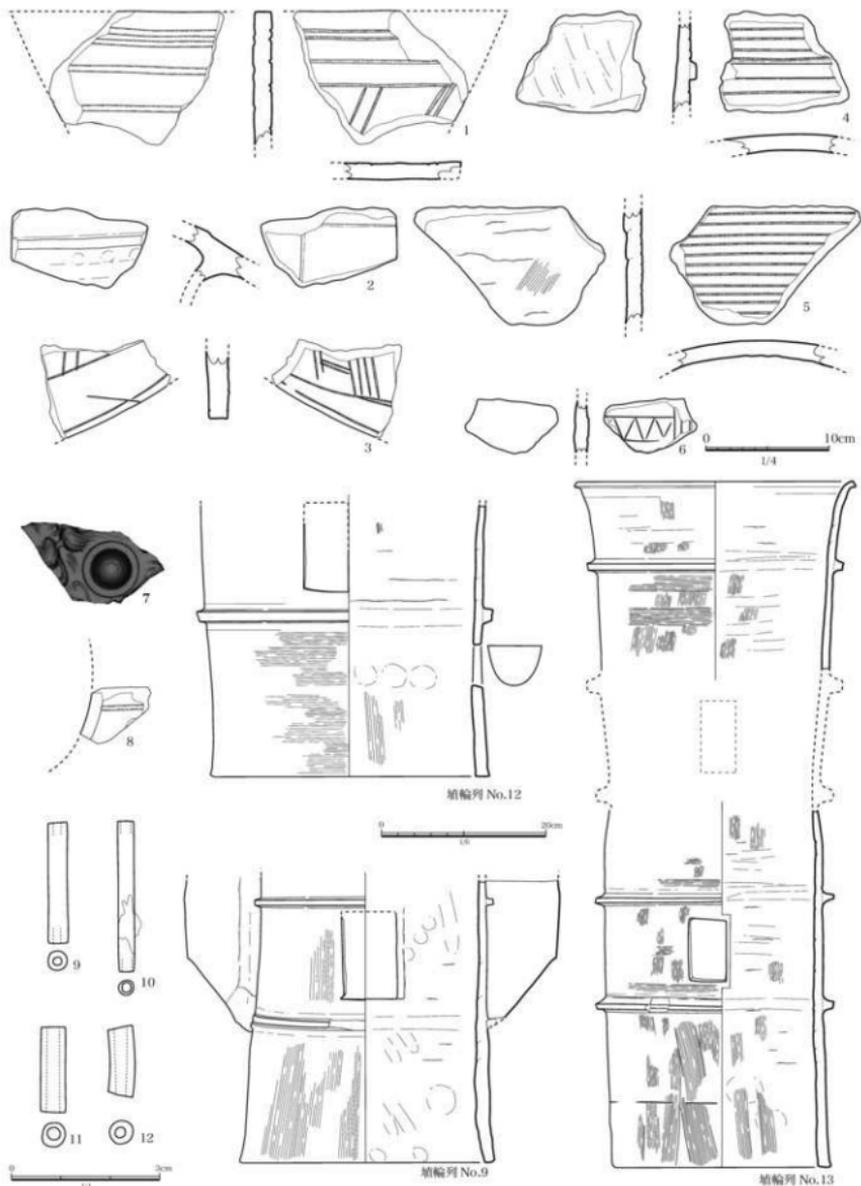
遺物整理箱41箱分がある。内訳は、弥生時代後期の弥生土器(甕・高杯)、4世紀中頃の円筒埴輪(普通・齧付楕円)、形象埴輪(家・蓋・盾・草摺)、斜線神獣鏡、鍬形石、管玉、銅鏡、鉄製品(刀・剣・刀子・鏃・籠手・鋤先・不明)、円板状土製品、6世紀前半の須恵器杯、近代の陶磁器、土製品、時期不明の鉄製品がある。整理中のため、以下では概要のみを記す。

弥生土器はB・D発掘区の墳丘下層から出土したもので、第V様式の甕と高杯がある。

円筒埴輪は、普通円筒埴輪のほかには齧の幅が約10cmの齧付楕円筒埴輪がある。E発掘区で検出した埴輪列では、底部径34cm、底部高19cmで底部に半円形透孔を有する朝顔形埴輪(No.12)、底部径26.5cm、底部高19.5cm、突帯間隔13.5cm、口縁部高11cmで方形透孔の配置から5条6段構成に復元できる普通円筒埴輪(No.13)、底部長径31cm・短径19.5cmの楕円を呈し、底部高16.5cm、突帯間隔15cmで方形透孔を伴う齧付楕円筒埴輪(No.9)などがあり、他にも三角形透孔を伴うものや底部に円形透孔のあるものなどがある。

形象埴輪はA発掘区で盾・草摺形埴輪が出土した。草摺形埴輪(6)は小片であるが鋸歯文が線刻されたものである。D発掘区では蓋形埴輪が出土した。蓋形埴輪は笠部を立体表現するもの(2)である。立ち飾り部は用形文を線刻する先端の破片(1)が佐紀陵山古墳出土品に類似し、異なる部位の破片(3)もある。E発掘区では網代表現をもつ家形埴輪、F発掘区では盾面を突帯で区画し平行沈線を入れる盾形埴輪(4・5)が出土した。

斜線神獣鏡1点、鍬形石1点、管玉4点、銅鏃1点、円板状土製品5点、鉄製品約150点はA発掘区で出土した。斜線神獣鏡(7)は、内区を区画する乳と脇侍の一部が確認できる破片で、わずかに朱が付着する。鍬形石(8)は緑色凝灰岩製で内孔の一部と裏面に沈線が1条残る。この特徴をもとに京都国立博物館所蔵の鍬形石



TOM第2・3次調査出土遺物 (1~6:1/4, 7~12:1/1, 植輪列No.9・12・13:1/6)

と実物照合を行ったところ、現体を大きく欠損する楕円形石の一部である可能性が高いことが判明した。管玉は、緑色を呈し長さ約3cmの細長いもの2点(9・10)、白色を呈し長さ約1.5cmのもの1点(11)、濃緑色を呈し長さ1cm程度でやや屈曲し端部がひの字に加工された手玉の可能性のあるもの1点(12)がある。円板状土製品は、手捏ねで作られたもので、土製模造品のひとつとして前後後半～中期前半の古墳から出土がみられるものである。鉄製品は県第1次調査で出土した種類と共通するもので、ほとんどが小片である。

6世紀前半の須恵器杯は造出し前面葺石の転落石除去中に出土した。このことから、墳丘各所でみられる転落石を多く含む流土は、6世紀前半を前後する時期に墳丘が大きく崩れて堆積したものである可能性がある。なお、現状の不明鉄製品が同地点の墳丘裾付近に堆積する流土上層から出土した。

近代土製品は、火鉢類の破片と思われ、造出し中央の上段平坦面から前面斜面にかけて出土した。この時期に造出し上段中央付近が削られたと考えられる。

V. 調査所見

i) 富雄丸山古墳の形状と構造

墳丘裾 C 発掘区で確認した。これを墳丘裾とみて、測量図から復元できる墳頂部の中心から計算すると、直径109mの円墳に復元できる。ただし、今回の調査地点は残りが悪く、今後複数箇所でも墳丘裾を確認し形状を確認する必要がある。

墳丘1段目 斜面幅約4.3m、平坦面幅約7.2mである。D 発掘区では円筒墳輪列の残りが悪かったが、平坦面のほぼ中央にめぐることが確認できた。池跡断面で確認した円筒墳輪も平坦面の中央付近に位置し追認できる。ただし、この円筒墳輪列が造出しにどのように取りつかは確認できておらず、今後の課題である。

墳丘2段目 斜面幅約4.7m、平坦面幅約8.8mである。B 発掘区部分は現地形をみても大きく崩れており、平坦面および斜面の葺石・敷石はほとんど残存していなかった。また、平坦面中央にめぐる円筒墳輪列は地山を布張りして据えているが、E 発掘区の墳輪列に掘方がなかったように、墳輪の据え方に違いがある可能性がある。

2段目平坦面の墳輪列は約20cm間隔であるため、出土した鱗の破片の多くは幅が約10cmなので、鱗が接するように据えられていた可能性が考えられる。

墳丘3段目 3段目斜面は、1・2段目との対比で1:1:2となり、最も高くなる。また、墳頂部平坦面の中心部にはさらに1段高い墳が存在した可能性が高い。墳頂部と埋葬施設との位置関係はこれまで不明確であったが、墓坑の輪郭からみて、概ね墳頂中心部に粘土層があると推定できる。

造出し 造出し中心付近は近代以降に削られているが、北西側の上段平坦面の標高が97.0mであり、中央付近で残存する最も標高の高い地点で97.6mであることから、北西側の上段平坦面からみて中心側はさらに1段高まっていたと推定できる。

造出し南東側面は石敷のある緩い斜面が発掘区端まで続き北西側面とは様相が異なる。現況をみても、南東側へ張り出す地形を看守できる点も重要である。このことから、造出しは左右対称の形状ではない可能性がある。

ii) F 発掘区で検出した遺構について

F 発掘区で検出した幅約3m、長さ約9mの長方形掘方をもつSX02は、先述の通り内部に何らかの施設を有している可能性がある。造出しに施設のある例は、兵庫県行者塚古墳や京都府久津川車塚古墳などで確認されているが、富雄丸山古墳はこれより時期が遡る。SX02の性格は今後の調査に委ねるが、少なくとも掘り込みを行う以前から周囲より1段高く盛土し、平坦面を設けていたことは確かである。造出しの出現およびその機能を解明する上で、重要な遺構であると考えられる。

iii) 古墳以前の遺跡

墳丘下で堅穴建物の可能性がある遺構や弥生土器を含む堆積層を確認した。この地点は概ね標高100m付近で、周辺には弥生時代後期の六条山遺跡などもあり、古墳築造以前に高地性集落として土地利用されていた可能性が高い。

(村瀬 陸)

註

- 1) 奈良県教育委員会1973「富雄丸山古墳発掘調査報告」
- 2) 泉森岐1986「富雄丸山古墳の墳形について」『青陵』59 奈良県立原考古学研究所



A 発掘区 東裾張部 (東から)



B 発掘区 墳丘内列石 (北東から)



B 発掘区 2 段目平坦面の埴輪列 (北から)



C・D発掘区 全景（北東から）



D発掘区 1段目平坦面の埴輪列（北東から）



E発掘区 築石遺構（北から）



B発掘区 造出し北東側 全景（北東から）



B発掘区 造出し南東側 全景（南東から）



E発掘区 埴輪列 コーナー付近（北から）

11. 平成30年度実施 遺跡有無確認踏査一覧

平成30年度の遺跡有無確認踏査は4件実施し、いずれも遺跡は確認できなかった。

受理番号	踏査地	踏査日	事業面積 (㎡)	事業者	事業内容	踏査所見
1 H30:4002	中山町西二丁目946番3、他21筆	H30.7.25、27	20,589.43	個人	宅地造成	遺物、遺構とも確認できなかった。
2 H30:4003	小倉町1180番9、他13筆	H30.7.25	37,854.38	京都グレインシステム(株)	倉庫新築	遺物、遺構とも確認できなかった。
3 H30:4005	中畑町1132番、他52筆	H30.12.11	92,234.87	(株)日本エコロジ	林地開発	遺物、遺構とも確認できなかった。
4 H30:4004	横井町924-6の一部、他5筆 白巻寺町1195-3の一部、他4筆	H31.3.27	52,587	奈良市民	火葬場及び市道の整備	遺物、遺構とも確認できなかった。

12. 平成30年度実施 工事立会一覧

平成30年度に土木工事等に関わってのべ221件の立会を実施した。

受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
						日付	結果
1						H30.4.2	盛土1.3m以上
2 H29.3545	右京四条三坊十坪	平池一丁目9番1、22番1の各一部	新生土地(株)	擁壁の設置・スロープ造成	宅地	H30.5.10	GI-1.7m 盛土1.5m、黒灰色土(耕作土)0.2m以上
3 H29.3249	左京二条二坊五十一坪	法華寺町地内	奈良市公共下水道管理者	下水道工事	道路	H30.4.3	GI-2.0~2.7m 盛土2.0m黒灰色土(耕作土)0.2m、灰色土0.5m
4 H29.3452	一条楽間路	西大寺一丁目2347-1・2341-1・2347-10の各一部	近畿日本鉄道(株)	仮設駅舎新築	駅前広場	H30.4.4	GI-1.35m アスファルト0.07m、コンクリート及び砕石0.43m、盛土0.6m、黒灰色土(耕作土)0.15m、灰色砂質土0.1m
5 H29.3536	北辺西一坊大路	山陵町5-1	関西電力(株)	電柱新設	陵墓地	H30.4.4	GI-2.6m 暗褐色土(表土)0.1m、淡褐色土1.4m、以下地山の暗褐色粘土
6 H29.3365	護国神社前池中古墳	古市町1848番1	ウエーブエネルギー(株)	太陽光発電所設置	宅地	H30.4.5	整地のほ、ほとんど掘削されず
7 H29.3538	右京三条二坊五坪	厄辻北町320番4、320番1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.5	GI-0.4m 盛土0.4m以上
8 H29.3518	西大寺旧境内	西大寺野町町一丁目627番1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.5	GI-1.3m 黒灰色土(耕作土)0.2m、灰色土0.05m、黄灰色土0.05m、灰褐色土0.1m、褐色土0.2m、以下地山の黄灰色粘土0.3m、暗灰色粘土0.2m、灰色粘土0.2m以上
9 H29.3472	右京四条三坊十五坪	平池一丁目15番11	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.9	GI-0.3m 盛土0.3m以上
10 H29.3002	五条大路 奈良町遺跡	京終地方東御町21-5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.9	GI-0.3m 盛土0.3m以上
11						H30.4.9	敷地西辺部:耕作土直下で黄白色粘土(地山)確認
12 H29.3585	秋篠寺旧境内下ヨ一塚	秋篠町847-1、844-1	個人	共同住宅新築	宅地	H30.4.10	敷地北辺部:GI-0.7~1.2m 黒褐色土(表土)0.2m、黒灰色土(耕作土)0.15m、赤褐色土(灰土)0.15m、灰色土0.2m以上、敷地北東角から1.8mで、下ヨ一塚西側の黄白色粘土(地山)確認
13 H29.3521	右京二条四坊十六坪	若葉台三丁目323番22、2656番	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.10	GI-1.6m 盛土1.6m以上
14 H29.3582	元興寺旧境内、奈良町遺跡	鶴畑町15番、16番	個人	共同住宅新築	宅地	H30.4.11	GI-1.0m 黒褐色土(表土)1.0m以上
15 H29.3513	長谷遺跡	佐保台西町56番、57番、59番	(株)フクダ不動産	共同住宅新築	宅地	H30.4.12	GI-2.8m 盛土(造成土)2.8m以上
16 H29.3495	左京五条三坊三十四坪	五条二丁目560番、559番の各一部	洋園開発(株)	宅地造成	道路	H30.4.16	GI-2.5m 盛土0.6m、黒灰色土0.6m、暗灰色粘質土0.5m、黒灰色粘質土0.3m、黄灰色粘土(地山)0.5m以上
17 H29.3549	左京五条六坊七坪 奈良町遺跡	西本辻町353-2、353-1、351-1	関西電力(株)	電柱・支線新設	道路	H30.4.17	GI-0.5~0.6m 盛土0.2~0.3m、黒褐色土0.3~0.4m以上

受理番号	道路名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査		
						日付	結果	
18	H29.3397	左京九条三坊三・五坪	西九条町四丁目2番地の2	大和ハウス工業(株)	汚染土壌の掘削除去、擁壁撤入試験調査	工場用地	H30.4.20	A区:GL-1.5m 上から0.8m除去。以下黒灰色土(耕作土)0.05m、灰色砂質土0.25m、黄灰色砂質土0.2m、以下灰褐色砂質土(道構面)0.2m以上 B区:GL-2.6m 上から0.8m除去。灰色砂質土0.3m、灰褐色砂質土(道構面)0.3m、淡褐色砂質土0.1m、黒褐色粘土0.2m、黒灰色粘質土0.25m、暗灰色砂0.15m、黒灰色粘土0.5m以上
19	H29.3465	ウツナバ古墳	法華寺町1155番3	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.4.20	GL-2.0m 盛土1.3m、暗褐色砂質土0.7m以上
20	H29.3494	東市跡	東九条町・西九条町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H30.4.23	GL-2.3m マサ土(盛土)1.2m、暗灰色土(盛土)0.5m、以下地山の黄灰色粘土0.25m、黒灰色粘土0.3m、黒灰色粘砂0.05m以上
21	H29.1065	史跡西大寺境内	西大寺南町	奈良市長	公園整備工事	駐車場	H30.4.23	GL-1.0m 盛土0.8m、黒灰色土0.2m、以下灰色粘質土(地山)
22	H29.3467	奈良町道跡	今在家町12番1、13番1、13番3、瀬町町7番3、7番10、7番11	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H30.4.24	GL-1.0m 盛土0.2m、黒褐色土(表土)0.8m以上
23	H29.1179	史跡大安寺旧境内附石橋瓦葺跡	大安寺町二丁目1299番1、1320番、1322番-1・2・3	(宗) 大安寺	延石の撤去移設、橋載の撤去移設	宅地	H30.4.25	GL-0.4m 黒褐色土(表土)0.4m以上
24	H29.3578	東六坊四条大路	南魚屋町18-9、18-10	個人	個人住宅新築	駐車場	H30.4.27	GL-2.0m 盛土0.2m以上
25	H29.3029	右京三条三坊十六坪	菅原町432番5、432番6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.8	GL-1.9m 盛土1.9m以上
26	H30.3003	左京二条七坊北郊	西包永町9番1、9番2、9番3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.9	GL-0.6~0.65m 黒褐色土(表土)0.5~0.55m、黄褐色土(地山)0.1m以上
27	H29.3332	左京五条二坊三坪	大安寺町518-1	(株) ヤナセ	車庫新築	青空駐車場	H30.5.14	GL-1.5m 盛土1.5m、以下黒灰色土(耕作土)
28	H29.3525	左京三条六坊九坪奈良町道跡	中筋町5番4の一部	天美学園ナーサリー(株)	保育所新築	宅地	H30.5.16	GL-2.5m 黒褐色土(表土)0.25m以下黄灰色砂質土(地山)
29	H29.3544	右京五条三坊十五坪	平松二丁目281番76	アイディホーム(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.5.14	GL-0.3m 盛土0.3m 以下黄灰色砂質土(地山)
30	H29.3561	右京二条三坊十四坪、二条条間跡	青野町一丁目57-3、青野町56-3	関西電力(株)	電柱建替・新築	道路	H30.5.21	GL-1.0~1.1m 盛土1.0m以上
31	H29.3577	左京四条六坊六坪奈良町道跡	南魚屋町39	関西電力(株)	電柱建替・支線新築	道路	H30.5.28	GL-0.65m 黒褐色土(表土)0.3m、赤灰色粘土(地山)0.6m
32	H30.3100	左京五条六坊九坪奈良町道跡	南袋町26番2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.28	GL-0.3m 盛土0.2m、黒褐色土(表土)0.1m以上
33	H29.3490	左京九条三坊二坪	西九条町二丁目7-1、7-2	個人	共同住宅新築	宅地	H30.5.28	GL-0.8m 盛土0.2m、黒褐色土0.6m以上
34	H29.3503	右京三条二坊十二坪、三条大路	尼辻北町230-2の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H30.5.29	GL-1.7m 盛土1.1m、赤灰色粘土(地山)0.6m
35	H30.3079	古市道跡	古市町1518番1(1号棟)	(株)アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.5.29	GL-0.6m 盛土0.4m、赤褐色砂質土(地山)0.2m以上
36	H30.1030	史跡大安寺旧境内	大安寺町二丁目1229-1	(宗) 大安寺	電線の地下埋設工事	寺院境内	H30.5.29	GL-0.2m 盛土0.2m以上
37	H29.3424	左京九条四坊七坪	東九条町293番	平井建設(株)	資材倉庫新築	工場用地	H30.5.30	GL-1.0m 盛土0.7m、黒灰色土(耕作土)0.3m以上
38	H30.3105	古市城跡	古市町1841番6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.31	GL-0.3m 褐色土(表土)0.3m以上
39	H29.3094	東一坊坊間東小路	四条大路二丁目858-1	(株)ひまわりの会	擁壁工事	青空駐車場	H30.6.4	GL-0.7m 砕石0.5m、黒灰色土(耕作土)0.2m、以下淡黄灰色砂質土(包含層)
40	H30.3045	左京五条二坊四坪	大安寺町498-1、498-2	奈良日産(株)	店舗新築	宅地	H30.6.4	GL-0.8~2.0m 盛土1.4m、黒灰色土(耕作土)0.2m、灰色砂質土0.2m、灰色粘砂(河川堆積土)0.2m以上
41	H30.3089	左京四条一坊十六坪	四条大路二丁目826-1	(株)ひまわりの会	青空駐車場	水田	H30.6.5	GL-0.4m 黒灰色土(耕作土)0.4m、以下淡黄灰色砂質土
42	H29.3423	元興寺旧境内、奈良町道跡	今御門町24番地、26-2番地	(株)ホウユウ	店舗新築	宅地	H30.6.7	GL-1.1m 盛土0.2m、黒褐色土0.9m以上
43	H29.3038	西四坊大路	平松五丁目632-6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.7	GL-0.3m 砕石0.1m、黄灰色粘土(地山)0.2m以上

	受理番号	道跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
44	H29.3524	右京六条四坊七・八坪	六条二丁目1017番及び1019番1	個人	共同住宅新築	水田	H30.6.8	GL-0.6m 黒灰色土(耕作土)0.1m、淡灰色土0.2m、以下明黄褐色粘土0.3m以上
45	H30.3074	左京四条三坊五坪	三条松町636番3の一部	個人	車庫新築	宅地	H30.6.8	GL-0.3m 砕石0.1m、盛土0.2m以上
46	H30.3462	左京五条四坊四坪	大安寺町801番6	クレイジーモーターワークスカイ(有)	店舗新築	宅地	H30.6.11	GL-1.3m 盛土1.3m以上
47	H30.3505	左京二条三坊十坪	法華寺町27番1、27番2	(株)八洲エージェンツ	宅地造成	水田	H30.6.11	GL-1.3m 盛土1.3m以上
48	H30.3023	左京四条三坊五坪	三条松町30-29-31-4他	関西電力(株)	電柱・付属物の新設・撤去	道路	H30.6.11	GL-1.3m 盛土1.3m以上
49	H30.3027	左京八条四坊三坪	東九条町577-1	関西電力(株)	電柱新設	宅地	H30.6.11	GL-2.7~3m 黒灰色土(耕作土)0.25m、灰色土0.25m、黒色土0.2m以上
50	H29.3521	右京二条四坊十六坪	若葉台三丁目323番22、2656	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.12	GL-0.2m 黒褐色土(表土)0.1m、以下黄灰色粘質土(地山)0.1m以上
51	H30.3591	左京一条四坊十四坪	法蓮町652-3地内・652-5-686地先	関西電力(株)	本柱・支線の新設撤去、接地棒新設	宅地	H30.6.12	GL-0.7m 盛土0.3m、黒灰色土(耕作土)0.3m、暗褐色砂質土(地山)0.1m以上
52	H30.3076	佐伯院跡、奈良町道跡	北斎町31番1、32番1	個人	医院併用住宅新築	宅地	H30.6.15	GL-0.25~0.65m 黒褐色土(表土)0.25~0.65m以上
53	H30.3089	西大寺旧境内	西大寺新田町541番1	個人	個人住宅新築	山林	H30.6.18	GL-1.5m 盛土1.5m、以下黒灰色土(耕作土)0.2m、以下黄灰色砂質土(地山)1.3m以上
54	H30.3033	右京五条四坊八坪	平松四丁目449-4	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.18	GL-0.2~0.3m 盛土0.3m以上
55	H30.3022	右京四条一坊八坪	四条大路四丁目48番1、50番	個人	スイミングスクール用地造成	畑地	H30.6.19	GL-0.55~1.1m 黒灰色土(耕作土)0.25m、灰白色砂質土0.3m、灰褐色土0.2m、黄灰色粘質土(地山)0.4m以上
56	H30.3473	新薬師寺旧境内、奈良町道跡	高畑町672番1、672番2、675番1、675番2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.21	GL-0.4m 黒褐色土(表土)0.4m以上
57	H29.3565	正暦寺	菩提山町77番	KDDI(株)	携帯電話基地局設置	駐車場	H30.6.25	GL-3.1m 砕石0.15m、暗褐色土(表土)0.45m、淡褐色土砂質土0.4m以上
58	H29.3088	右京北辺三坊一坪	秋津早月町231-1番地~西大寺新町一丁目4-9	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H30.6.27	GL-1.4m アスファルト0.05m、砕石0.15m、暗灰色土0.4m 灰褐色0.2m 黄灰色粘土(地山)0.5m以上
59	H29.3060	左京五条四坊十三坪	大安寺六丁目824番1の一部	(株)クレアデルネ	共同住宅新築	駐車場	H30.6.29	GL-0.65m 盛土0.35m、黒灰色土(耕作土)0.25m、黄灰色粘質土(地山)0.05m以上
60	H30.3081	右京五条四坊二坪	平松町360番17、19(2号棟)	(株)アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.6.30	GL-1.73m 灰黄褐色砂質土0.1m、黒褐色砂質土(耕作土)0.38m、灰褐色砂質土0.7m、黄褐色砂質土(地山)0.55m以上
61	H30.3080	右京五条四坊二坪	平松町360番2、18(1号棟)	(株)アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.6.30	GL-1.7m 砕石0.05m、黒褐色砂質土(耕作土)0.3m、灰褐色砂質土0.35m、黄褐色砂質土(地山)1.0m以上
62	H30.3147	古市道跡	古市町1669番5(1号棟)	(株)アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.6.30	GL-0.3m 砕石0.13m、茶褐色砂質土0.17m以上
63	H30.3026	右京三条一坊十三坪	三条大路四丁目512-1	(株)あきんどシロウ	店舗新築	宅地	H30.7.2	GL-0.4m 盛土0.4m以上
64	H29.3528	二条条間路	川久保町23番1、23番3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.3	GL-0.26m 砕石0.06m、黒灰色土(表土)0.2m以上
65	H30.3040	右京五条三坊一坪	五条一丁目451-3、79-3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.9	基礎掘削なし、GL+0.14mの砕石敷く
66	H30.3011	西大寺旧境内	西大寺芝町二丁目2552-2番地 地先	関西電力(株)	本柱・支線の建替	道路	H30.7.10	GL-0.9m コンクリート0.3m、盛土0.3m、黄灰色砂質土(地山)0.3m以上
67	H30.3044	古市城跡	鹿野町19番1	KDDI(株)	既設携帯電話基地局設備増設	宅地	H30.7.11	GL-0.4m 盛土0.25m、黒褐色土(耕作土)0.15m以上
68	H29.3579	左京九条四坊十坪	東九条町260-1、260-3	トヨタ部品奈良共販(株)	事務所新築	宅地	H30.7.17	GL-0.95m 盛土0.95m以上
69	H30.3107	二条大路	菅原町637-1~菅原町	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H30.7.17	GL-0.9m アスファルト・クラッシャー0.2m、盛土0.5m、茶褐色土(表土)0.2m
70	H29.3519	右京三条四坊二坪	菅原町663-8、666、667-1の各一部	リアルアセット(株)	宅地造成	道路	H30.7.17	GL-0.9m アスファルト・クラッシャー0.2m、盛土0.5m、茶褐色土(表土)0.2m

受理番号	道跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査		
						日付	結果	
71	H30.3052	右京七条三坊五坪	七条一丁目 405 番 12	一建設 (株)	分譲住宅新築	宅地	H30.7.18	GL-0.4 m 盛土 0.4 m以上
72	H30.3591	左京二条七坊十二坪	南半田中町 21-13 番地	関西電力 (株)	電柱新設	道路	H30.7.19	GL-0.6 m 黒褐色土 (表土) 0.6 m以上
73	H30.3099	右京四条三坊九・十坪	宝来二丁目 3 番、126 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-0.4 m 盛土 0.2 m、黒灰色土 (耕作土) 0.2 m以上
74	H30.3073	左京一条四坊十坪	法蓮町 1962 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-1.8 m 盛土 0.8 m、以下地山の赤褐色砂質土 0.3 m、黄灰色砂質土 0.7 m以上
75	H29.3551	六条大路	六条三丁目 1174 番 16 (2号地)	アイディホーム (株)	分譲住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-0.2 ~ 0.6 m 盛土 0.3 m、黄灰色砂質土 (地山) 0.3 m以上
76	H29.3550	六条大路	六条三丁目 1174 番 16 (1号地)	アイディホーム (株)	分譲住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-0.4 m 盛土 0.3 m、黄灰色砂質土 (地山) 0.1 m以上
77	H29.3508	左京四条四坊七坪	三条添田町 229 番 1	個人	事務所新築	宅地	H30.7.24	GL-1.0 m 盛土 1.0 m、以下灰色砂
78	H29.3533	松林苑隣接地	佐紀町地内	奈良市公営企業管理者	下水道工事	道路	H30.7.25	GL-2.55 m アスファルト 0.05 m、暗灰色土 (表土) 0.2 m、黄褐色土 0.4 m、以下地山の赤褐色土 0.4 m、黄白色砂礫 1.5 m以上
H30.7.30							GL-3 m 暗灰色土 (表土) 0.25 m、黄褐色土 0.4 m、以下地山の赤褐色土 0.4 m、黄白色砂礫 1.95 m以上	
80	H30.3151	左京五条六坊四坪	西木辻町 139 番、139 番 31 の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.31	GL-0.2 ~ 0.25 m 黒褐色土 (表土) 0.2 m以上
81	H30.3184	新薬師寺旧境内、奈良町道跡	高畑町 468 番	観神社	炊事場新築	宅地	H30.8.3	GL-0.4 ~ 0.9 m 盛土 0.4 m、黄褐色砂礫 (地山) 0.5 m以上
82	H30.3115	左京三条五坊一・二坪	芝辻町一丁目 110 番一の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H30.8.6	GL-0.2 m 盛土 0.2 m以上
83	H30.3233	左京二条四坊十六坪	法蓮町 323 - 2、330-1 他	(株) 吉川商事	宅地造成	宅地	H30.8.17	GL-1.2 m 黒褐色土 (表土) 0.3 m、暗黄褐色土 0.2 m、暗黄褐色土 0.2 m、淡黄褐色土 0.4 m 以上
84	H30.3200	西大寺旧境内	西木小寺町 293-1	(株) 小林商店	店舗新築	宅地	H30.8.17	GL-0.3 m まで掘削 盛土 0.3 m 以上
85	H30.3145	四条大路	平松一丁目 94 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.8.20	GL-0.3 m 盛土 0.3 m以上
86	H30.3178	左京二条五坊二坪	法蓮町 326 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.8.20	GL-0.3 m 盛土 0.3 m以上
87	H30.3172	右京三条一坊十一坪	三条大路五丁目 496 番地	(株) インパクト	宅地造成	宅地	H30.8.20	GL-0.45 m 黒褐色土 (表土) 0.2m、暗黄褐色土 0.25 m以上
88	H30.3121	右京四条一坊八坪	四条大路四丁目 48-1、50	光雅興産 (株)	スイミングスクール新築	畑地	H30.8.27	GL-0.7 m 盛土 0.7 m以上
89	H30.1056	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目 1314-1-2、1303-17-19、1309-4	奈良市長 仲元元庸	ブロック塀の撤去・新設	学校用地	H30.8.28	GL-0.2 ~ 0.4 m 盛土 0.2 ~ 0.4 m以上
90	H30.3122	奈良町道跡	高畑町 824 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.8.30	GL-1.38 m 盛土 0.38m、黒色土 (解体時埋土) 1.0 m以上
91	H30.3131	左京四条五坊十二坪	大森町 301-15-301-17	関西電力 (株)	電柱新設	道路	H30.9.3	GL-1.3 m 盛土 0.9 ~ 1.1 m、黒褐色土 0.2 ~ 0.4 m以上
92	H30.3196	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 801-6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.6	GL-0.15 m 盛土 0.15 m以上
93	H30.3255	左京一条三坊十二坪	法華寺町 1359 番 1	(株) 吉川商事	宅地造成	畑地	H30.9.11	GL-1.7 m 砕石 0.3 m、暗褐色土 0.2 m、黄灰色粘砂 (地山) 1.2 m以上
94	H30.3206	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 134 番 5、135 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.14	GL-0.2 m 盛土 0.2 m以上
95	H30.3065	奈良町道跡	新堀町 15-1 (2号棟)	一建設 (株)	個人住宅新築	宅地	H30.9.18	GL-0.15 m 盛土 0.15 m以上
96	H30.3123	左京五条六坊十坪	西木辻町 298 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.18	GL-0.45 m 黒褐色土 (表土) 0.3 m、黄灰色粘土 (地山) 0.15 m以上
97	H30.3226	五条大路、奈良町道跡	中辻町 59 番地 4-5-12	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.20	GL-0.3 m 盛土 0.15 m、黒褐色土 (表土) 0.15 m以上
98	H30.3229	左京二条六坊北郊	法蓮町 958 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.21	GL-0.29 m 盛土 0.29 m以上
99	H30.3127	南紀寺道跡	南紀寺町二丁目 341 番 4	(株) 未来	宅地造成	青空駐車場	H30.9.25	工事範囲：敷地南側・西側：GL-1.8 m、北側：GL - 0.7 m、東側：GL-0.9 m 土層は南側・西側：盛土 0.8 m、耕作土 0.1 m、淡灰色砂質土 0.5 m、暗褐色砂質土 (土脚部包含) 0.3 m、淡黄褐色砂質土 0.2 m、茶褐色砂礫 (地山) 0.4 m以上、北側：盛土 0.8 m、耕作土 0.3 m以上

	受理番号	道路名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
100	H30.3250	右京二条二坊十四坪	西大寺園見町二丁目296番63	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.26	GL-0.3～0.6m 盛土0.3～0.6m以上
101	H30.3164	東五坊間西小路	大宮町一丁目43-3先	関西電力(株)	電柱建替・支線新設	道路	H30.10.1	GL-1.0m アスファルト0.1m、盛土0.9m以上
102	H30.3268	古墳(05A-0034)	西大寺赤田町一丁目989番19の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.2	GL-0.2～0.3m 黒濁色土(表土)0.2～0.3m、以下黄灰色粘質土(地山)
103	H30.3258	右京北辺四坊六坪	西大寺宝ヶ丘747番2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.4	GL-0.3～0.4mまで掘削 黄灰色粘質土(地山)0.3～0.4m以上
104	H30.3179	八条大路	東九条町282-4	関西電力(株)	本柱新設・建替	道路	H30.10.5	GL-0.7～0.8m アスファルト0.05m、盛土0.65～0.75m以上
105	H29.3523	左京三条四坊六坪	大宮町三丁目163番3	(合)RAビルリース	共同住宅新築	宅地	H30.10.9	GL-3.7mまで掘削 盛土0.4m、黒灰色シルト0.15m、灰色粘砂、黄灰色砂質土0.8m、黒濁色粘砂0.3m、以下淡黄褐色粘砂(地山)
106	H29.3552	右京七条四坊八坪	六条三丁目1182番4(1号地)	アイディホーム(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.10.9	GL-0.6mまで掘削 盛土0.6m以上
107	H29.3553	左京七条四坊八坪	六条三丁目1182番4(2号地)	アイディホーム(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.10.9	GL-0.3mまで掘削 盛土0.3m以上
108	H30.3239	一条北辺橋路	秋篠早月町239-1・239-7	関西電力(株)	電柱・支線新築	宅地	H30.10.10	GL-2.4mまで掘削 盛土0.2m、黒濁色土(表土)0.1m、暗黄褐色粘質土0.6m、以下黄褐色粘土(地山)
109	H30.3243	古市道跡	古市町1233-1	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.11	GL-0.45mまで掘削 盛土0.45m以上
110	H30.3267	一条東間南小路	法華寺町1363番9	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.11	GL-0.3mまで掘削 盛土0.3m以上
111							H30.10.11	
112	H30.3062	新築寺師道境内	高畑町	奈良教育大学	教育資料館の耐震補強工事	学校用地	H30.10.29 H30.10.31	GL-0.5～0.8mまで掘削 黒濁色土0.5～0.8m以上
114	H30.3256	南記寺道跡	白毫寺町	奈良教育大学	防災教育のための穴の掘削	畑地	H30.10.13	GL-0.6m 黒濁色土0.1～0.15m、暗灰色土0.45～0.5m以上
115	H30.1110	史跡大安寺旧境内	東九条町1867番地ほか	奈良市長	フェンス・盛土の除去	公有地	H30.10.20	GL-0.3m 盛土0.3m以上
116	H30.3230	西大寺旧境内	西大寺産王町一丁目1607番8	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.22	GL-0.4m掘削 黒灰色土(表土)0.1m、黄灰色砂質土0.3m以上
117	H30.3232	左京六条三坊十六坪	大安寺三丁目114-4の一部	(株)オージェイ	共同住宅新築	宅地	H30.10.23	GL-0.5m 盛土0.5m以上
118	H30.3125	元興寺旧境内、奈良町道跡	鶴福院町5番1、6番1	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.30	GL-0.5m 黒濁色土(表土)0.5m以上
119	H30.3270	左京一条四坊六坪	法蓮町541番1、541番2、543番2、543番1の一部	(有)シャトレ井田	賃貸住宅新築	宅地	H30.11.1	GL-0.3～0.7m 盛土0.3～0.7m以上
120	H30.3135	左京四条五坊十六坪	三条町553、554-3、469-4	個人	集会所新築	宅地	H30.11.6	GL-0.3～0.5m 黒濁色土(表土)0.3～0.5m以上
121	H30.3209	左京九条四坊十四坪	東九条町163-1・163-4	関西電力(株)	電柱新設	道路	H30.11.8	№1:GL-1.2m 盛土0.5m、黒灰色土(耕作用)0.3m、灰色砂質土0.4m以上 №2:盛土1.2m以上、
122	H30.3204	左京四条四坊十五坪	三条木町1098の一部	ケイエル・リース&エステート(株)	ホテル新築	宅地	H30.11.13	GL-2.1m 暗灰色土(表土)0.25m、コアス0.25m、盛土1.3m、黒灰色土(耕作用)0.15m、黄灰色土(床土)0.15m、灰色粗砂(地山)1.55m以上
123	H30.3203	成務院陪塚い号・ろ号隣接地	山腰町407～309	大阪ガス(株)	ガス管埋設	道路	H30.11.15	GL-0.65m アスファルト0.05m、砕石0.15m、淡濁色土0.3～0.45m以上
124	H30.3297	東二坊大路	西九条町四丁目4-4、2-11	関西電力(株)	電柱新設	宅地	H30.11.16	GL-1.45m 黒濁色土(表土)0.05m、盛土1.2m、黒灰色土(耕作用)0.2m
125	H30.3330	左京五条六坊十坪	西本辻町283番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.19	GL-0.7～0.9m、黒濁色土(表土)0.7～0.9m
126	H30.3306	右京一条二坊三坪	二条町二丁目3-29～2-16	大阪ガス(株)	ガス管埋設	道路	H30.11.20	GL-0.75～1.2m アスファルト0.05m、盛土0.6m、黒灰色土(耕作用)0.2m、灰色土0.35m
127	H30.3329	右京三条三坊十三坪	宝来二丁目18-5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.22	GL-0.1m 盛土0.1m以上
128	H30.3334	東四坊大路	大安寺町五丁目941番5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.21	GL-0.45m 黒濁色土(表土)0.45m以上
129	H30.3262	左京四条六坊十六坪、奈良町道跡	橋本町23番地1、24番地3	個人	店舗新築	宅地	H30.11.26	GL-0.4m 黒濁色土(表土)0.4m以上

受理番号	道跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査		
						日付	結果	
130	H30.3211	左京二条三坊八坪	法華寺町 351-10	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H30.11.26	GI-0.87 m アスファルト 0.07 m、盛土 0.7 m、黒灰色土(耕作土) 0.1 m以上
131	H30.3083	左京五条四坊八坪	大森町(仮番号 5-3)	関西電力(株)	電柱新設	宅地	H30.11.28	GI-1.0 m 盛土 1.0 m以上
132	H30.3333	左京二条三坊八坪	西木辻町 139-10～139-17	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H30.11.29	GI-0.95 m 盛土 0.25 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、褐色土 0.3 m、灰色土 0.2 m以上
133	H30.3114	左京一条四坊三坪	法蓮町 475-3、474-2	奈良市長	道路改良工事	道路	H30.11.29	GI-1.8 m アスファルト 0.05m、暗灰色土 0.3 m、黄褐色土 0.9 m、黒灰色土(耕作土) 0.1 m、灰白色粗砂(地山) 0.45 m
134	H30.3201	平城京南方遺跡	北之庄町 370-1、368-2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.30	GI-0.2 m 黒褐色土(表土) 0.2 m以上
135	H30.3349	左京六条三坊十坪	大安寺三丁目 80 番 1	個人、(株) ローソン	店舗新築	宅地	H30.12.3	GI-0.4～0.6 m 盛土 0.1～0.6 m以上
136	H30.3345	六条菜園路	大安寺三丁目 80 番 1	(株) ローソン	サインボールの設置	宅地	H30.12.3	GI-1.2 m 盛土 0.9 m、黒灰色土(耕作土) 0.3 m以上
137	H30.3282	右京二条二坊十四坪	西大寺町見町二丁目 296 番 55	個人	賃貸住宅新築	宅地	H30.12.3	GI-0.9 m 盛土 0.5 m、暗褐色土(表土) 0.15 m、灰色土 0.1 m、灰褐色土 0.15 m以上
138	H30.3340	西陸寺跡	西大寺町 221-3 の一部	(株) 興商	事務所新築	宅地	H30.12.5	GI-0.4～0.8 m 盛土 0.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.3 m以上
139	H30.3319	六条大路	六条三丁目 1078 番	個人	個人住宅新築	宅地	H30.12.6	GI-0.2～0.3 m 盛土 0.2～0.3 m以上
140	H30.3358	左京九条二坊十坪	西九条町 2-1、3-1	ソフトバンク(株)	携帯電話基地局設置	駐車場	H30.12.6	GI-0.85 m 盛土 0.85 m以上
141	H30.3247	右京四条二坊七坪	尾辻中町 372 番地 10	個人	個人住宅新築	宅地	H30.12.12	GI-1.8 m 盛土 0.85 m以上、黒灰色土(耕作土) 0.3 m、灰色土 0.3 m以上
142	H30.3387	左京二条四坊十四坪	疋田町一丁目 339-2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.12.14	GI-0.2 m 黒褐色土(表土) 0.2 m、以下明黄灰色粘質土(地山)
143	H30.3227	左京二条四坊四・五坪	菅原町 367 番地	奈良市長	(仮称) 伏見こども園園舎増築及び外工事	幼稚園敷地	H30.12.14	GI-0.6～0.9 m 盛土 0.6～0.9 m、以下明黄灰色粘質土(地山)
144	H30.3350	左京三条五坊四坪	大宮町一丁目 52 番 15 他 7 筆	南海電気鉄道(株)	店舗新築	宅地	H30.12.14	GI-1.3 m 盛土 1.3 m以上
145	H30.3283	南紀寺遺跡	南紀寺町 3-288-5(1号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.12.17	GI-0.4 m 盛土 0.4 m以上
146	H30.3284	南紀寺遺跡	南紀寺町 3-288-5(2号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.12.17	GI-0.3 m 盛土 0.3 m以上
147	H30.3254	遺物散布地	北永井町 91・北永井町 131	関西電力(株)	電柱新設	宅地・水田	H30.12.18	GI-2.6～2.7 m №.1 黒灰色土(耕作土) 0.3 m、淡褐色土 0.7 m以上 №.2 淡褐色土 1.0 m以上
148	H30.3290	菅原寺跡	菅原町 494-1・494-1 地先	関西電力(株)	本柱建替・支線撤去	宅地	H30.12.18	GI-1.0 m 盛土 0.4 m、黒灰色土(耕作土) 0.3 m、灰色粘砂 0.3 m以上
149	H30.3335	南紀寺遺跡	白毫寺町 748 番 1	個人	個人住宅	宅地	H30.12.19	GI-0.1～0.25 m 盛土 0.1～0.25 m以上
150	H30.3303	東五坊大路	北市町 36 番 1(1号地)	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.12.25	GI-0.2～0.3 m 黒褐色土(表土) 0.2～0.25 m以上
151	H30.3304	東五坊大路	北市町 36 番 18(2号地)	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.12.25	GI-0.2～0.3 m 黒褐色土(表土) 0.2～0.25 m以上
152	H30.3305	東五坊大路	北市町 36 番 1(3号地)	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.12.25	GI-0.2～0.3 m 黒褐色土(表土) 0.2～0.25 m以上
153	H30.3214	多聞城跡	法蓮町 1514 番 59	(株) 住活	分譲住宅新築	宅地	H30.12.27	GI-0.3～0.4 m 盛土) 0.3～0.4 m以上
154	H30.3248	左京二条五坊三坪	芝辻町三丁目 77 番 7、87 番 9	大郡実業興業(株)	事務所新築	宅地	H31.1.8	GI-1.4 m 盛土 0.4 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、暗灰色粘質土 0.6 m、暗灰色砂(河川堆積層) 0.2 m以上
155							H31.1.11	A区:GI-0.8 m b アスファルト 0.2 m、砕石 0.4 m、盛土 0.2 m以上
156	H30.3225	東二坊大路	西九条町四丁目 2-1	大和ハウス工業(株)	道路拡幅	道路	H31.2.8	B区:GI-1.1 m アスファルト 0.2 m、砕石 0.3 m、盛土 0.2 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、灰色土 0.2 m以上
157							H31.2.21	C区:GI-1.25 m 盛土 1.05 m、黒灰色土(耕作土) 0.2 m以上
158	H30.3441	右京三条四坊九坪	菅原町 610 番 17	秋田工務店(株)	分譲住宅新築	宅地	H31.1.16	GI-0.2 m 黒灰色土(表土) 0.2 m以上

	受理番号	道標名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
159	H30.1145	右京三条二坊十五坪	横領町 65-11-1	奈良市長	看板設置	公園	H31.1.17	GL-0.4～0.5m 暗褐色土(盛土) 0.4～0.5m、以下淡褐色砂質土(船輪砕片包含)
160	H30.3182	左京二条六坊十三坪	宿院町 9-1-10-2番地、北魚屋西町 29-1番地	関西電力(株)	電柱・支線建替	宅地	H31.1.17	GL-0.8m アスファルト0.05m、盛土0.15m、暗褐色土0.6m以上
161	H30.3457	平城宮北方遺跡、松林苑跡	歌郷町・佐紀町地内	公営企業管理者	水道既設管の入替工事	道路	H31.1.18	№1: GL-1.6m アスファルト0.1m、盛土0.4m、黄褐色砂質土(地山) 1.1m以上
H31.1.22							№2: GL-1.45m アスファルト0.15m、盛土1.3m以上 黄褐色砂質土(地山) 1.1m以上	
H31.1.24							№3: GL-1.3m アスファルト0.1m、盛土0.5m以上 黄褐色粘質土(地山) 0.7m以上	
H31.1.28							№4: GL-1.0m アスファルト0.1m、盛土0.6m 黄褐色砂質土(地山) 0.3m以上	
165	H30.3312	左京二条三坊八坪	法華寺町 351-10	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	H31.1.21	GL-0.9m 盛土0.8m、黒灰色土(耕作土) 0.1m以上
166	H30.3193	右京三条四坊十三・十四坪	宝来一部1丁目684-1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H31.1.21	GL-0.35m 暗褐色土(表土) 0.2m、淡灰色砂質土0.15m以上
167	H30.3372	右京五条四坊一坪	平松三丁目3-5	(株) 飯田産業	分譲住宅新築	宅地	H31.1.22	GL-1.3m 黒褐色土(表土)0.2～0.4m、以下黄灰色粘土(地山)
168	H29.3486	左京九条三坊三・四・五・六坪	西九条四丁目1番地の11他1筆	大和ハウス工業(株)	工場新築	工場用地	H31.1.23	№1: GL-3.3m 盛土1.25m、黒灰色土(耕作土) 0.4m、灰色砂0.6m、暗灰色粘土1.05m以上
H31.1.30							№2: GL-2.79m 盛土0.85m、黒灰色土(耕作土) 0.2m、灰褐色土0.63m、暗灰色粘土0.3m、暗灰色粘土0.8m以上	
H31.2.5							№3: GL-0.36m 盛土1.5m、黒灰色土(耕作土) 0.2m、灰色土0.3m、灰色砂0.3m、暗灰色粘土1.3m以上	
171	H30.3252	遺物散布地	古市町 384-1番地・961番地	関西電力(株)	電柱新設	宅地	H31.1.24	GL-0.8m 盛土0.45m、褐色土0.1m、灰色粗砂0.25m
172	H30.3354	左京一条四坊八坪	法蓮町 589番19	(株) ビルド	分譲住宅新築	宅地	H31.1.30	GL-0.4m 黒灰色土(耕作土) 0.2m、黄灰色砂質土(地山) 0.2m以上
173	H30.3347	左京四条三坊十坪	三条栄町 187番1、189番1	個人	駐車場造成	水田	H31.1.30	GL-1.2m 黒灰色土(耕作土) 0.7m、黄灰色粘土(地山) 0.5m以上
174	H30.3417	左京三条六坊九坪	内侍原町 8-1	三井生命保険(株)	事務所新築	宅地	H31.2.1	GL-2.0m 盛土1.8m、黄褐色砂礫(地山) 0.2m以上
175	H30.3384	右京二条二坊十二坪	西大寺園見町二丁目296番35	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.1	GL-0.9m 盛土0.9m以上
176	H30.3309	右京六条四坊五坪	六条三丁目1170番62	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.4	GL-0.4m 盛土0.4m以上
177	H30.3246	新業師寺境内	高畑町 181-4番地	大阪ガス(株)	ガス管理設	宅地	H31.2.5	GL-0.8m 黒褐色土0.8m以上
178	H30.3308	古市遺跡	古市町 1512番の一部(1号地)	(株) アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H31.2.7	GL-0.3～0.4m 黒褐色土(表土) 0.3～0.4m以上
179	H30.3409	古市遺跡	古市町 1512番の一部(2号地)	(株) アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H31.2.8	GL-0.3～0.4m 黒褐色土(表土) 0.3～0.4m以上
180	H30.3410	古市遺跡	古市町 1512番の一部(3号地)	(株) アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H31.2.8	GL-0.3～0.4m 黒褐色土(表土) 0.3～0.4m以上
181	H30.3273	左京九条四坊十坪	東九条町 262番1	(株) 興和不動産住宅	背資費材置場造成	宅地	H31.2.8	GL-0.5m 黒灰色土(耕作土) 0.2m、灰色土0.1m、淡黄灰色土0.1m、灰褐色土0.1m以上
182	H30.3378	奈良町遺跡	紀寺町 841-63、841-65番地	関西電力(株)	電柱新設	宅地	H31.2.15	GL-0.7m、盛土0.7m以上
183	H30.3308	西大寺旧境内	西大寺園町 2354番1-1	(同) 玉造企画	店舗付共同住宅新築	宅地	H31.2.15	GL-2.3m 盛土2m、茶褐色土0.3m以上
184	H30.3414	左京二条七坊二・七坪	西笹野町 42-3	(国) 奈良教育大学	コンクリートブロック塀基礎撤去、フェンス新設	宅地	H31.2.18	GL-0.85m 黒褐色土0.85m以上
185	H30.3492	西三坊間西小路	菅原町 248-3	個人	共同住宅新築	宅地	H31.2.18	GL-0.95m 盛土0.35m、黒褐色土0.25m、灰色土0.15m、黄灰色粘土(地山) 0.2m以上

受理番号	道跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
						日付	結果
186	H30.3353 二条大路	鵜谷町34-2、35、36、37-1	個人、(株)シュガーアソシエイツ	旅館新築	宅地	H31.2.19	GL-0.38 m 黒褐色土0.38 m以上
187	H30.3407 右京六条三坊十五坪	六条町一丁目880番14	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.21	GL-0.4 ~ 0.5 m 盛土0.4 ~ 0.5 m以上
188	H30.3225 東二坊大路	西九条町四丁目2-1	大和ハウス(株)	道路拡幅	道路	H31.2.21	GL-0.8 ~ 1.25 m A区:アスファルト0.2 m、砕石:0.4 m、盛土0.2 m以上 B区:アスファルト0.2 m、砕石0.3 m、盛土0.2 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、灰色土0.2 m以上 C区:盛土1.05 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m以上
189	H30.3119 奈良町道跡	高畑町181-4	関西電力(株)	電柱新設	宅地	H31.2.22	A地点・B地点:盛土0.7 ~ 0.8 m以上
190	H30.3279 右京四条三坊十六坪	宝来二丁目21-37	大阪ガス(株)	ガス管理設	宅地	H31.2.25	GL-0.95 m アスファルト0.1 m、砕石0.8 m、黄灰色粘土(地山)0.05 m以上
191	H30.3357 右京四条二坊七坪	尼辻中町401番1の一部、401番2	個人	共同住宅新築	宅地	H31.2.25	現況地盤直上で地山確認
192	H30.3423 菅原寺跡	菅原町500番1、501番1	(株)セブンーイレブン・ジャパン	店舗新築	宅地	H31.2.26	GL-0.5 m 黒灰色土(耕作土)0.4 m、青灰色粘砂0.1 m
193	H30.3416 二条条間路	北魚屋町11	奈良教育大学	コンクリートブロック解基撤去、フェンス新設	宅地	H31.2.26	GL-0.85 黒褐色土0.85 m以上
194	H30.3480 右京七条三坊五坪	七条一丁目467番2	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.27	GL-0.2 m 盛土0.2 m以上
195	H30.3360 左京八条一坊七坪	法蓮町382番1の一部、383番の一部	関西電力(株)	本柱・支線新設、小柱撤去	宅地	H31.2.27	GL-1.3 m 盛土1.3 m以上
196	H30.3467 左京五条六坊二坪 左京六条三坊十四坪 多聞城跡 左京五条一坊八坪	西木辻町5-2 済美小学校	奈良市長	学校用地	H31.3.1	GL-0.5 m 盛土0.5 m以上	
197		大安寺二丁目15-1 大安寺小学校			H31.3.7	GL-0.6 m 盛土0.6 m以上	
198		古市町268 東市小学校			H31.3.18	GL-0.4 ~ 0.6 m 盛土0.4 m、黄褐色粘土(地山)0.2 m以上	
199		法蓮町1416-1 若草中学校			H31.3.19	GL-1.2 m 黒褐色土(表土)0.4 m、黄灰色砂質土(地山)0.8 m以上	
200		柏木町13 都路中学校			H31.3.23	GL-1.2 m 盛土0.8 m、暗灰色土(耕作土)0.3 m、灰色土0.1 m以上	
201	H30.3396 右京五条二坊十三坪	五条町541-1	関西電力(株)	本柱・支線新設	宅地	H31.3.5	GL-1.2 m 黒灰色土(耕作土)0.2 m、明黄灰色砂1.0 m以上
202	H30.3429 左京二条四坊二坪	法蓮町382番1の一部、383番の一部、484番1	(有)ウエムラ	事務所新築	宅地	H31.3.6	GL-1.1 m 盛土1.0 m、黒灰色土(耕作土)0.1 m以上
203	H30.3453 右京七条四坊十一坪	七条西町一丁目627番32	(株)飯田産業	分譲住宅新築	宅地	H31.3.6	GL-0.55 m 盛土0.15 m、黒褐色土0.3 m、黄灰色粘土(地山)0.1 m以上
204	H30.3412 奈良町道跡	高畑町1252-1番地、高畑町1252-3	奈良教育大学	コンクリートブロック解基撤去、フェンス新設	寄宿舍	H31.3.8	GL-1.8 m 黒灰色土(耕作土)0.2 m、明青灰色砂1.0 m以上
205	H30.3455 右京四条二坊十坪	尼辻中町409-3-1	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.8	GL-0.5 m 盛土0.25 m、黒褐色土0.15 m、黄灰色砂質土(地山)0.1 m以上
206	H30.3415 一条北大路	法蓮町2058-2	奈良教育大学	コンクリートブロック解基撤去、フェンス新設	学校用地	H31.3.13	GL-0.4 ~ 0.5 m 淡褐色土(盛土)0.4 ~ 0.5 m以上
207	H30.3506 左京六条四坊一坪	大安寺四丁目1036-2の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.14	GL-0.6 m 黒褐色土(表土)0.35 m、淡褐色土0.1 m、暗灰色土0.15 m以上
208	H30.1157 史跡東大寺旧境内、名勝奈良公園	雑司町406番地1、登大路町他	奈良市長	観光案内板の撤去と新設、観光名所解説板の新設	H31.3.14	空海寺:GL-0.4 m、盛土0.4 m	
209					H31.3.14	みとい池:掘削 GL-0.4 m、暗灰色土(丸平瓦砕片包含)0.4 m	
210					H31.3.20	戒壇院:掘削 GL-0.5 m、黒褐色土(表土)0.15 m、淡黄褐色土0.3 m、淡黄褐色砂礫(地山)0.05 m以上	
211					H31.3.20	知足院:未掘削の為土層未確認	
212					H31.3.22	転吉門:GL-0.5 ~ 0.6 m 黒褐色土0.5 ~ 0.6 m	
213	H30.1197 史跡東大寺旧境内	雑司町	奈良市長	空調設備の設置(キュービクル・フェンス・引込柱等の設置)	学校用地	H31.3.19	GL-0.3 ~ 0.6 m 黒褐色土(表土)0.3 ~ 0.6 m以上

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
214	H30.3536	左京二条五坊十三坪	芝辻町 878-2、879-2	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.20	GL-0.5 m 黒褐色土(表土) 0.5 m以上
215	H30.3413	新薬師寺旧境内	高畑町	奈良教育大学	コンクリートブロック撤去、フェンス新設	学校用地	H31.3.22	GL-0.5 ~ 0.7 m 黒褐色土0.5 ~ 0.7 m以上
216	H30.3443	右京四条三坊十三坪	平松町一丁目 101 番 1	個人	共同住宅新築	水田	H31.3.25	GL-1.0 m 盛土0.35 m、黒灰色土(耕作土) 0.25 m、灰色土 0.25 m、灰色砂(河川堆積土) 0.15 m
217	H30.3496	左京三条六坊四坪	今辻子町 4 番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.25	GL-0.4 ~ 0.5 m 黒褐色土0.4 ~ 0.5 m
218	H30.3472	右京四条四坊十一坪	平松五丁目683番9、684番1	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.25	GL-0.15 m 盛土 0.15 m
219	H30.3517	左京二条七坊三・四坪	芝辻町 24 番 1	奈良市長	観光名所解説看板設置	道路	H31.3.25	GL-0.2 m コンクリート 0.12 m、盛土 0.08 m
220		左京二条七坊三・四坪	半田横町 30 番、北魚屋西町地内				H31.3.26	GL-0.5 m アスファルト 0.1 m、盛土 0.4 m以上
221	H30.3437	右京五条三坊十坪	平松二丁目 7-23	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.27	GL-0.45 m 表土 0.2 m、黄白色粘土 0.25 m

なお、表中、遺跡名のうち、平城京跡については名称を省略し、○京○条○坊○坪等で示した。

第2章 平成30(2018年)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進

平成 30 (2018) 年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1. 展 示

A 常設展示

- 対 象：一般
会 期：平成 30 年 4 月 2 日(月)～7 月 20 日(金)
平成 30 年 10 月 4 日(木)～12 月 28 日(月)
平成 31 年 1 月 4 日(金)～3 月 29 日(金)
(194 日間)
場 所：埋蔵文化財調査センター展示室
趣 旨：埋蔵文化財の展示を通じて奈良市の歴史を
紹介する。
内 容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化
財を遺跡ごとに展示。

B 夏季特別展「奈良市の埴輪―土師氏の故郷でのハニ ワ生産―」の開催

- 対 象：一般
会 期：平成 30 年 8 月 1 日(水)～9 月 28 日(金)
(42 日間)
場 所：埋蔵文化財調査センター展示室・同室前ロ
ビー
趣 旨：埴輪の作り方とその変化に着目した埴輪生
産をテーマに、奈良市内で出土した埴輪を
紹介する。

観覧者数：1005 名

- その 他：・案内を「しみんだより」8 月号と奈良市
役所のホームページに掲載。
・宣伝用のチラシの作成・配布。
・展示パンフレットの作成。
・事前に報道機関向けに資料を配布し、内
覧会を実施。



夏季特別展「奈良市の埴輪」

C 巡回ミニ展示「奈良を掘る」の開催

- 対 象：一般
趣 旨：奈良新聞に平成 26 年 7 月から平成 28 年 1
月に連載した「奈良を掘る」の記事のひとつ
を取り上げ、出土遺物を加えて、夏季と冬
季の 2 回に分けて、3 施設で巡回展示する。

① 夏季展示「第 5 回 陶棺に納められた副葬品」

- 会期・：平成 30 年 6 月 1 日(金)～6 月 29 日(金)
場所 (21 日間)・埋蔵文化財調査センター展示
室前ロビー
平成 30 年 7 月 4 日(水)～7 月 31 日(火)
(23 日間)・奈良大学博物館
平成 30 年 8 月 3 日(金)～8 月 31 日(金)
(21 日間)・奈良市役所ロビー展示ケース

- 内 容：「奈良を掘る」第 2 話「横穴墓と陶棺」を
取り上げ、赤田横穴墓群・赤田 1 号墳の陶
棺から出土した副葬品を展示し、土師氏の
墓制と葬送儀礼の関係について紹介。
・案内を「しみんだより」6 月号と奈良市
役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

② 冬季展示「第 6 回 播磨の国から来た瓦」

- 会期・：平成 31 年 1 月 8 日(火)～2 月 8 日(金)
場所 (23 日間)・埋蔵文化財調査センター展示
室前ロビー
平成 31 年 2 月 14 日(木)～2 月 28 日(木)



巡回ミニ展示 奈良を掘る (第 6 回)

表1 月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
209	184	270	303	636	369	144	404	104	232	173	241

- (11日間)・奈良市役所ロビー展示ケース
平成31年3月5日(火)～4月25日(木)
(44日間)・奈良大学博物館
- 内 容:「奈良を掘る」第8話「播磨国の調塚」を取り上げ、平城京左京五条四坊八・九坪で出土した播磨産の瓦類を展示し、瓦が出土したその背景として、この地に播磨国調塚が存在した可能性を遺物・パネルで展示・紹介。
- そ の 他:・案内を「しみんだより」1月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。
- D 春季発掘調査速報展「平城京跡(左京六条三坊十二坪・東堀河)、史跡大安寺旧境内(塔院・六条大路)、平城京跡(左京三条六坊十坪)・奈良町遺跡
- 会 期:平成31年3月1日(水)～3月30日(金)

- (22日間)
- 場 所:埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
- 趣 旨:発掘調査等の最新成果について、展示・紹介する。
- 内 容:平成30年度に大安寺二丁目で実施した平城京跡と東堀河、平成28～30年度に東九条町で発掘体験と調査を実施した六条大路と大安寺塔院北門、平成30年度に西御門町で実施した平城京跡と奈良町遺跡の成果を遺物・パネルで展示・紹介。
- 観覧者数:241名
- そ の 他:・案内を「しみんだより」2月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。
- E 年間観覧者数
3269名(236日間)。月平均272名。

2. 施設見学を受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

(1) 対 象:

河合町観光ボランティアガイドの会 65名

期 日:平成30年11月11日(日)

3. 講演会・教室の開催

A 埋蔵文化財講演会

対 象:一般

期 日:平成30年8月25日(土)13:30～16:25

内 容:夏季特別展の理解をより一層深めるため、特別展開催中に市民から聴講者を募集し、専門的な講演会を外から講師を招いて開催した。

参加者数:80名

会 場:埋蔵文化財調査センター講座室

- ・廣瀬 覚 (奈良文化財研究所)
- 「土師氏の故郷での埴輪生産」
- ・村瀬 陸 (埋蔵文化財調査センター)
- 「奈良市の埴輪」

対 象:一般

- そ の 他:・募集案内を「しみんだより」8月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・夏季特別展チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせ。



埋蔵文化財講演会

B 埋蔵文化財発掘調査報告会

- 対 象：一般
期 日：平成 31 年 3 月 10 日 (日) 13:30 ~ 16:30
内 容：春季速報展の理解をより一層深める為、速報展開催中に市民から聴講者を募集し、速報展展示遺跡の調査成果報告を調査担当職員がパワーポイントや資料を使用し報告。
・「平城京跡(左京六条三坊十二坪・東堀河)」
・「史跡大安寺旧境内(塔院・六条大路)」
・「平城京跡(左京三条六坊十坪)・奈良町遺跡」
会 場：埋蔵文化財調査センター講座室
参加者数：44 名
そ の 他：募集案内を「しみんだより」2 月号と奈良市役所のホームページに掲載



埋蔵文化財発掘調査報告会

- ・春季速報展チラシに掲載。
- ・報道機関に募集要項をお知らせ。

C 夏休み親子考古学体験

- 対 象：小学 4 年生以上の児童とその保護者
期 日：平成 30 年 8 月 4 日 (土)
内 容：夏休みを利用して児童とその保護者を対象に夏季特別展と関連させ、「ハニワをつくろう!」と題し、埴輪の製作法を学んだ後、粘土からミニサイズの円筒埴輪を製作した。
会 場：埋蔵文化財調査センター洗浄室
参加者数：36 名
そ の 他：募集案内を「しみんだより」8 月号と市役所ホームページに掲載。案内チラシの配布・掲示



夏休み親子考古学体験

4. 市民考古学講座

- 対 象：一般
期 日：平成 30 年 7 月 4 日 (水) ~ 平成 31 年 3 月 6 日 (水)
毎月 1 ~ 2 回、全 13 回 (表 2)
内 容：埋蔵文化財調査センター職員、市民考古学サポーターが講師を務める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。
受講者数：25 名
そ の 他：案内を「しみんだより」6 月号と奈良市役所のホームページに掲載。

表 2

	日 時	講 座 名
第 1 回	7 月 4 日	開講式・オリエンテーション 考古学って何?・旧石器・縄文時代の基礎知識
第 2 回	7 月 18 日	弥生時代の基礎知識
第 3 回	8 月 8 日	古墳時代の基礎知識
第 4 回	9 月 5 日	発掘調査の流れ
第 5 回	9 月 19 日	発掘調査体験 (実習)
第 6 回	10 月 3 日	奈良の都 平城京
第 7 回	10 月 24 日	平城宮跡をみる (実習)
第 8 回	11 月 7 日	古代の土器
第 9 回	11 月 28 日	古代の瓦
第 10 回	12 月 5 日	舞台裏 (内業作業) をみる (実習)
第 11 回	1 月 9 日	拓本のとり方 (実習)
第 12 回	2 月 13 日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第 13 回	3 月 6 日	土器類の分類整理 (実習)・閉講式

5. 市民考古サポーターの活動支援

A 市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対象：平成29年度の受講修了者

登録人員：16名（登録総人数106名）

活動開始：平成30年7月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。

月平均活動のべ人数：182名

6. 体験学習・実習の受け入れ

A 市立一条高校体験学習

対象：一条高校人文科学科1年生 40名

期日：平成30年11月13日(火)

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

B 中学校職場体験学習

対象：登美ヶ丘中学校2年生 男子1名

期日：平成30年11月14日(水)～16日(金)

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

C 中学校校外研修

対象：開成中学校2年生 44名

期日：平成30年6月7日(木)

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：展示解説及び出土遺物を用いた体験実習

D 体験学習事業

① 発掘調査体験学習(史跡大安寺旧境内)

対象：一般

期日：平成30年9月13日(木)～15日(土)・18日(火)・20日(木)～22日(土)・25日(火)～29日(土)・10月1日(月)～12日(金)の24日間

事前説明会実施日：平成30年8月28日(火)・29日(水)

場所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場

内容：事前説明会にて発掘調査方法や安全の為の講習を受講後に、体験を実施。調査を始める前には必ず検出遺構の説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・検出遺構の説明を行った。また、体験期間中は調査現場を常時公開し、見学者に調査についての説明を行った。

その他：・募集案内を「しみんだより」8月号と奈良市役所のホームページに掲載
・宣伝用チラシに掲載
・報道機関に募集要項をお知らせ

参加者数：のべ363名

② 発掘調査体験学習(富雄丸山古墳)

対象：一般

期日：平成30年12月16日(木)～18日(火)・20日(木)～24日(木)、平成31年1月7日(月)・8日(火)・10日(木)～15日(火)の16日間

事前説明会実施日：平成30年11月22日(木)・26日(月)

場所：富雄丸山古墳発掘調査現場

内容：事前説明会にて発掘調査方法や安全の為の講習を



中学校職場体験学習



発掘調査体験学習(史跡大安寺旧境内)

受講後に、体験を実施。調査を始める前には必ず現況説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・遺構の説明を行った。

その他：・募集案内を「しみんだより」11月号と奈良市役所のホームページに掲載
・宣伝用チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせ

参加者数：のべ315名

③ 大安寺遺跡探訪ツアー

対象：一般

期 日：平成30年9月13(水)・14(木)・18(月)・

20(木)・21(金)・25(月)～28日(金)、
11月1(月)～4日(金)の13日間

内 容：発掘現場と整備された大安寺の遺構、大安寺古墳群の見学コースを設定し、大安寺とその周辺遺跡を案内。

コ ー ス：史跡大安寺旧境内塔院—大安寺発掘現場—南大門—経楼—僧房—杉山古墳—墓山古墳—野神古墳

その他：・募集案内を「しみんだより」9月号と奈良市役所のホームページに掲載
・宣伝用チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせ。

参加者数：のべ105名

7. 文化財学習キットの貸出し

市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦等の実物資料の貸し出しキットで解説書付き。小・中学校の社会科学学習・郷土学習の補助教材に利用でき、埋蔵文化財調査センターを見学する小・中学生にも「触れることのできる文化財」としても使用する。

対 象：奈良市内の小・中学校

内 容：①～⑥の6キット

- ①縄文土器と弥生土器
- ②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
- ③古墳時代の埴輪と須恵器
- ④奈良時代の土器（A・B2セットあり）
- ⑤奈良時代の瓦—軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

貸出・利用

(1) 興東小学校社会科の歴史学習

期日等：平成30年4月16日～23日

キット：①・②・⑥

(2) 西大寺北小学校卒業制作における資料

期日等：平成30年7月6日～13日

キット：①・⑤

(3) 春日中学校社会科の歴史学習

期日等：平成30年7月6日～13日

キット：①・②

8. 職員の派遣（講師など）

A 田原本町教育委員会「歴史文化教室」講義

期 日：平成30年6月8日(金)

場 所：田原本町青垣生涯学習センター視聴覚室

派遣人数：1名

内 容：南アジアの巨石文化について

B 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主催「大和を掘る」土曜講座

期 日：平成30年7月21日(土)・9月1日(土)

場 所：奈良県立橿原考古学研究所 講堂

派遣人数：2名

内 容：東九条町の弥生時代遺跡と銅箸

平城京左京二条四坊十坪の調査

C 市立一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期 日：平成30年11月13日(火)・16日(金)

場 所：一条高校

派遣人数：1名

内 容：遺物の整理・発掘調査

D 橿原市教育委員会「橿原市まほろば大学クラブ」講義

期 日：平成30年12月20日(木)

場 所：橿原市まほろば大学校

派遣人数：1名

内 容：奈良を掘る

9. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製造物の化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を行った。

(保存処理資料) 平城京跡出土鉄斧7点・紋具1点・鉄鏃1点・不明鉄製品2点、奈良町遺跡出土日貫5点

10. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

- A 遺物などの貸出 9件(表3)
 B 写真などの貸出・提供・掲載許可 30件(表4)
 C 学術研究等に関わる資料閲覧 8件(表5)

表3

貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1 東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 30.4.1 ~ H 31.3.31	平城京跡出土木簡(模造品)10点(鏝進上木簡1点、月借銭進上木簡1点、豹皮分銭付札1点、洗皮御田侍奴画指木簡1点、北宮封緘木簡1点、龍府進取付札1点、祿布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒可符1点、瓦進上木簡1点)、分銅(模造品)1点(平城京跡第167次調査出土)
2 国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所	平城宮跡展示館(仮称)に展示	H 30.4.1 ~ H 31.3.31	元興寺旧境内第7次調査出土軒丸瓦1点、軒平瓦1点
3 大阪府立近つ飛鳥博物館	夏季企画展に展示	H 30.6.26 ~ H 30.9.21	南紀寺遺跡第2次調査出土土師器3点・須恵器1点・筒状土製品2点、南紀寺遺跡第4次調査出土土師器7点・筒状土製品6点
4 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る36」で展示	H 30.6.26 ~ H 30.9.14	平城京跡第709次調査出土赤生土器14点・磨製石斧1点・石包丁2点・副箸1点、平城京跡第713次調査出土門筋埴輪4点、平城京跡第708次調査出土奈良三彩小壺1点・帯金具2点・銭3点・海老鏡1点・鳥形鏡1点・墨書土器2点・須恵器4点・土師器14点
5 古代オリエント博物館および岡山市立オリエント美術館	特別展「シルクロード新世紀—ヒトが動き、モノが動く—」に展示	H 30.7.2 ~ H 30.12.28	西大寺旧境内第25次調査出土イスラム陶器1点、平城京跡第484次調査(左京八条二坊五坪)出土ココヤシの実1点
6 橿原市教育委員会	歴史に遡る橿原市博物館の平成30年度夏季企画展「シアワセのカタチ from Asuka・fujiwara・Heijou」に展示	H 30.7.3 ~ H 29.9.26	平城京跡出土糞子1点・唐三彩三足罎1点・唐三彩輪花杯1点・唐三彩杯2点・胎衣壺蓋1点・胎衣壺身1点・人形封入壺1点・人形(人形封入壺内)1点・人形(人形封入壺内、釘あり)1点・須恵器壺1点・二彩小型火舎1点・唐白磁門面鏡1点、平城京東市跡推定地出土須恵器 墨書土器「罎」1点・墨書土器「罎」1点・奈良三彩枕1点、史跡大安寺旧境内出土独坐1点・唐三彩枕4点、西大寺旧境内出土甕引き木簡4点
7 公益財団法人元興寺文化財研究所	平成30年度秋季特別展「大元興寺展」に展示	H 30.8.1 ~ H 30.11.30	元興寺旧境内第7次調査出土飛鳥寺I型式軒丸瓦1点・軒丸瓦6201 A a 1点・軒丸瓦6201 A B 1点・軒平瓦6661 D 2点・平安以降軒平瓦2点、元興寺旧境内第38次調査出土製墨土器1点・和泉型瓦器輪3点、元興寺旧境内第48次調査出土葦釜金1点、元興寺旧境内第62次調査出土ポンバイ8点
8 葛城市歴史博物館	第19回特別展「古代葛城の武人—葛城市兵家古墳群と大和の甲冑—」に展示	H 30.9.7 ~ H 30.12.7	市指定文化財ベンシヨ塚古墳出土三角板緋織短甲(展示台付)1点・小札新留眉庇付冑1点・馬具鞍金具前輪(展示台付)1点・槍先1点・柳葉式鉄鎌4点・長頸鎌4点・鋳2点・鉄拵1点・ミニチュア鉄鎌1点・砥石1点・石製勾玉7点・有孔陶盤4点・石製小玉20点・ガラス小玉20点・管玉3点
9 山梨県立博物館	平成30年度秋季企画展「文字が語る古代甲斐国」に展示	H 30.9.25 ~ H 30.12.25	西大寺旧境内第25次調査出土042号木簡1点、平城京左京二条四坊十一坪出土甲斐型埴5点

表 4

	申請日	申請機関(申請者)	目的	内容	その他
1	H 30.4.10	関西大学職員	漢城百濟博物館編『百済王城 風納土城の現在と未来』に掲載	奈良市内出土土製磁器写真1枚	貸出・掲載許可
2	H 30.4.25	奈良教育大学職員	入学希望者を対象とした入試過去問題に掲載	平城京跡第 622-D 次調査出土奈良三彩小壺写真1枚	貸出・掲載許可
3	H 30.4.27	フリーライター	東京新聞及び中日新聞水曜日夕刊コラム『かわいいう古代』に掲載	赤田9号墓出土陶棺・円筒棺写真1枚	貸出・掲載許可
4	H 30.5.11	橿原市教育委員会	歴史に遡る橿原市博物館の平成 30 年度夏季企画展『シアワセのカタチ from Asuka・Fujiwara・Heijō』における展示及びポスター・チラシ・パンフレットに掲載	「平城京各地出土唐三彩」写真1枚、「平城京各地出土独楽・寶子・碁石」写真1枚、「左京五条四坊十坪出土地鎮道標」写真1枚、「右京二条三坊出土人形とその封入壺」写真1枚、「平城京東市跡推定地出土墨書土器「鯛」」写真1枚、「史跡大安寺旧境内出土唐三彩陶枕」写真1枚	貸出・掲載許可
5	H 30.6.1	大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館平成 30 年度夏季企画展の図録・展示パネル、ならびにポスター・チラシ・ホームページ等の広報資料に掲載	「南紀寺遺跡第 4 次調査井泉 SX01」写真1枚、「南紀寺遺跡第 4 次調査 所産 SD07・SD06」写真1枚	貸出・掲載許可
6	H 30.6.7	古代オリエント博物館・岡山市立オリエント美術館	特別展『シルクロード新世紀ーヒトが動き、モノが動くー』でパネル展示ならびに展示図録、広報物に掲載	「西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器」写真1枚、「平城京跡第 484 次調査(左京八条二坊五坪)出土 ココヤシの実」写真1枚	貸出・掲載許可
7	H 30.6.22	(公財) 古都飛鳥保存財団高松塚壁画館	平成 30 年度秋季企画展『古代寺院出土の壁画』展でパネル展示	「史跡大安寺旧境内第 133 次調査出土壁画片」写真7枚	貸出・掲載許可
8	H 30.7.5	山梨県立博物館	平成 30 年度秋期企画展『文字が語る 古代甲斐国』の展示図録、展示会ホームページ、展示解説パネル、ワークシートに掲載	「西大寺旧境内第 25 次調査出土 042 号木簡」写真5枚、「平城京左京二条四坊十一坪出土 甲斐型杯」写真1枚	貸出・掲載許可
9	H 30.7.10	公益財団法人元興寺文化財研究所	平成 30 年度秋季特別展『大元興寺展』でパネル展示、図録・パンフレット等に掲載	「元興寺旧境内第 48 次調査埋藏道標」写真1枚、「元興寺旧境内第 51 次古墳ー奈良時代の遺構」写真1枚、「元興寺旧境内第 48 次出土経函金」写真1枚	貸出・掲載許可
10	H 30.8.2	公益財団法人元興寺文化財研究所	平成 30 年度秋季特別展『大元興寺展』図録に掲載	元興寺旧境内第 7 次調査出土軒丸瓦 3 点・軒平瓦 4 点写真、元興寺旧境内第 48 次調査出土経函金 1 点写真、元興寺旧境内第 38 次調査出土製土器 1 点・和泉型瓦器 3 点椀写真、元興寺旧境内第 62 次調査出土ゴンバイ 8 点写真	掲載許可
11	H 30.8.7	葛城市歴史博物館	第 19 回特別展『古代葛城の武人』でパネル展示、図録・ポスター・チラシ・ホームページに掲載	市指定文化財ベンシヨ塚古墳出土三角板奉紐短甲と小札銀留肩庇付冑写真1枚・小札銀留肩庇付冑写真1枚・馬具靱金具前輪写真1枚・馬具靱金具後輪写真1枚	貸出・掲載許可
12	H 30.8.9	株式会社世界思想社 教学社	教学社編 2019 年版～2020 年版『大入試シリーズ 奈良教育大学』に掲載	平城京跡第 622-D 次調査出土奈良三彩小壺写真1枚	掲載許可

	申請日	申請機関(申請者)	目的	内容	その他
13	H 30.8.31	朝日新聞出版書籍編集部	今尾文昭「天皇陵を歩く」に掲載	「念仏寺山古墳竪穴写真」写真1枚	貸出・掲載許可
14	H 30.9.7	(株) ロングテイル	テレビ番組で画像を放映	「大安寺西塔出土風鐸」写真1枚	貸出・掲載許可
15	H 30.9.7	個人	大安寺の遺跡紹介パネルを作成し、参拝者に大安寺の遺跡・歴史を紹介	「大安寺西塔基壇全景」、「大安寺西塔出土鬼瓦」、「大安寺杉山古墳出土家形埴輪」、「大安寺西塔出土風鐸」、「大安寺東塔基壇」、「大安寺僧房」、「大安寺杉山古墳と瓦葺」、「整備後の杉山古墳」、「南大門北階段」、「平城京・大安寺出土奈良三彩陶器」写真、「大安寺第110次西塔遺構平面図」図各1枚	貸出・掲載許可
16	H 30.10.24	個人	『工業普通先生傘寿記念論文集』に掲載	「西大寺旧境内第25次調査出土「東口(朝方)ノ皇浦」銘墨書土器」写真1枚	貸出・掲載許可
17	H 30.10.26	出雲市長	出雲弥生の森博物館2018ギャラリー展IVでパネル展示およびパンフレット等に掲載	「平城京跡出土土壘形分銅」、「平城京跡出土土壘形分銅」、「平城京跡出土釣鐘形分銅」、「分銅形」土製品」の写真各1枚	貸出・掲載許可
18	H 30.10.31	国立歴史民俗資料館	雑誌「延喜式研究」終刊に伴うネット公開	「平城京跡出土土師器「杯」」銘墨書土器、「平城京跡出土須恵器壺「三合一夕」」銘墨書土器」の図	貸出・掲載許可
19	H 30.11.15	戎光祥出版(株)	金松誠「筒井順慶」に掲載	「多聞城跡出土軒丸瓦・軒平瓦」写真	貸出・掲載許可
20	H 30.11.29	(株) 雄山閣	(株) 雄山閣発行『奈良のミュージアム(仮題)』に掲載	「奈良市埋蔵文化財調査センターの外観」、「展示室」、「鍾ともものさし」、「赤田横穴墓陶棺(7号墓)」の写真	貸出・掲載許可
21	H 30.12.11	特定非営利活動法人奈良21世紀フォーラム	冊子「奈良の風土産業の継承—企業人列伝」に掲載	「奈良町遺跡出土製墨土器」写真	掲載許可
22	H 31.1.22	(株) 奈良新聞社	奈良新聞「歴史万華鏡」面に掲載	「播磨産軒瓦の組み合わせ」、「播磨産鬼瓦」、「平城京左京五条四坊八・九坪出土瓦葺」、「播磨産とみられる丸瓦・平瓦・梨斗瓦」写真各1枚	貸出・掲載許可
23	H 31.1.30	地域情報ネットワーク株式会社	『月刊大和路ならら3月号』に掲載	「富雄丸山古墳墳頂部で出土した遺物」、「富雄丸山古墳造り出し斜面と門筒埴輪」、「富雄丸山古墳墳丘裾」写真各1枚	貸出・掲載許可
24	H 31.1.30	地域情報ネットワーク株式会社	『月刊大和路ならら3月号』に掲載	「播磨産軒瓦の組み合わせ」、「播磨産鬼瓦」写真各1枚	貸出・掲載許可
25	H 31.2.4	個人	『月刊考古学ジャーナル』2019年6月号に掲載	『多聞城発掘調査概要報告』17頁図9の「懸瓦組み合わせ模式図」1枚	掲載許可
26	H 31.2.27	多聞城ファン倶楽部	案内冊子『幻の城 多聞城』に掲載	「多聞城跡出土軒瓦の組み合わせ」写真1枚	掲載許可
27	H 31.3.1	関西大学文学部考古学研究室	『天皇の寺 大官大寺』副読本に掲載	「大安寺創建軒瓦の組み合わせ」、「大安寺西塔出土大型風鐸」写真各1枚	貸出・掲載許可
28	H 31.3.5	公益財団法人元興寺文化財研究所	『研究報告(公益財団法人元興寺文化財研究所発行)』に掲載	「元興寺旧境内第7次調査出土軒瓦」写真1点	掲載許可
29	H 31.3.6	奈良県立橿原考古学研究所	『シルクロード東西文化交流研究事業報告書』に掲載	「西大寺旧境内第25次調査出土墨書土器「皇甫東朝」」写真1枚	掲載許可
30	H 31.3.12	(株) 奈良新聞社	奈良新聞に掲載	「平城京跡第723次調査 東瀬河とSX 01」写真1枚	貸出・掲載許可

表 5

	申請日	申請者	目的	内容	その他
1	H 30.4.24	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	長谷遺跡出土土器一式、菅原東遺跡出土土器 1 点、古市板谷遺跡出土土器 1 点の観察・写真撮影	貸出・掲載許可
2	H 30.5.18	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	長谷遺跡出土土器一式の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
3	H 30.6.25	元高崎市教育委員会職員	個人研究	水間遺跡 1 号墳出土小鉄刀 1 点、水間遺跡 2 号墳出土鉄斧・鉄鋸・鉄錘・鉄錐・鉄刀子・不明鉄器各 1 点・鉄織 4 点、水間遺跡第 39 発掘区流路内出土滑石製品・骨製品一式の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
4	H 30.10.3・5	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	東市跡推定地第 4 次調査東堀河下層出土須恵器甕破片 3 箱分、同中・上層出土須恵器甕破片 1 箱分、同層位不明須恵器大甕、平城京跡第 134 次調査東堀河出土須恵器甕破片 2 箱分の観察・実測・拓本・写真撮影	貸出・掲載許可
5	H 30.10.24・29・31	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	東市跡推定地第 4 次調査東堀河下層出土須恵器甕破片 3 箱分、同中・上層出土須恵器甕破片 1 箱分、同層位不明須恵器大甕、平城京跡第 134 次調査東堀河出土須恵器甕破片 2 箱分の観察・実測・拓本・写真撮影、東市跡推定地第 12 次調査出土甕の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
6	H 30.1.21	香芝市教育委員会職員	個人研究	平城京跡第 274 次調査出土軒平瓦 6717 B の観察・写真撮影	貸出・掲載許可
7	H 30.2.6	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	長谷遺跡出土土器一式の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
8	H 30.2.8	上牧町教育委員会職員	個人研究	石ガマチ 2 号墳出土埴輪の観察・実測	貸出・掲載許可

第3章 資料報告

1. 平城京出土の刺突痕がある土製品／原田憲二郎
2. 菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器／村瀬 陸

平城京出土の刺突痕がある土製品

原田憲二郎

I. はじめに

本稿で主題として取り上げる土製品は、全体形がわかるものは出土していないが、端面があることから、瓦のような形状とみられ、その凸面に特徴的な刺突痕を残す平城京出土の用途不明品である。

これまで用途不明土製品等として、奈良文化財研究所により、10点あまりの報告例がある¹⁾が、今回の資料調査により、奈良市教育委員会保管品にも同様の資料が21点あることを確認した²⁾。

そこで本稿では大半が未報告であった、これら奈良市教育委員会保管の土製品を紹介し、刺突痕から分類を行い、その用途について考えてみたい。

II. 平城京出土の刺突痕がある土製品の分類

奈良市教育委員会保管品21点は図1・2に図示し、このうち、主なものは写真1に掲げた。

ここではこれら21点の紹介をかねて分類を示す。

まず、形状から以下の2つに分類することができる。

丸：粘土円筒を半截して製作した丸瓦状のもの。

平：凸面が平坦な平瓦状のもの。

ただし、平瓦状のもの1点(21)を除く他20点は全て丸瓦状のものとみられる。また厚さは0.8cm程度のもの(3)から約4cmのもの(17)と差がある。

凹面に残る成形痕等、製作技法の特徴からは、以下の2つに分類できる。

I：凹面はヨコナデ調整するが、粘土紐を積み上げ成形した際の接合線を消すためであろう、その箇所には強めのナデを加える。このため素材は粘土紐と判断できる。灰色を呈し、胎土が精良な須恵質。

II：凹面に布目痕が残る。I類にみられる粘土紐積み上げ成形技法と判断できる痕跡はなく、明瞭な糸切痕は確認できないが、素材は粘土板とみられる。表面黒色、内部淡褐色を呈し、胎土が粗い瓦質。

内訳はI類が14点(1～14)、II類は7点(15～21)である。

凸面の刺突痕は、大きく以下の2つに大別できる。

A：刺突具を斜め方向から突き刺した後、上に持ち上げ、あるいは左右に広げて、ひだを付けるもの。

B：刺突具を垂直方向に突き刺したものの。ひだは付かない。

内訳はA類が19点(1～13・15～19・21)、B類が2点(14・20)である。

大半が単純な刺突法といえるB類ではなく、一手間かけたA類であることがわかり、ひだがこの土製品の用途を解明する手掛かりの可能性が考えられる。

さらに、刺突痕から想定される刺突具の形状から、刺突痕は以下の6種類に分類できる

a：断面形円形の丸箸のような、先端が平坦な円棒状工具による刺突痕(写真2)。

b：aで示した刺突具の先端を縦割りし、先端が半円形を呈する工具による刺突痕。先端の半円形側を下向きに刺突したb1類(写真3)と、上向きに刺突したb2類(写真4)に細分できる。

c：内部が空洞の竹管状のものを縦割りした工具を用い、半円形側を下向きに刺突した刺突痕(写真5)。この刺突痕には、半円形の内側に小さな突起が確認でき、bと区別することができる。

d：彫刻刀で「切り出し刀」または「印刀」と呼称される、刃先が斜めになった工具による刺突痕(写真6)。

e：彫刻刀で「角ニードル」と呼称される、断面方形で、先端が尖った工具による刺突痕(写真7)。

f：彫刻刀では「平刀」と呼称される、柄と直角の形に刃がついた工具による刺突痕(写真9)。

なお、これらで用いられた刺突具は、ひだの状況などから、彫刻刀のような鋭い刃先の金属製ではなく、木もしくは竹製の鈍い刃先であったと判断できる。すなわち彫刻刀のような専門工具を使い得る彫刻師による施紋ではないと考えてよい³⁾。

以上の特徴からみた分類は全ての組合せが存在するのではなく、丸IAa類(1)、丸IAb1類(2～7)、丸IAb2類(8・9)、丸IAc類(11・12)、丸IAd類(13)、丸IBb類(14)、丸IIAb1類(15・16)、丸IIAc類(17)、丸IId類(18)、丸IIAc類(19)、丸IIBf類(20)、平IIAb1(21)の12種類にまとめることができる。

III. 平城京出土の刺突痕がある土製品の用途

ここでは、土製品の用途について示してみたいが、まず手掛りになる出土遺構について紹介する。

奈良市保管品については表1のとおりである。21例の

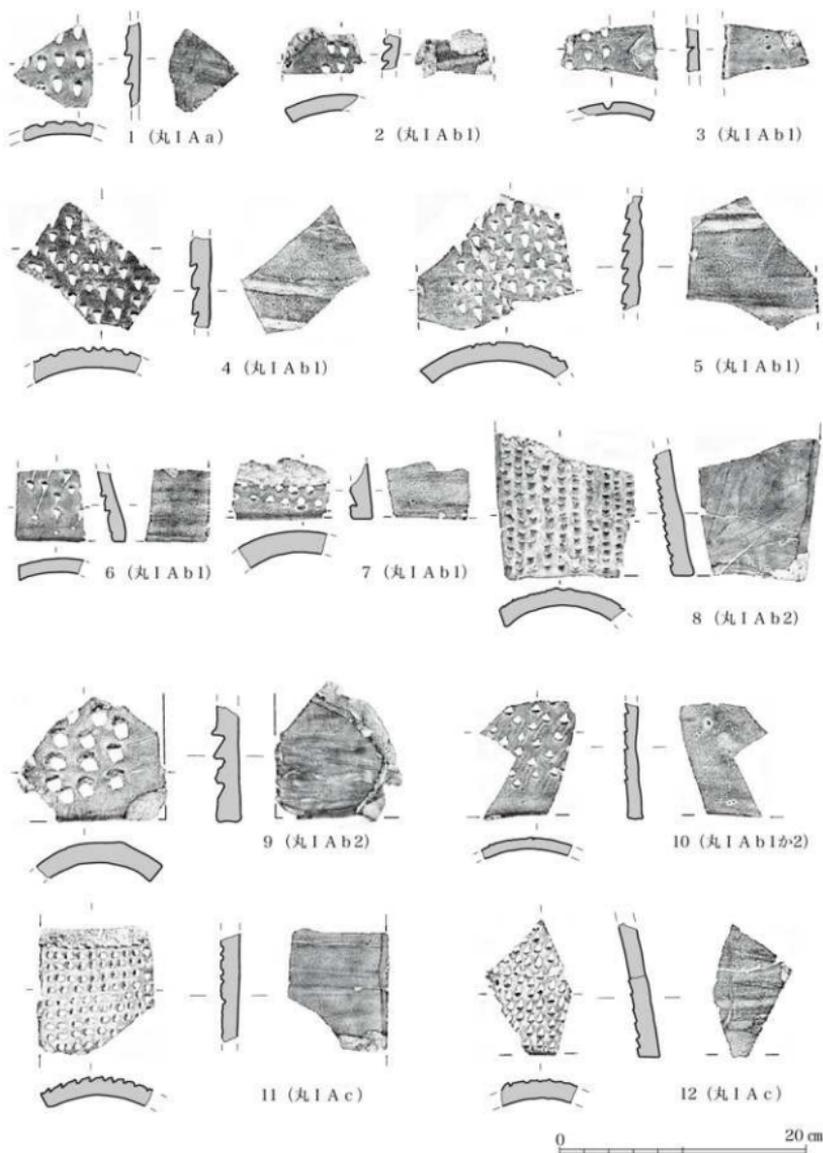


図1 刺突痕がある土製品 1 (1/4)

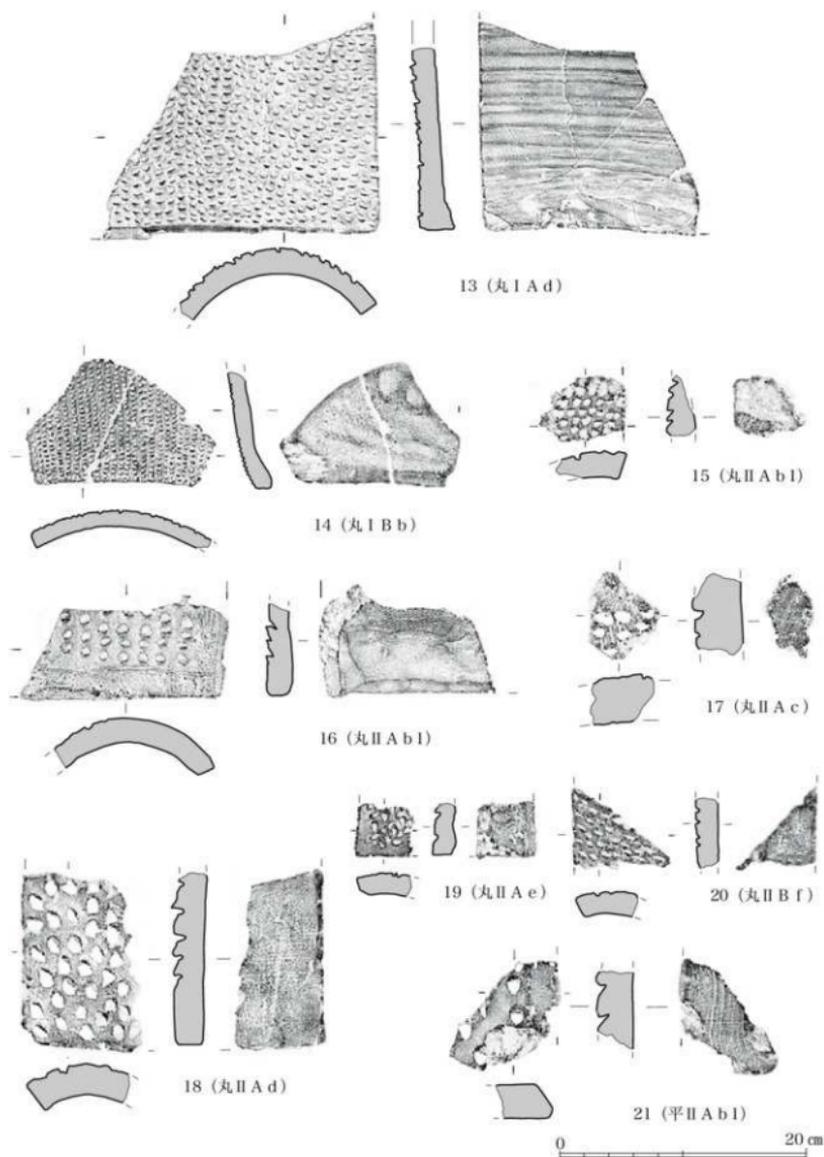


図2 刺突痕がある土製品2 (1/4)

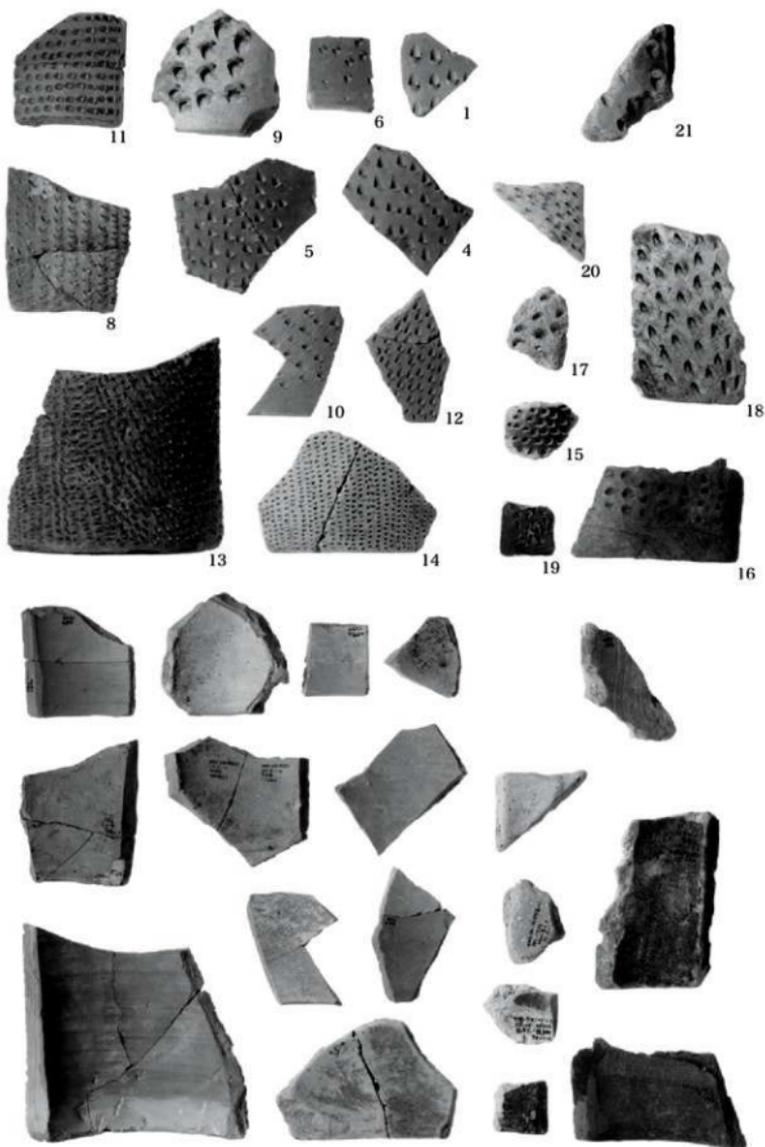


写真1 刺突痕がある土製品（上：外面、下：内面、番号は図1・2に対応）



写真2 刺突痕 Aa



写真3 刺突痕 Ab1



写真4 刺突痕 Ab2

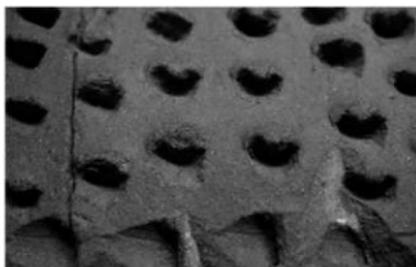


写真5 刺突痕 Ac

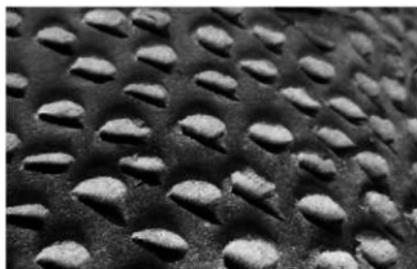


写真6 刺突痕 Ad



写真7 刺突痕 Ae



写真8 刺突痕 Bb

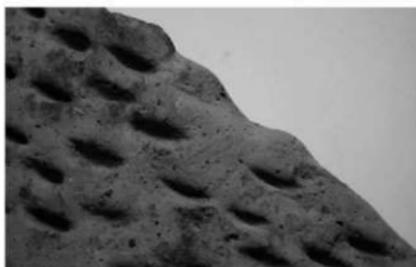


写真9 刺突痕 Bf

出土遺構をみると、宅地内が12例、条坊遺構が9例と大きく2つに大別できる。しかし宅地内出土の12例の内、8は二条条間北小路南側溝、11は東四坊大路西側溝、21は西二坊大路東側溝にそれぞれ3m程度と、条坊遺構に近接する位置で出土していることは注意を要する。

さらには、5・6・12は条坊遺構からの出土であるが、それぞれ、南に条間南小路、西に四坊坊間路、東に東四坊大路が近接した地点、すなわち条坊道路交差点に近い位置での出土であることがわかる。

以下、用途についての可能性を挙げ、その是非を検討する。

①調理具である「おろし金」とする見方

「おろしがねのようなもの？」と書かれたキャプションで展示されている事例がある⁴⁾。確かに、ひだの部分が発るA類ならば、固い大根は無理でも、比較的軟らかい山芋程度であればおろせそうではある。

しかしながら、「おろし金」とすると、丸瓦に似た形状

を呈する理由がわからない。また、側縁付近にまで刺突痕を施すA類(8・11・13・15・18)があるが、この部位でおろすことが難しいのは明らかである。さらには、ひだをもつA類でも刺突痕が大きく、その間隔が広いもの(9・18・21)があることも疑問である。

決定的なことは、ひだの無い刺突痕であるB類(14・20)ではおろすことはできないことである。

以上のことから、おろし金としての用途ではないと考える。

②土管とする見方

丸瓦状の形状に復元できるものが多いので、これを2つ用い、側面を合わせ、土管として使ったと考えることも可能である。この場合、凸面の刺突痕のひだは、潜り止めとしての機能をもち、急勾配の掘方に据える際に有効であったとも考えられる。

しかしながら、急勾配用の土管であれば、縦に分割しない円筒の形状の方が、都合が良かったであろう。また、ひだの無い刺突痕であるB類(14・20)や、平瓦状に復

表1 刺突痕がある土製品の出土地

番号	分類	出土地	調査回数
1	丸I Aa	左京五条二坊十四坪	市HJ第1次
2	丸I Ab1	右京二条三坊六坪	市HJ第292次
3	丸I Ab1	左京四条四坊十六坪	市HJ第377-2次
4	丸I Ab1	左京四条四坊十四坪	市HJ第353-1次
5	丸I Ab1	右京二条三坊坊間路(六・十一坪間、南に条間南小路が近接)	市HJ第443-3次
6	丸I Ab1	左京五条四坊条間北小路(九・十坪間、西に四坊坊間路が近接)	市HJ第459-2次
7	丸I Ab1	右京七条西一坊大路(一坊十四坪・二坊三坪間)	市HJ第491次
8	丸I Ab2	左京二条四坊七坪(二条条間北小路南側溝が近接)	市HJ第174次
9	丸I Ab2	右京七条一坊十四坪	市HJ第491次
10	丸I Ab1か2	右京二条三坊六坪	市HJ第286-2次
11	丸I Ac	左京五条四坊十六坪(東四坊大路西側溝が近接)	市HJ第486次
12	丸I Ac	左京五条四坊条間北小路(十五・十六坪間)北側溝(東に東四坊大路が近接)	市HJ第506・623-B次
13	丸I Ad	左京七条西一坊大路(一坊十五坪と二坊二坪間)東側溝	市HJ第97次
14	丸I Bb	左京六条二坊条間北小路(九・十坪間)北側溝	市HJ第45次
15	丸II Ab1	右京二条西二坊大路(二坊十四坪・三坊三坪間)西側溝	市HJ第378-7次
16	丸II Ab1	左京二条四坊七坪	市HJ第174次
17	丸II Ac	右京二条三坊坊間西小路(十一・十四坪間)東側溝	市HJ第443-1次
18	丸II Ad	右京二条三坊十一坪	市HJ第443-2次
19	丸II Ae	右京二条西二坊大路(二坊十四坪・三坊三坪間)西側溝	市HJ第378-7次
20	丸II Bf	左京五条四坊二坪	市HJ第735次
21	平II Ab1	右京二条二坊十五坪(西二坊大路東側溝が近接)	市HJ第460次

(凡例) 1. 「番号」は図1・2に対応する。

2. 網掛けは条坊遺構出土例。



写真10 芬皇寺出土品



写真11 金丈里瓦窯跡出土品

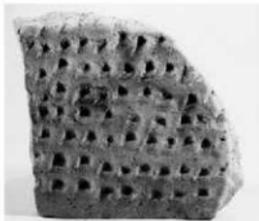


写真12 金丈里瓦窯跡出土品

元でできるもの(21)が存在する理由がわからない。このようなことから、土管でもないか考える。

③ 屋根の谷の部分に使う瓦とする見方

二つの勾配屋根の下部の先端が出会う所にできる溝の部分や谷と呼び、その谷筋に使う専用の瓦は「谷平瓦」と呼ばれる⁹⁾。急勾配の谷筋であれば、凸面の刺突痕のひだは滑り止めとしての機能が考えられる。

しかしながら、「谷平瓦」と呼ばれるように、平瓦状のものが使用されたことは知られるが、丸瓦状のものが使用された例は聞かない。

また、谷筋の長さにも因るところであろうが、ある程度の数の使用が想定されることに対し、主題とした土製品が一所所に集中して多数出土した事例も無い。

さらに、出土地点の問題もある。本章の冒頭に出土地点を紹介したが、このうち条坊遺構とその周辺での出土例が半数近くと、目立つことを示した。この出土場所の検討から、築地塀に葺かれた瓦の可能性が考えられる。しかしながら、築地塀に屋根の谷部分が生じるケースは考え難い。

また、おろし金説、土管説と同様に、ひだの無い刺突痕であるB類(14・20)が存在する理由も説明できず、屋根の谷の部分に使用する瓦ではないと考える。

④ 「飾り瓦⁹⁾」とする見方

尖ったひだの部分に滑り止め等の機能は無く、刺突痕は単なる紋様とみた場合は、屋根の一部を飾った「飾り瓦」とみることもできよう。

出土地点から築地塀に葺かれた可能性が高いことは上で述べた。一方出土点数が少ないことから、その使用場所は限定されるとみられ、築地塀の大棟の端や、その付近から斜め方向に軒先に向かって降る降棟、あるいは屋根の隅で斜め方向に降る隅棟の棟端を塞ぐ鬼瓦に近接して用いられたと考えられる。なお、条坊遺構出土品のうち3点(5・6・12)は条坊道路交差点付近での出土であり、鬼瓦の使用が想像しやすい場所である。

平瓦状のものは鬼瓦の頂面に伏せた「棟平瓦⁷⁾」で、

丸瓦状のものは「棟平瓦」の上に被さる軒丸瓦(「伏間瓦」)に接続する「棟丸瓦」(「伏間瓦」)の可能性が考えられる。この場合、刺突痕は顔面のみ表現した鬼瓦の獣の背の表現となろう。また丸瓦状のものは、隅棟の鬼瓦直下の「棟丸瓦」とみれば、前肢を表現したのかもしれない。組み合う鬼瓦については、刺突痕がある土製品が、今のところ京内寺院からの出土を聞かないため、平城宮式鬼瓦¹⁰⁾の可能性が高い。ただし平城宮式鬼瓦のうち1式は、顔面だけでなく全身像を表すため、組み合う可能性はないだろう。

以上、「飾り瓦」としての可能性を述べた。しかしながら、鬼瓦の周辺に刺突痕がある土製品を飾ったようなことを示す絵画や彫刻等の意匠をみつけているわけではない。また、平城宮式鬼瓦等、古代の鬼瓦の意匠については、特徴的な外縁に沿う大柄の巻毛の意匠等から、獅子あるいは獣神ともいべきものにあてる考えがある¹¹⁾。これに従うならば、刺突紋は獣毛を表現したものと理解されるが、刺突紋は獣毛というより、魚鱗に見え¹²⁾、飾り瓦とした場合でも、何をモチーフとしたものか、今後さらなる検討が必要と考える。

IV. おわりに

以上、本稿で取り上げた刺突痕がある土製品を紹介し、用途について考えてみた。用途については今後の平城京の発掘調査での出土に期待するところが多い。最後に同様の土製品は韓国でもみられることを紹介しておく。(写真10～12)。

写真10は芬皇寺の平瓦として紹介されるもの¹¹⁾で、本稿の分類の平A b 2類とみられる。

写真11・12は慶尚北道慶州市見谷面金丈里の統一新羅時代の金丈里瓦窯跡の平瓦として紹介されるもの¹²⁾。わずかながら、ひだが確認でき、刺突の角度は異なるが双方とも平A c 類とみられる。

本稿で取り上げた土製品が、朝鮮半島から運ばれたも

のとは考え難いが、その用途を考えるうえで、今後、国外の同様の出土品にも注意する必要がある¹³⁾。

謝辞

本稿で扱った土製品の所在確認については、三好美穂氏と永野智子氏のお手を煩わせた。また類例については中島正氏、岩戸晶子氏、重見泰氏からご教示を得た。文末ではありますが、記して感謝致します。

参考・引用文献(刊行順)

小杉一雄 1938 「鬼瓦考」東京考古学会『夢殿第18冊 総合古瓦研究』

奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告VI—平城京左京一条三坊の調査』

坪井利弘 1976 『日本の瓦屋根』理工学社

東夷文化研究院・東山文化社編 1976 『韓国建築史大系V 建築Ⅱ文様(上) 新羅の瓦』

山本忠尚 1979 「舌出し獸面考」奈良国立文化財研究所『研究論集V』

毛利光俊彦 1980 「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」奈良国立文化財研究所『研究論集VI』

奈良国立文化財研究所 1984 『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』

奈良市教育委員会 1984 「平城京左京六条二坊九・十坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』

奈良国立文化財研究所 1995 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—』

國立慶州博物館 2000 『新羅瓦埴』図録

岩戸晶子 2001 「奈良時代の鬼面文鬼瓦—瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷—」史学研究会『史林』84巻3号

井内課 2015 「播磨新出の蓮華紋棟端飾瓦」帝塚山大学考古学研究所『帝塚山大学考古学研究所研究報告』XVII

註

- 1) 奈良国立文化財研究所 1975の36頁、同1984の29頁、同1995の289頁で紹介される。また奈良国立文化財研究所1975と1995では、凸面に刺突痕では無く、格子風にヘラ描き線を施すものも紹介されている。本稿で紹介した奈良市保管品は刺突痕のものばかりであるが、同様の性格を持つものであろう。また奈良国立文化財研究所1975では、筆者の見方と同じく「特異な瓦」として報告される。
- 2) 平城京以外でも、大阪府富田林市の新堂慶寺では、同様の土製品が出土しているが未報告という(岩戸晶子氏のご教示による)。また、京都府木津川市の高麗寺でも同様の土製品が出土しているという(中島正氏のご教示による)。
- 3) なお、「丸刀」と呼称される彫刻刀を用いて刺突実験してみたが、刺突痕bのような半円形には表現できず、ひだもできなかった。
- 4) 平城宮跡資料館の展示品。出土場所の表示は無い。
- 5) 「谷平瓦」や以下文中「鳥伏間」、「伏間瓦」の用語は坪井1976に拠る。
- 6) 「飾り瓦」の用語について坪井1976では、主に棟に飾りとして取り付けられる鍾馗や鳩等の瓦製品と限定的に示されている。本稿では今少し広義の瓦製の装飾の意味で使用した。
- 7) 「棟平瓦」、「棟丸瓦」の用語は井内2015に拠った。
- 8) 平城宮式鬼瓦の名称・分類等は毛利光1980および岩戸2001。
- 9) 獅子起源説は山本1979、獸神起源説は小杉1938・毛利光1980。
- 10) 魚鱗を飾る造形には、龍が思い浮かぶが、我が国で屋根に龍の造形を載せたのは中世以降のようである。他にも魚鱗を飾る造形には、中国にマカラがある。この点については、今後さらに資料を集め、稿を改めて論じてみたい。
- 11) 國立慶州博物館2000の85頁写真274。なお、東夷文化研究院・東山文化社編1976の342頁1500の瓦も同じものとみられる。
- 12) 國立慶州博物館2000の215頁写真730・731。
- 13) この他にも、同様のものが慶州市内南面の花谷里遺跡から出土しているという(重見泰氏のご教示による)。

図版出典

写真10～12は國立慶州博物館2000より、一部修正を加え転載。その他は著者作成。

菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器

—古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究III—

村瀬 陸

1. はじめに

本稿では、奈良市教育委員会が発掘調査した菅原東遺跡のうち、竪穴建物・土坑群を検出した HJ 第 169・173・182・184 次調査出土土器について報告する。

HJ 第 169・173・182・184 次調査は、近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で、近接する 4 次調査が一括して概要報告された（奈良市教育委員会 1990）。平城京の条坊復元では右京三条三坊一坪にあたり、一連の調査により菅原東遺跡の存在が認識された。

菅原東遺跡には、主に古墳時代前～中期初頭と後期の遺構があり、中期初頭～後期の間は一度断絶するようである。古墳時代前～中期初頭では、HJ 第 169・173・182・184 次調査で検出された竪穴建物群とその周辺に広がる土坑群、HJ 第 257-3 次調査等で検出された首長居館と目される方形区画溝と井戸群（奈良市教育委員会 1994、村瀬 2016）が中心部として機能し、周辺では基幹水路に想定される斜行溝などが確認されている（奈良県立橿原考古学研究所 2011）。また、これらの東側にあたる HJ 第 229・443-7 次調査では、谷状の落ち込みから埴輪編年Ⅱ期の円筒・形象埴輪が一定数出土しており（村瀬 2018）、約 500m 南に位置する宝来山古墳との関係を想定できる。後期には、HJ 第 200 次調査で埴輪窯 6 基を検出しており（奈良市教育委員会 1992）、周辺調査でも包含層等から多くの V 群埴輪が出土していることから、拠点の埴輪生産地として機能したといえる。

このように、古墳造営や埴輪生産の実態に関わる重要遺跡であることはもちろん、『日本書紀』に登場する埴輪誕生説話や『続日本紀』にみる菅原土師氏との関連を検討することができる点においても、希少性の高い遺跡であると評価できる。

一方で、奈良市教育委員会が実施してきた調査成果は、重複する平城京跡に重点が置かれてきたこともあり、菅原東遺跡については一部の遺物報告を除いて遺構配置の提示等に留まらざるを得ない状況であった。そのため、遺構から出土する遺物の詳細が不明であり、より詳細な検討を進めることが困難であった。

そこで筆者は、菅原東遺跡の再評価を目的として、出土遺物の整理作業・調査を継続的に実施している（村瀬 2016・2018・2019）。ここで報告する土器類についても、この一環の整理に基づくものである。



図1 HJ 第 169・173・182・184 次位置図 (1/6,000)

II. HJ 第 169・173・182・184 次調査の概要

ここでは 4 次にわたる調査によって検出された古墳時代以前の遺構について概要を記す。遺構番号は概要報告書（奈良市教育委員会 1990）に従う。

弥生時代の遺構には、方形周溝墓 5 基（SX01～05）がある。いずれも周溝を検出し、概ね大和第三様式の弥生土器が少量出土している。

概報で示された古墳時代前期の遺構は、土坑 44 基（SK01～44）、井戸 5 基（SE01～05）、土器埋納遺構 9 基（SX06～14）、竪穴建物 10 棟（SB01～10）、溝 4 条（SD01～04）であり、後期の遺構は、溝 1 条（SD05）、掘立柱建物 1 棟（SB14）、土坑 3 基（SK45～47）である。ただし、溝や土坑の出土遺物は少量である場合が多く、後期の遺構に前期の遺物が混ざることが往々にしてあることから、一定数出土遺物のある遺構を中心に検討を進める必要がある。本稿では、時期判断の可能な遺構について、出土土器の報告を行う。

III. 出土遺構・土器の報告

ここでは、HJ 第 169・173・182・184 次調査のなかでも一定数の土器が出土した以下 7 つの遺構と出土土器について報告する。土器の詳細は観察表にまとめ、ここでは特徴を中心に記述する。

SB03（HJ173-SB03）北で西に振れる竪穴建物で 3.6×4.2m の方形を呈する。周囲には幅約 0.2m の周壁溝がめぐる。小型丸底壺（1～7）、小型丸底鉢（8）、有段口鉢（9）、小型器台（10）、器台（11・12）、高杯（13～17）、壺（18）、甕（19～22）が出土した。

小型丸底壺は、いずれも比較的球形の体部に短めの口



図2 HJ 第169・173・182・184次 古墳時代以前の遺構配置図 (1/200)

緑部が伴うものである。調整から大きく3区分でき、①外面ハケ調整のもの(1・2)、②外面ナデ調整、内面ケズリ調整のもの(3～5)、③内外面ナデ調整のもの(6・7)である。外面ナデ調整のものが目立ち、口縁部の接合後のナデ調整が粗いものが含まれる。

小型丸底鉢(8)は、ミガキ調整の精製品であるが、口縁部は縦方向のミガキであり、やや粗雑な印象をうけるものである。なお、9・10も精製品であり、小型丸底壺が粗製品であるのに対して鉢・小型器台(8～10)はやや古相の傾向を示すものである。

器台(11・12)は、小型器台とは異なるもので、胎

土も粗くナデ調整の粗製品である。11は端部に炭化した部分がみられ、灯明用に使用された可能性がある。

高杯は、口径に対して杯部が浅く、口縁端部はやや外反する。ナデ調整であり胎土も粗く、粗製品である。脚部はケズリ主体のもの(16)とナデ主体のもの(17)があるが、脚高や形状は類似しており、系統差として認識できる。

壺(18)は、大型の複合口縁部であり搬入品の可能性がある。

甕は、布留甕で肩部にヨコハケが残るもの(19)、口縁部の形状がやや独特なもの(20)などがある。また、

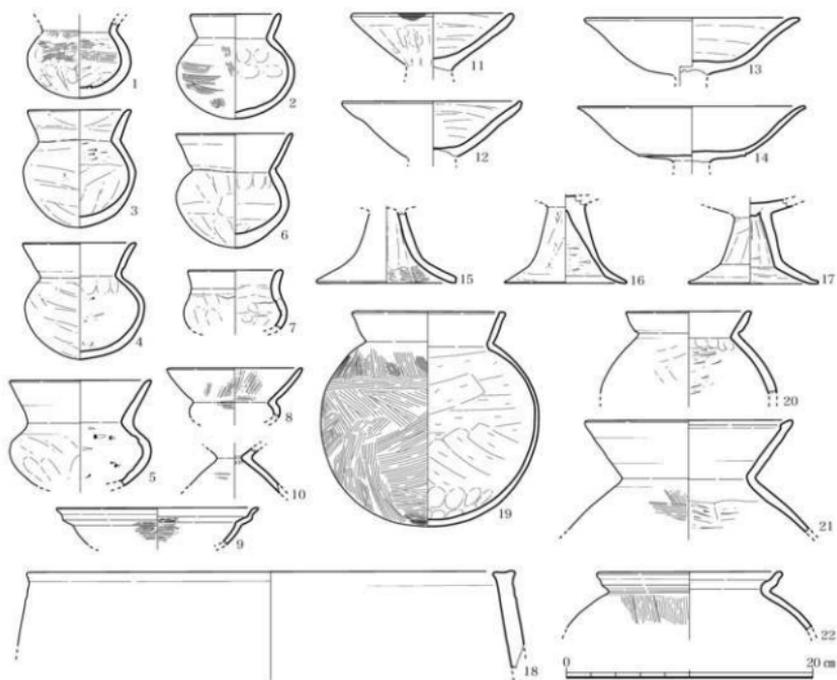


図3 SB03出土土器 (1/4)

S字甕 (22) は比較的器壁が厚いものである。

以上の特徴のなかでも、小型丸底壺や高杯等でナデ調整主体の粗製品が目立つこと、布留式前半段階には認められない器台 (11・12) があることなどは注目できる。SX06 (HJ173-SK71) SB01内にある小穴で直径約0.5m、深さ約0.2mである。

出土土器はX字状の小型器台 (1) のみである。器壁は非常に薄いもの、内外面ともにハケ調整でミガキ調整はみられない。胎土はさほど粗くないが、ミガキ調整のものより粗雑化したものとみられる。

SB04 (HJ173-SK25) 北で西に振れる竪穴建物で、約2m四方であり、周壁溝はないが内部が約0.1m落ち込む。当初は土坑として調査されたが、SB03等と方位を揃えることなどから竪穴建物として報告された。小型丸底鉢 (1~4)、有段口縁鉢 (5~8)、小型器台 (9~12)、高杯 (13・14)、壺 (15~24)、甕 (25~29) が出土した。

小型丸底鉢は、口縁部と体部の比率が同等のもの (1)

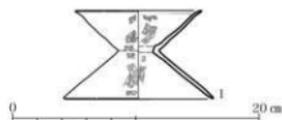


図4 SX06出土土器 (1/4)

と、口縁部が発達するもの (2~4) がある。いずれも調整が残るものはヨコミガキを密に施しているが、3の口縁部内面には、ヨコミガキ後に放射状暗文を施す。また、外面は底部をケズリ、体部もヨコミガキ下にケズリの痕跡が観察できる。

有段口縁鉢の法量は様々であるが、5・8はヨコミガキを施す精製品である一方、7は胎土が粗く粗製品と考えられる。

小型器台は、脚部の透孔が2・3方向のものがあるが、いずれもヨコミガキを密に施す精製品である。11・12はX字状の小型器台であり、外面はいずれもヨコミガキであるが、内面は11がハケ、12がミガキと異なる。

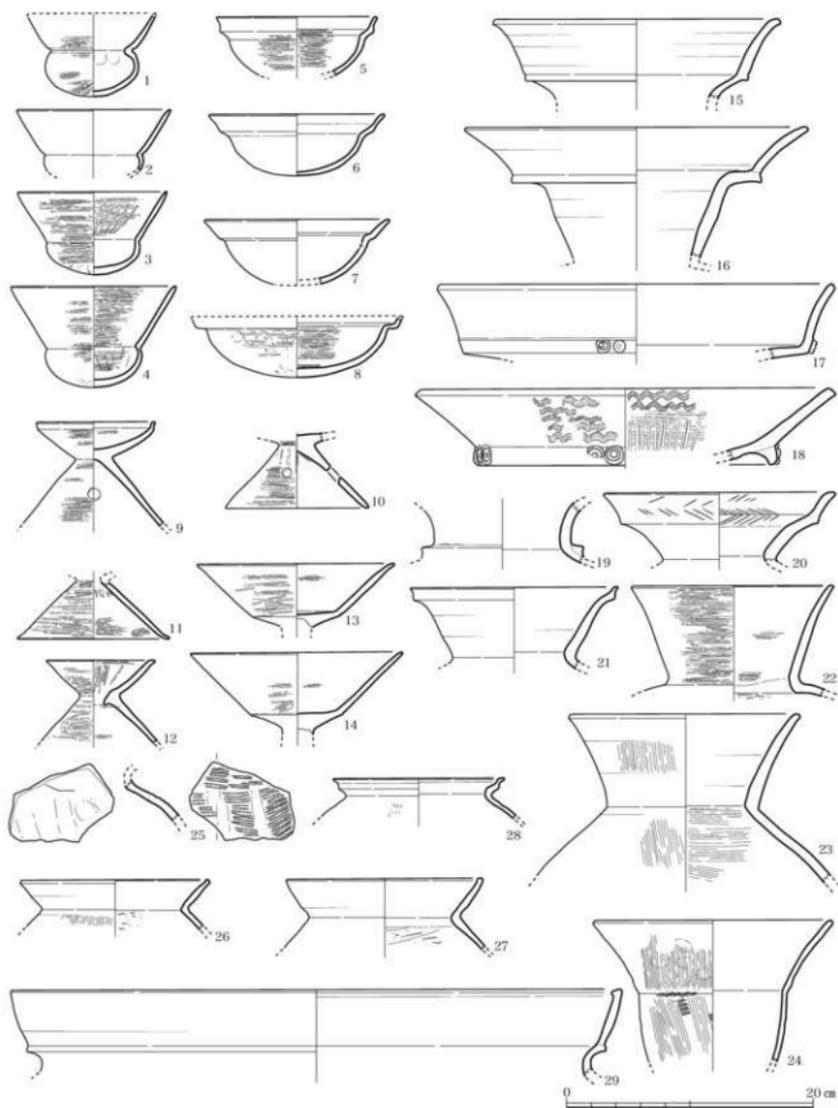


図5 SB04出土土器 (1/4)

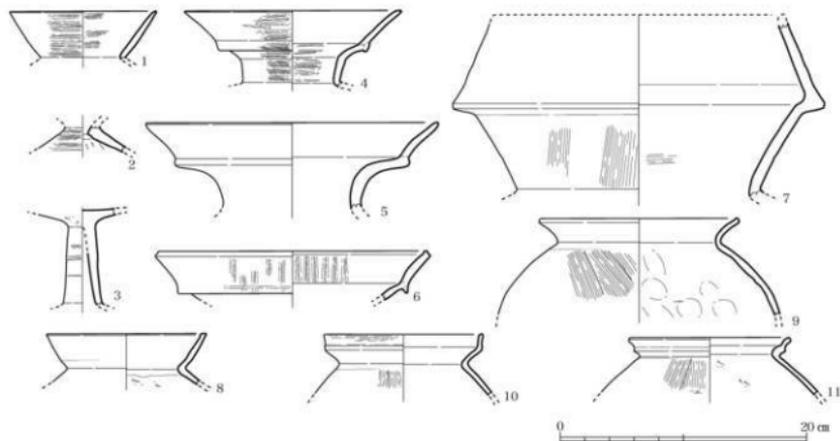


図6 SB07出土土器(1/4)

高杯は、杯部が深く受部との稜線が明瞭である。いずれも内外面ともにヨコミガキを施す。

二重口縁壺(15・16)は、いずれも二次口縁部の傾きは異なるが同等の高さであり、16はやや頸部が長く外側へひらく形状を呈する。加飾壺(17~19)はいずれも貼付竹管文を施すものであるが、17は屈曲部に段差を削り出して貼り付けているのに対して、18は口縁部を垂下させた部分に貼り付けている。18は内外面に波状文を施す。また、内面にはヨコミガキ後、放射状暗文を施す。19は頸部に突帯を施すことから加飾壺と考えられる。20は柳ヶ坪型壺で、線刻は摩擦するが綾杉文が観察できる。21は口縁部をやや立ち上げるもので、22は口縁部の内外面にヨコミガキを密に施す。24は特異な形状を呈し、外面もタタキ後ハケ調整である。

甕は、伝統的V様式系のもの(25)、26も口縁部が直線的にのび、端部がわずかに肥厚する庄内系の系譜上にある特徴をもつ。27は典型的な布留甕である。28はS字甕、29は山陰系の甕でいずれも外来系の特徴をもつ形態であるが、胎土は他の個体と大きく変わらない。

以上の特徴のなかでも、小型丸底鉢が口縁部の発達するものが主体であり、その製作技法が緻密であること、小型器台はX字状のものを含むが、ヨコミガキを比較的密に施すものであること、高杯は杯部と受部の稜が明瞭でヨコミガキを施すこと、加飾壺や精製の直口壺、タタキ甕を含むことなどは注目できる。

SB07(HJ182-SB03) 周壁溝はないが3.7×3.0mの

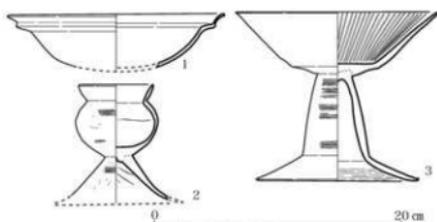


図7 SX09出土土器(1/4)

方形を呈する竪穴建物で北で西に振れる。小型丸底鉢(1)、小型器台(2)、高杯(3)、壺(4~7)、甕(8~11)が出土した。

1~4はヨコミガキ調整を施す精製品であり、3の高杯は脚柱部が細身である。4は頸部がやや細く短い精製二重口縁壺である。6も二重口縁壺と考えられるが、口縁部内外面ともに縦方向のミガキを施し、外面は一部ヨコミガキを施す。7は大型の複合口縁壺で、ハケ調整を基調とする外来系土器である。

甕は口縁部が短く端部が肥厚し、体部が球形に発達するもの(9)や布留甕(8)を含み、吉備系(10)やS字甕(11)といった外来系土器を含む。

以上の特徴のなかでも、X字状小型器台を含みつつ、精製品が各器種に含まれること、外来系土器が甕・壺にみられることが注目できる。

SX09(HJ182-SK44) SB08内に位置する小穴で、

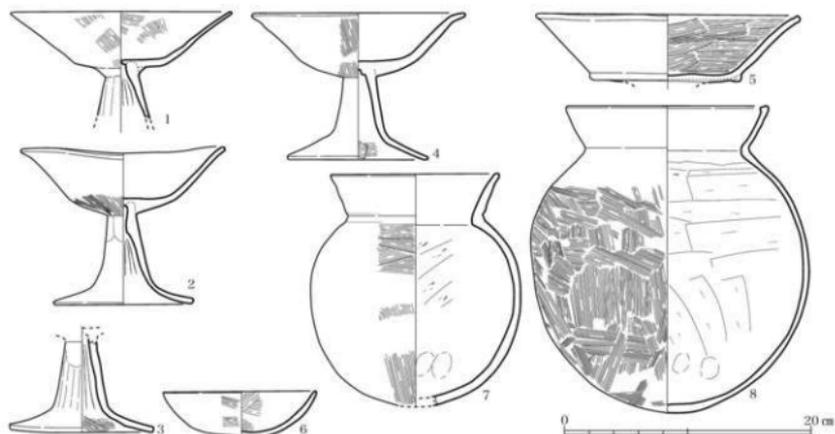


図7 SE05出土土器 (1/4)

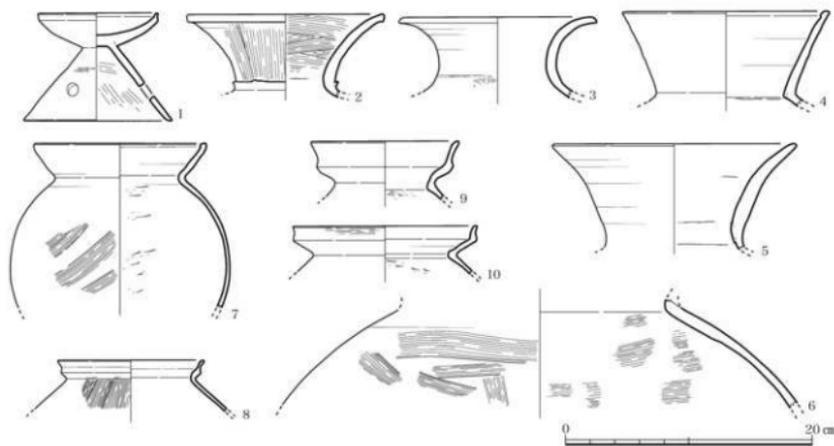


図8 SK23出土土器 (1/4)

直径約0.6m、深さ約0.6mである。有段口縁鉢(1)、台付小型丸底壺(2)、高杯(3)が出土した。

1は摩擦するが、いずれも精製品であると考えられ、2は台付であるが、口縁部が短めの小型丸底壺の形態を保つものである。高杯(3)は、脚部をヨコミガキするほか、杯部内面に放射状暗文を施す点が特徴である。杯部と受部、脚部の稜は明瞭であり、脚裾部に透孔はない。SE05 (HJ173-SK54) 直径約1.1mの不整形円形を呈

し、深さ約0.2mである。土器類とともに板・棒状の木材が出土していることから井戸として報告されている。高杯(1～5)、鉢(6)、甕(7・8)が出土した。

高杯は、いずれもハケ調整を基調とし、杯部が直線的にのびるもの(1)、端部が外反するもの(2・4)、杯部と受部に段をつける大型高杯(5)がある。5を除きいずれも杯部と受部や脚部の稜は不明瞭である。

鉢は、杯状の形態であり、内外面ともにハケ調整で、

菅原東遺跡の塼六建物・土坑群出土土器

HJ173	SB04	5	古式土師器 有段口鉢形	復元口径 底高	13.0cm 4.8cm	淡褐色	やや歪、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成やや不具。	復元口径がやや短く、口縁に対して深みのある形状を呈する。2次口縁部はココナデ。それ以外は内外面ともにやや歪みで、体部外面には1キズで調整のわずかに調整できる。各部の顔面は直く、薄手の積製品である。口縁部は1/8直存。	SK25
HJ173	SB04	6	古式土師器 有段口鉢形	復元口径 底高	14.1cm 5.0cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	比較的薄手であるが、各部の顔面はやや平坦。内外面ともに厚縁。胎土がやや不具であり、積製品であるが、口縁部で1/8直存。	SK25
HJ173	SB04	7	古式土師器 有段口鉢形	復元口径 底高	15.0cm 5.3cm	褐色	非常に粗。3mm以下の砂粒多く含む。焼成やや不具。	各部の縁は比較的粗であるが、口縁部はほぼ平坦。内外面ともに厚縁。胎土が非常に粗く、粗製品であるが、口縁部で1/8直存。	SK25
HJ173	SB04	8	古式土師器 有段口鉢形	復元口径 底高	4.8cm	赤褐色	やや歪、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	口縁に対してやや短い形状を呈する。口縁部は内外面ともにココナデ。体部は外面でやや厚くやや歪みココナデ。内面は歪なココナデで胎土が調整のわずかに調整。胎部で1/8直存。	SK25
HJ173	SB04	9	古式土師器 小型甕台	復元口径 底高	9.6cm 8.6cm	淡褐色	やや粗、3mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	通常の小型甕台の積製品。口縁部はほぼやや上がり、ココナデによりやや歪み。内外面ともに比較的密なココナデを施すが厚縁し一部不明。胎部は2方向の透孔あり。胎部直存。	SK25
HJ173	SB04	10	古式土師器 小型甕台	復元口径 底高	11.6cm 6.1cm	赤褐色	やや歪、2mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	外面は杯部と胎部の透孔付近より厚くココナデを施し、透孔より上部は胎部方向のナゲ調整でミギキは調整できない。内面は厚縁であるが、縁目が確認できる。透孔は3方向に穿孔される。胎土直存。	SK25
HJ173	SB04	11	古式土師器 小型甕台	底径 底高	12.3cm 4.7cm	褐色	やや歪、2mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	X字状の小型甕台。外面は縦方向のケズリ後、密なココナデ。内面は胎部部をハケ調整し、上部は縁目が見える。胎部は直線的にのびるが、胎部はやや反る。胎部直存。	SK25
HJ173	SB04	12	古式土師器 小型甕台	復元口径 底高	6.8cm 6.8cm	淡褐色	やや歪、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	X字状の小型甕台。杯部はややゆるみをも、胎部はわずかに反る。外面は杯部をココナデ。胎部は縦方向のナゲやや歪みココナデ。内面は口縁部をココナデし、杯部は縦方向のミギキ。胎部はわずかに歪みココナデ調整できる。胎部で1/2直存。	SK25
HJ173	SB04	13	古式土師器 高杯	復元口径 底高	16.0cm 5.2cm	褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	杯部が比較的深く、受部の後縁もやや緩やかな調整できる。杯部は直線的にのび胎部はわずかに反る。内外面ともにココナデであるが厚縁し不明。口縁部で1/2直存。	SK25
HJ173	SB04	14	古式土師器 高杯	口径 底高	17.2cm 6.7cm	褐色	やや歪、1mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	杯部が比較的深く、受部の間口よりやや緩いをもつ。杯部は直線的にのびる。内外面ともにココナデであるが厚縁し不明。杯部直存。	SK25
HJ173	SB04	15	古式土師器 二重口鉢形	復元口径 底高	23.0cm 6.5cm	淡黄褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	1次口縁部はやや前方向に立ち上がり、そこから2次口縁部を張り付ける。2次口縁部はやや反り、胎部でやや反る。内外面ともにココナデ。1次口縁部付近で1/8直存。	SK25
HJ173	SB04	16	古式土師器 二重口鉢形	復元口径 底高	27.7cm 10.7cm	暗褐色	皿、7mm以下の砂粒内閉石含む。焼成良好。	胎部から上方へはややつらいつのび、1次口縁部はほぼ水平に各個へ曲る。そこから2次口縁部をややゆるみ気味に張り付ける。内外面ともにココナデ。胎土からみて生駒西産品。口縁部で1/4直存。	SK25
HJ173	SB04	17	古式土師器 加蓋甕	復元口径 底高	31.8cm 6.8cm	暗褐色	皿、3mm以下の砂粒内閉石含む。焼成やや不具。	口縁部は緩やかに反り、胎部は張り出しで段を設け、2層1口の筒の張り付け竹管を施す。残存片で1層のみみられず胎部不明。胎土からみて生駒西産品。口縁部で1/8直存。	SK25
HJ173	SB04	18	古式土師器 加蓋甕	復元口径 底高	33.1cm 6.3cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	口縁部はややゆるみ気味で、胎土を張り付けて重下口縁となる。この部分に2層1口の張り付け竹管を施し、胎部は広めである。外面は4条1組の胎部段状文を5段施す。内面には口縁部から1条1組の胎部段状文を2段施し、以下はココナデを若干反らしたミギキを施す。胎部段状文にはミギキは及ばない。口縁部で1/4直存。	SK25
HJ173	SB04	19	古式土師器 甕	底高	5.0cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	胎部に突帯を張り付けることから加蓋甕の可能性があり、内外面ともに厚縁。胎部で1/4直存。	SK25
HJ173	SB04	20	古式土師器 柳ヶ坪型甕	復元口径 底高	18.8cm 5.7cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成不具。	焼成不具で厚縁が美しいが、柳ヶ坪型特有の縁文が口縁部の内外面に施される。胎部はやや厚め。口縁部で1/4直存。	SK25
HJ173	SB04	21	古式土師器 甕	復元口径 底高	16.8cm 6.7cm	暗褐色	皿、5mm以下の砂粒内閉石含む。焼成良好。	口縁部はやや歪みのココナデにより厚み、斜め方向に立ち上がる形状を呈する。内外面ともにココナデ。胎土から生駒西産品。口縁部で1/3直存。	SK25
HJ173	SB04	22	古式土師器 甕	復元口径 底高	16.4cm 9.0cm	褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部がハの字にひらく直口直で、内外面ともに密なココナデを施す積製品。胎部直下から横方向のケズリ直存。胎部で1/2直存。	SK25
HJ173	SB04	23	古式土師器 甕	復元口径 底高	18.2cm 13.9cm	褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	胎部の顔面は比較的狭く、口縁部は緩やかに反る。外面は全体をタタケし、口縁部と胎部付近にはココナデを施す。内面は口縁部がココナデ、杯部が横方向のハケ調整。胎部直存。	SK25
HJ173	SB04	24	古式土師器 甕	復元口径 底高	19.5cm 11.6cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	ハの字にひらく口縁部とそこから斜めから平帯まで全体をもつ。外面は口縁部をハケ調整。体部はやや立ち上がりのタタケのちタタケ調整。口縁部は胎部よりややゴボコしている。内面は厚縁。胎部で1/8直存。	SK25
HJ173	SB04	25	古式土師器 高杯	高さ 底高	6.4cm 8.5cm	褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	伝統的V様式系型の高杯形近の厚片。外面はタタケのち部分のみならず、内面も平。胎部直存。	SK25
HJ173	SB04	26	古式土師器 甕	復元口径 底高	15.1cm 4.2cm	淡褐色	皿、2mm以下の砂粒含む。焼成良好。	胎部の顔面は比較的狭く、口縁部は直線的にのび、胎部・胎部付近をココナデすることで全体の胎部はやや平。胎部は小さく肥厚し、胎部は口縁部により厚い。外面は胎部直下からV字状直存。口縁部で1/6直存。	SK25
HJ173	SB04	27	古式土師器 甕	復元口径 底高	16.0cm 5.9cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はわずかに内凹し胎部は調整する。胎部はややゆるみのココナデにより厚い。外面は厚縁するが、内面は胎部直下にココナデを施し、その下からケズリ調整。口縁部で1/5直存。	SK25
HJ173	SB04	28	古式土師器 S字蓋	復元口径 底高	13.9cm 3.3cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	S字蓋で口縁部の顔面は比較的狭く、胎部は緩やかに曲る。外面胎部にはわずかに斜め方向のハケ調整が見える。口縁部で1/6直存。	SK25
HJ173	SB04	29	古式土師器 甕	復元口径 底高	49.6cm 4.9cm	淡褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不具。	短めの複合口縁部をもつ。胎部は調整し胎部には面をもつ。胎部は緩やかに胎部となる。胎部から胎部直下であるが、胎土はひびきで若干反る。胎部直下で1/2直存。	SK25
HJ182	SB07	1	古式土師器 小型丸鉢形	復元口径 底高	11.9cm 3.9cm	褐色	やや歪、2mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	胎部が欠損するが、小型丸鉢形と考えられる。口縁部は比較的発達し、内外面ともに密なココナデを施す。口縁部で1/8直存。	SB03
HJ182	SB07	2	古式土師器 小型甕台	底径 底高	2.1cm	褐色	やや歪、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	X字状の小型甕台。外面は密なココナデ。内面はハの字状の顔面がわずかに残り、胎土部には縁目が見える。胎土直存。	SB03
HJ182	SB07	3	古式土師器 高杯	底径 底高	7.9cm	褐色	皿、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	比較的筒状部が短く、胎部は顔面と縁目調整の胎部である。受部外面は未だミギキまたはナゲであるが1次調整のケズリが調整できる。胎部は厚縁するがココナデ。内面は不明瞭である。胎土直存。	SB03

HJ182	SB07	4	古式土器部 二重口縁部	復元口径 残高	17.6cm 6.2cm	棕色	やや瘦、5cm以下の砂粒含む。焼成良好。	やや中脩する頸部をもち、2次口縁は比較的ひらく民衆を定する。内外面ともにヨコミギを施す類製品で、内面は外面に比しやや中脩量が多いとみられる。頸部存在。	SB03
HJ182	SB07	5	古式土器部 二重口縁部	復元口径 残高	23.7cm 7.1cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不十分。	頸部は強く屈曲し、1次口縁部は比較的平なり2次口縁部を貼り付ける。内外面ともに中脩量が多いが、頸部外面には先折があり、本来はミギギを施したものと考えられる。1次口縁部で1/8遺存。	SB03
HJ182	SB07	6	古式土器部 二重口縁部	復元口径 残高	21.6cm 4.6cm	棕色	やや中脩、2mm以下の砂粒含む。焼成良好。	胴方向に1次口縁部のび、重下1/8部を骨子出す。2次口縁部は頸部直下と頸部をコナすすることで、ややつまみ上げような形状を呈する。2次口縁部は内外面ともに縦方向のミギギで、外面はわずかに2次ヨコミギを調整できる。口縁部で1/8遺存。	SB03
HJ182	SB07	7	古式土器部 複合口縁部	残高	13.9cm	棕色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不十分。	の字に屈曲する複合口縁部で、頸部外面タテハク、内面にはわずかにヨコハクが調整できる。口縁部直下で1/4遺存。	SB03
HJ182	SB07	8	古式土器部 甕	復元口径 残高	12.9cm 4.2cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	やや内脩する口縁部で頸部は肥厚する。外面は磨減するが、内面は頸部直下をコナす。その下からケズリ調整。口縁部で1/4遺存。	SB03
HJ182	SB07	9	古式土器部 甕	復元口径 残高	16.0cm 8.0cm	棕色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	体部が張り、短めの口縁部をもち、頸部の屈曲は緩やかで、口縁部はわずかに立ち上がる。体部外面はハケ調整、内面はナズ。頸部で1/8遺存。	SB03
HJ182	SB07	10	古式土器部 甕	復元口径 残高	12.9cm 5.8cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	短めの複合口縁部をもち、外面には磨減を施す。内面にはタテハク、内面は磨減。口縁部からみて古簡素と考えられるが、胎土は在地のものと同等である。口縁部で1/8遺存。	SB03
HJ182	SB07	11	古式土器部 S字甕	復元口径 残高	13.0cm 4.7cm	暗赤褐色	やや中脩、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	S字甕で、屈曲は比較的鋭い。頸部外面はタテハクで、残存する最下部に2次ヨコミギが調整できる。内面には斜め方向のケズリ調整が認められる。口縁部で完存。	SB03
HJ182	SX09	1	古式土器部 有段口縁部	口径 残高	17.4cm 4.6cm	棕色	やや中脩、1mm以下の砂粒含む。焼成不十分。	焼成不良により表面は激しく磨減し、脚壁が薄くなっている。調整は内外面ともに不十分。口縁部で完存。	SK44
HJ182	SX09	2	古式土器部 付小丸底甕	口径 残高	6.6cm 9.8cm	棕色	やや中脩、1mm以下の砂粒含む。焼成やや不十分。	口縁部が短めの小丸底甕にハ字にひらく調整が取り付く。表面は磨減するが、丸底部分で横方向のケズリもちヨコミギ、頸部で縦方向のケズリもちヨコミギが調整できる。頸部内面には斜め方向にケズリ調整が認められる。口縁部で完存。	SK44
HJ182	SX09	3	古式土器部 高杯	口径 残高	16.5cm 13.7cm	赤褐色	やや中脩、ほとんど砂粒なし。焼成良好。	深のみの杯をもち、受部と頸部との接線も比較的明確。内面は口縁部直下をコナす。内面には放射状のミギギが調整できる。頸部外面はヨコミギ、体部外面は不明であるが頸部にハケ調整がみられる。ほぼ完存。	SK44
HJ182	SE05	1	古式土器部 高杯	口径 残高	17.9cm 8.5cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不十分。	比較的ひらく杯をもち、杯部と受部の接線は緩やかであるが確認できる。杯部は内外面ともにハケ、頸部は外面ナズ。内面は不明であるが取り目が調整できる。杯部完存。	SK54
HJ182	SE05	2	古式土器部 高杯	口径 残高	17.3cm 12.8cm	淡黄褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好。	杯部と受部の接線は緩やかで不明。内面ともに磨減し調整が取り付く。杯部内面はハケ調整。頸部内面には斜め方向のケズリ調整が認められる。この取り目より上部は縦長形状となる。頸部も緩やかに屈曲する。ほぼ完存。	SK54
HJ182	SE05	3	古式土器部 高杯	口径 残高	11.4cm 7.6cm	淡褐色	やや中脩、1mm以下の砂粒含む。焼成良好。	頸部にかけての屈曲は比較的緩やかで接線も不明。外面はナズ。内面は頸部直下をコナす。頸部には斜め方向にケズリ調整が認められる。ほぼ完存。	SK54
HJ182	SE05	4	古式土器部 高杯	口径 残高	17.0cm 12.0cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不十分。	杯部と受部の接線は不明瞭で、口縁部が外反する。頸部も緩やかに緩やか。杯部外面は縦方向のハケ調整、口縁部直下はナズ調整。ほぼ完存。	SK54
HJ182	SE05	5	古式土器部 高杯	口径 残高	21.2cm 5.5cm	淡褐色	やや中脩、2mm以下の砂粒少量含む。焼成やや不十分。	受部成形後、杯部を貼り付け、接合部に粘土を施して接をつける大型高杯。外周は磨減。内面は横方向のハケ調整。杯部完存。	SK54
HJ182	SE05	6	古式土器部 杯	口径 残高	12.3cm 3.7cm	淡褐色	粗、2mm以下の砂粒含む。焼成やや不十分。	内外面ともにハケ調整で胎土は比較的もろい。完存。	SK54
HJ182	SE05	7	古式土器部 杯	口径 残高	13.5cm 19.0cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はあまりひらかず、頸部も肥厚しない。外面は体部上半は横方向のハケ、下半は縦方向のハケ。内面はケズリ調整。外面完全に2次焼成のスズが付着する。全体で1/4遺存。	SK54
HJ182	SE05	8	古式土器部 甕	口径 残高	15.8cm 25.0cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はやや内脩し、頸部で肥厚する。全体に薄汚すであり、体部外面はハケ調整。内面は頸部直下はコナす。以下ケズリ調整。口縁部で1/3遺存。	SK54
HJ182	SK23	1	古式土器部 小型甕台	口径 残高	9.7cm 8.8cm	淡褐色	やや中脩、ほとんど砂粒なし。焼成やや不十分。	通常の小型甕台で口縁部はわずかに立ち上がる。杯部内外面は磨減。頸部外面は磨減するがヨコミギ、内面はやや中脩の調整。3方向の透孔あり。ほぼ完存。	SK36
HJ182	SK23	2	古式土器部 甕	復元口径 残高	16.0cm 5.8cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はゆるやかな外反し、頸部には強く実部を貼り付ける。内外面ともにハケ調整。口縁部で1/8遺存。	SK36
HJ182	SK23	3	古式土器部 甕	復元口径 残高	15.4cm 6.6cm	褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	強く外反し、口縁部は体部の径目と不明瞭である。外面はヨコミギであるが、頸部付近以下では1次ハケ調整をする。内面は磨減。口縁部で1/3遺存。	SK36
HJ182	SK23	4	古式土器部 甕	復元口径 残高	16.2cm 7.8cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不十分。	口縁部は直線的にひらく。頸部は肥厚する。外面は磨減し、内面は口縁部をコナす。頸部の屈曲は比較的鋭く、頸部直下に接合部が調整できる。口縁部で1/8遺存。	SK36
HJ182	SK23	5	古式土器部 甕	復元口径 残高	19.6cm 8.6cm	棕色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにコナす。内面の頸部直下には粘土を横方向に貼り足している。口縁部で1/5遺存。	SK36
HJ182	SK23	6	古式土器部 甕	口径 残高	8.9cm	棕色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	比較的大型の甕甕部で口縁部の調整が一部残る。外面は頸部付近をコナす。その直下に横方向にやや放射状ヨコハクを施し、以下不定方向のハケ調整。内面は横方向を中心とするハケ調整。頸部で1/6遺存。	SK36
HJ182	SK23	7	古式土器部 甕	復元口径 残高	14.0cm 13.4cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	わずかに内脩気味の口縁部で頸部を肥厚する。口縁部は内外面ともにコナす。体部外面はハケ。内面は頸部直下はコナすし、以下ケズリ調整。口縁部で1/2遺存。	SK36
HJ182	SK23	8	古式土器部 S字甕	復元口径 残高	11.8cm 4.2cm	淡褐色	やや中脩、2mm以下の砂粒少量含む。焼成やや不十分。	S字甕で、口縁部は非常に薄い。頸部外面は斜め方向のハケ調整、内面は磨減。口縁部で1/4遺存。	SK36
HJ182	SK23	9	古式土器部 甕	復元口径 残高	12.0cm 4.8cm	棕色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	複合口縁をもち、2次口縁部はやや長めに斜め方向へ立ち上がる。1次口縁部の接線はやや中脩か。磨減し調整は不明瞭であるが、頸部内面は縦方向のケズリ調整。口縁部で1/4遺存。	SK36
HJ182	SK23	10	古式土器部 甕	復元口径 残高	15.0cm 3.9cm	淡褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。	複合口縁をもち、2次口縁部は短く立ち上がる。2次口縁部の外面には磨減は認められるとみられるが胎土中に残る。頸部内面にはケズリ調整が認められる。頸部から古簡素とみられるが、胎土は在地のものと考えられる。口縁部で1/2遺存。	SK36

胎土も粗く粗製品である。

甕は8が布留甕であるが、肩部ヨコハケはみられない。7は口縁部が肥厚せず、典型的な布留甕の形態を逸脱しつつあるものである。

以上の特徴のなかでも、高杯がハケ調整を基調とし大型高杯を含むこと、杯状の鉢を含むこと、布留甕の肩部ヨコハケが消失していることが注目できる。

SK23 (HJ173-SK36) 直径約2.4mの不整円形を呈し、深さ約0.4mである。小型器台(1)、壺(2~6)、甕(7~10)が出土した。

1は、外面にわずかにヨコミガキが残るが、内面はハケ調整のものである。

壺は、いずれもハケ調整を主とし、様々な口縁部形状のものがある。

甕は典型的な布留甕(7)のほか、S字甕(8)や古備系(10)のものを含む。

ここでは、壺や甕が主体であり、精製の小型器台1点を含むものの、その他精製器種や高杯を含まないことが特徴である。

IV. 菅原東遺跡出土土器の編年

菅原東遺跡では、重複する遺構が少なく層位による土器年代の前後関係を迫ることが困難である。したがって、編年を行う場合は一括資料に基づいて型式学的検討を行う必要がある。

菅原東遺跡出土土器については、本稿以前に概要報告されたものに筆者が加筆修正を加えたもの(村瀬2016)と、奈良県立橿原考古学研究所(以下、橿考研)の調査出土土器(橿考研2011)がある。ほかに、奈良市教育委員会が調査した方形区画溝SX22周辺の溝資料があるが、これについては橿考研調査溝と繋がると思われるため、本稿をもって、概ね菅原東遺跡の主要遺構についての土器様相は報告されたといえる。以下では、各遺構出土土器をもとに、器種ごとに型式分類を行い、その様相を総合的に検討することで編年を行う。

i) 各種土器の分類

小型丸底土器 特徴をもとに分類すると、①高さの比率が口縁部<体部でヨコミガキを施すもの、②口縁部=体部でヨコミガキを施すもの、③口縁部>体部でヨコミガキを施すもの、④口縁部=体部で一部縦方向のミガキを施すもの、⑤口縁部<体部で外面ハケ調整のもの、⑥口縁部<体部で外面ナデ調整のもの、に分けられる。

小型器台 分類すると、①中実で外面ヨコミガキを施すもの、②X字状を呈し外面ヨコミガキを施すもの、③

X字状を呈し、外面ハケ調整のもの、④中実で器壁が厚くナデ調整の粗製品であるもの、に分けられる。

有段口縁鉢 分類すると、①内外面ともにヨコミガキを施すもの、②ミガキを施さない粗製品であるもの、に分けられる。

高杯 分類すると、①杯部と受部の稜が明瞭で外面にヨコミガキを施し、杯部内面に放射状暗文を施すもの、②杯部と受部の稜が明瞭で杯部内外面ヨコミガキであるもの、③杯部と受部の稜が明瞭で杯部内外面ハケ調整であるもの、④杯部と受部の稜が不明瞭で杯部内外面ハケ調整のもの、⑤杯部と受部の接合部に段差をつけ杯部内外面ハケ調整のもの、に分けられる。

杯 分類すると、①外面にケズリ調整を施すもの、②内外面ハケ調整であるもの、に分けられる。

二重口縁壺 分類すると、①口縁部にミガキ後波状文を施し、垂下口縁部に竹管文を加飾するもの、②口縁部外面に竹管文を加飾するもの、③加飾はなく、内外面にヨコミガキを施すもの、④ミガキ調整がなく頸部が屈曲するもの、⑤ミガキ調整がなく頸部が直線的のびるもの、に分けられる。

直口壺 分類すると、①ヨコミガキ調整を施すもの、②ハケ・ナデ調整を施すもの、に分けられる。

甕(外来系を除く) 分類すると、①外面タタキであるもの、②口縁部が直線的のびて端部がわずかに肥厚し、外面ハケ・内面ケズリ調整のもの、③口縁部が内湾気味にのびて端部が肥厚し、外面ハケ(肩部ヨコハケあり)・内面ケズリ調整のもの、④口縁部が内湾気味にのびて端部が肥厚し、外面ハケ(肩部ヨコハケなし)・内面ケズリ調整のもの、⑤口縁部が肥厚せず、外面ハケ・内面ケズリ調整のもの、に分けられる。

ii) 菅原東遺跡の土器様相

様相1 SX09が該当する。小型丸底土器は脚付のものであるが、口縁部が短くヨコミガキを施すものである。有段口縁鉢は調整不明瞭であるがそれを含む。高杯は杯部内面に放射状暗文を施すのが特徴であり、庄内系高杯の系譜にあるものである。

大和地域における有段口縁鉢の出現は、寺澤編年布留1式以降であるが、放射状暗文を施す高杯は布留1式後半以降減少傾向となる。出土量が少ないため、厳密な位置づけは困難であるが、布留1式後半以前に相当する。様相2 SB07・SB04・SK23が該当する。小型丸底鉢は口縁部が発達するものが主体であるが、製作技法はケズリのちヨコミガキを密に施す丁寧なものである。有段口縁鉢は、SB04で粗製品を含むが精製品が主体である。

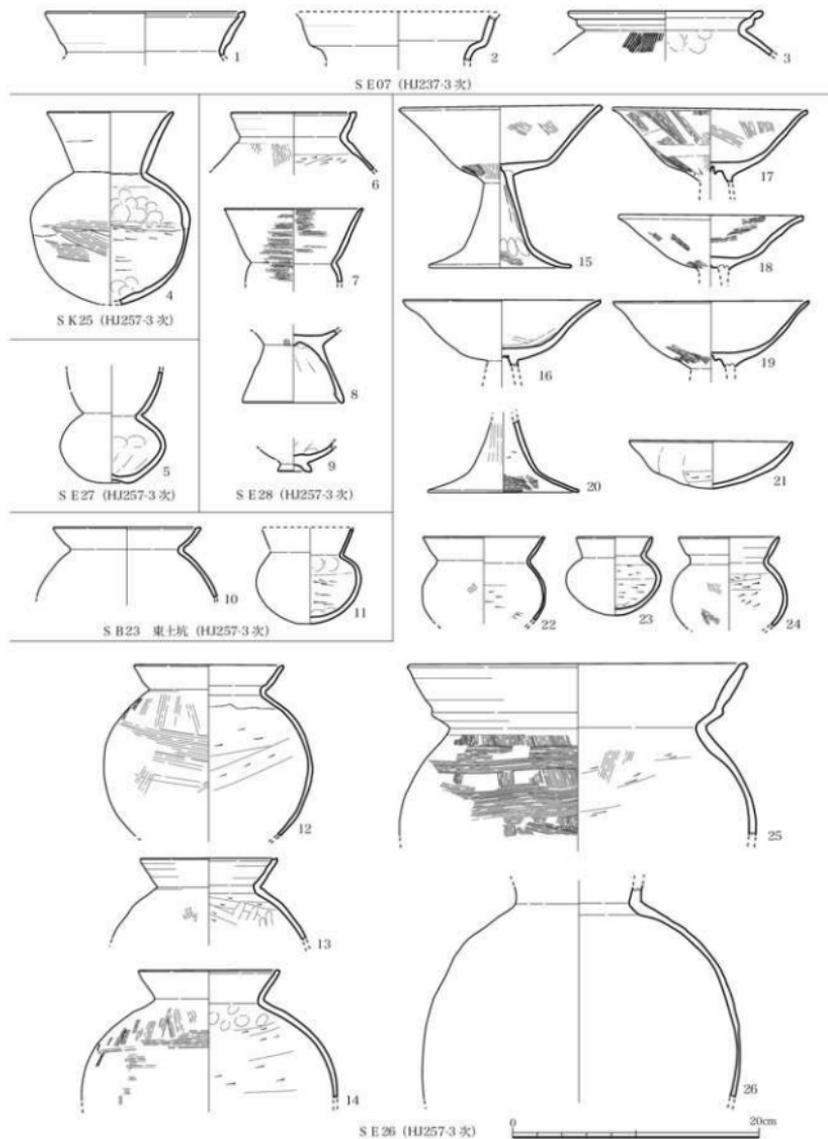


図9 菅原東遺跡出土土器 (1/4) (土器番号は(村瀬 2016)の観察表に対応)

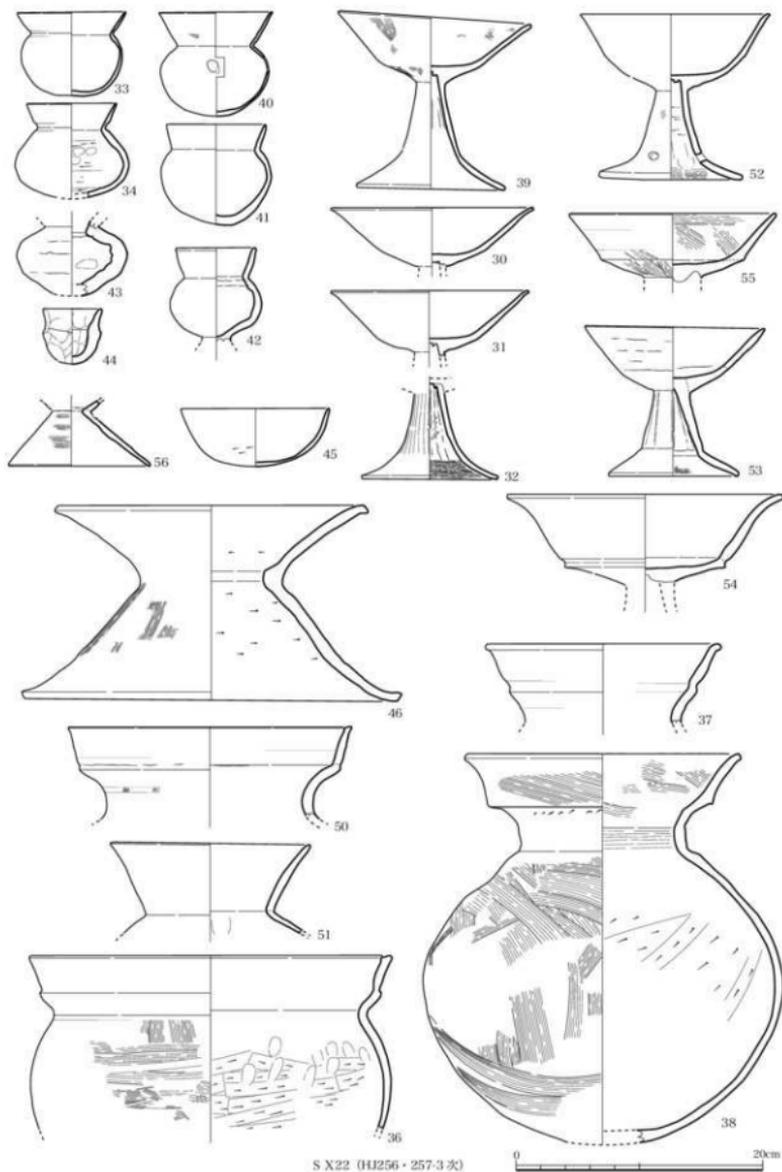


図10 菅原東遺跡出土土器 (1/4) (土器番号は(村瀬2016)の観察表に対応)

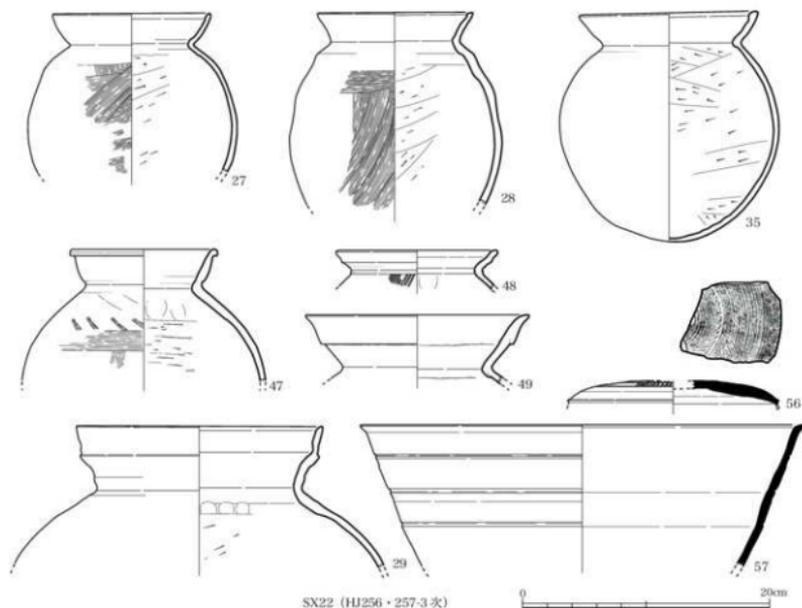


図11 菅原東遺跡出土土器(1/4)(土器番号は(村瀬2016)の観察表に対応)

小型器台は中実のものに加え、X字状のものがあり、ヨコミガキが比較的密で胎土等も精製品である。高杯は杯部と受部の稜が明瞭で、ヨコミガキを施す。壺では、二重口縁壺で加飾のあるものやヨコミガキを施す精製品を含む。また、精製の直口壺を含む。広口壺は比較的多様な形態があり、編年の指標を現状見出し難い。甕は、伝統的の第V様式系のタタキ甕がわずかながら残存し、庄内系統の口縁部処理をするものも含むが、典型的な布留甕が主体である。ほかに、吉備・山陰・東海系の外来系土器を含むが、いずれも在地の胎土であるものが多い。

大和地域における小型丸底鉢の口縁部の発達、X字状器台の出現は布留1式後半に求められ、精製の有縁高杯や加飾壺の残存、伝統的の第V様式甕の存在も、寺澤編年における布留2式に下らない根拠となる。ただし、寺澤編年における布留2式の基準資料には、器種構成の良好な一括資料に乏しく、なおかつ各器種で布留1式後半の特徴を継続するとされるものが多くある。したがって、ここではやや幅をもたせ、様相2は布留1式後半～布留2式と設定しておき、今後奈良市域の出土資料整理をふまえて再考したい。とくに豊富な器種構成であるSB04

は、様相2の基準資料といえる。

様相3 SE26・SB23 東土坑が該当する。小型丸底土器は、口縁部の発達する鉢を含まず、外面ハケ・内面ケズリ調整の壺が主体となる。高杯は、やや稜を残す胴体があるものの、基本的に稜は消失して口縁端部がやや反る形状のものとなる。また、全体の調整はハケ調整が基調となる。菅原東遺跡としてはこの段階で杯がみられる。甕は口縁部が肥厚し肩部ヨコハケを施す布留甕のほか、口縁端部が肥厚しないものもある。

大和地域において精製小型丸底鉢から粗製小型丸底壺が主体となるのは、布留3式に位置づけられる。ハケ調整の高杯が主体となるもの、これに呼応するものであり、とくにSE26は様相3の基準資料といえる。

様相4 SB03が該当する。小型丸底壺は、様相3の外表面ハケ調整のものがわずかにあるが、主体はナゲ調整のものとなる。器台は、中実で器壁の厚いナゲ調整の器種が登場する。SB03では8～10のように様相2で主体となる器種が図示した3点含むが、混入とはみられず、この段階でもわずかに含む状況であるとみられる。高杯は様相3と類似するが、口径に対して杯部が浅くな

表2 遺構別土器分類組成表

	SX09	SB07	SB04	SK23	SE27	SE28	SK25	SX06	SE07	SE26	SB23 東土	SD04	SB03	SE05	SD24	SX22
小型丸底土器	①	②	②③		③	③				④	④	④⑤	④⑤		④⑤	④⑤
小型器台		②	①②	①				③				③?	②④			②
有段口縁鉢	①?		①②										②			
高杯	①	②	②						③④			③④	④	④⑤	④⑤	③④⑤
杯								①					②			①
二重口縁壺		②③	①②③④													③
直口壺			①	②		②										
甕(外米系除く)		②	②③?	③?				②	③⑤	③?		③?	③⑤	④⑤	④⑤	④⑤
東海系		壺	壺・壺	壺		壺		壺					壺			
山陰系			壺													壺、器台
古瀬系			壺	壺												
初期須恵器																蓋、器台
様相	1	2		2~3			3			3~4	4	5	3~5			
寺澤編年	布留1式	布留1式後半~2式		布留2~3式			布留3式			布留3式~4式		布留4式				

る傾向がある。甕は、肩部ヨコハケを施す布留甕を含むものの、特異な形状の口縁部をもつ甕も含まれる。

大和地域において、小型丸底壺のナデ調整化は、これまであまり議論されておらず、概ね布留3~4式の範疇でとらえられている。新たな形態の器台の出現も含めて、菅原東遺跡のなかでは画期となる段階だが、今後周辺資料をふまえて既存編年と比較検討する必要がある。

様相5 SE05・SD24が該当する。基本的な器種構成は様相4と同様であるが、新たに有段の大型高杯が出現する。また、甕では肩部ヨコハケの布留甕が消失傾向にあるといえる。補足としてSX22では大型高杯に加えて初期須恵器が数点出土しており、概ね須恵器出現段階に併行するとみられる。様相4のSB03上面を覆う包含層からも大型高杯が出土しており、実質的に様相4・5は同時期とみなせる可能性がある。

大和地域における大型高杯や初期須恵器の出現は、布留4式に位置づけられる。

V. 菅原東遺跡の集落動態

以上で報告した土器類をもって、概ね現状における菅原東遺跡の主要な一括資料を提示した。以下では、菅原東遺跡の集落動態についての考察を行う。

i) 既往の研究

菅原東遺跡については、岡田憲一(岡田2011・2014)、中野咲(中野2016)、筆者(村瀬2016・2018)による検討がある。

岡田は、方形区画溝SX22とその周辺の区画溝の検討

から、1~3期に区分した(岡田2011)。この検討には樞考研が調査した溝SD04・24・201・202出土土器および、概要報告でのSX22出土土器を参考に行われており、第2期(布留3式)~3期(布留4式)の出土土器をもとにした検討に加え、概要報告での文章表記を頼りに、第1期をSX22設営期として設定した。SX22出土土器を廃棄年代とみて、その設営年代を遡って設定した点は見である。その後、これらをまとめ直した後稿(岡田2014)があるが、基本的には同様の概念に基づき、新たにI~IV期に段階区分を行った。ただし、いずれもその初期段階の設定は、出土土器が未報告であることから、状況証拠的仮説であり、資料報告が望まれた。

そこで筆者は、岡田の指摘した方形区画溝SX22とそこに重複する井戸等の出土土器を報告した(村瀬2016)。その結果、SX22からは既往の認識通り布留3~4式段階の土器が主体であり、それを如実に示す大型高杯や初期須恵器の存在を提示した。一方、これに重複する井戸等の遺構のうち、SE27やSE28では、口縁部の発達する小型丸底土器が出土しており、SX22の設営期の状況をより示すとみられるこれらの遺構では、布留2式段階まで遡りうる実態を提示した。

中野は、菅原東遺跡を含めた秋篠川流域の集落動態を検討するなかで、菅原東遺跡は岡田の見解を追認し、秋篠川東岸が布留1式段階に開発が始まることをふまえて、段階的な開発状況を示唆している(中野2016)。

以上のように、検討は進められつつあるものの、出土資料の報告がないことから、踏み込んだ検証に至れてい

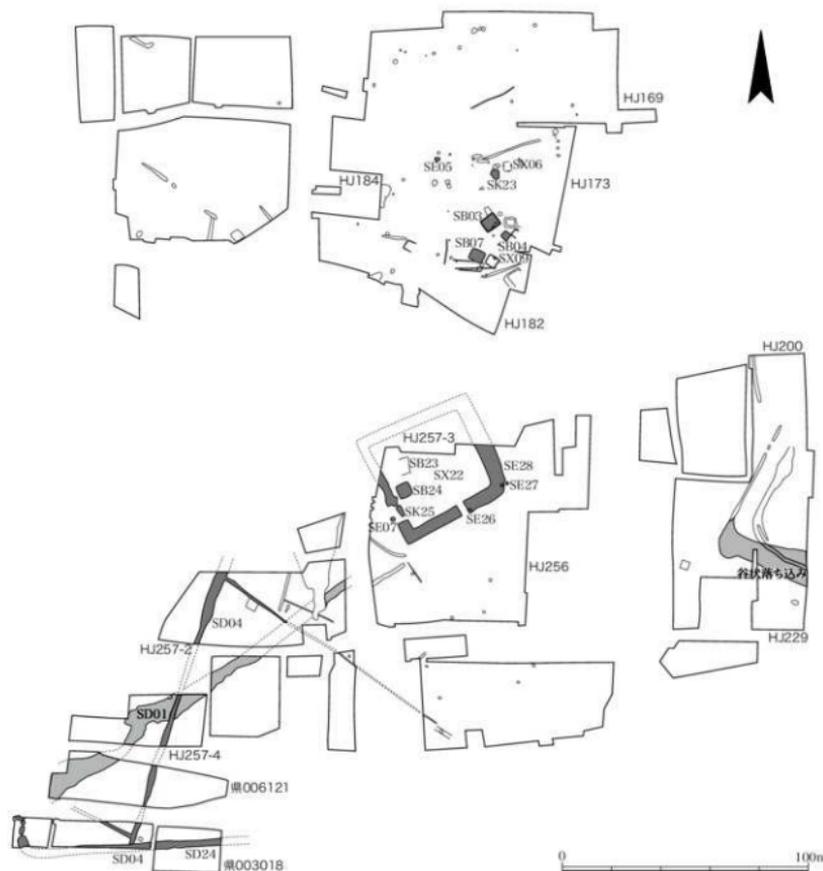


図12 古墳時代前期における菅原東遺跡の遺構配置 (1/700)

ないことが読み取れる。筆者自身が提示したSX22と周辺出土土器についても、出土量が少なく時期を遡らせることに對し慎重にならざるを得なかった。

ii) 出土土器からみた遺構変遷

既往の研究をふまえて、本稿では菅原東遺跡の中心部とみられてきた方形区画溝SX22の北側に位置する竪穴建物・土坑群出土土器の報告を行った。その結果、SB04では確実に布留1式後半～2式に遡る一括資料を確認し、菅原東遺跡の開発がこの段階まで遡ることが明らかとなった。以下では、これらをもとにして遺構変遷を段階ごとに確認したい。

第1期：萌生期（布留1式後半段階）

菅原東遺跡における竪穴建物・土坑群が多く検出されたHJ第169・173・182・184次調査の発掘区では、弥生時代中期の方形周溝墓を検出しており、集落としてはこの時期にすでに開発されている。しかし、その後の竪穴建物・土坑群は方形周溝墓と重複する形で開発されているため両者の関連性はなく、古墳時代になってからある契機をもってここに集落が開発されたとみてよい。

開発時期は、SB04出土土器から布留1式後半段階とみられる。土器編年上、これよりやや古い様相を示すSX09は、SB08内の小土坑であり、SB08はSB04より

やや古い可能性があるが、少なくともこれまでの認識よりさらに遡る布留1式段階に集落開発が始まることかわかる。方形区画溝 SX22 および周辺出土土器は、これより新しい様相であり、竪穴建物群が造営されはじめる段階に、方形区画溝は未掘削であったとみられる。

第2期：開発期（布留2式段階）

集落の中心部とみられる方形区画溝 SX22、およびそれに接する井戸等が構築される。第1期では竪穴建物等がベースキャンプのように営まれているのみであったが、方形区画溝の掘削は首長居館としての体裁を整備したと評価できる点で画期である。方形区画溝の周辺にも区画溝が交差するように掘削されるが、一部はこの段階に整備が始まったと考えられる。

竪穴建物・土坑群では良好な器種構成をもつ一括資料がこの段階に見当たらない。SX06はSB01内の小穴であるが、第1期に比べて粗雑化した小型器台が出土しており、引き続き居住空間としての機能は継続されているとみられる。

第3期：盛行期（布留3式段階）

方形区画溝周辺の区画溝を含めほとんどの集落整備が完了する段階とみられる。区画溝等の出土遺物は、概ね布留3～4式に位置づけられるものが主体を占め、若干布留2式に遡るものが含まれる状況から、この段階が最も集落として形成した段階と考えることができる。

竪穴建物・土坑群においてもSB03などの遺構が存在し、第1期から竪穴建物が継続する状況を示す。

第4期：廃絶期（布留4式段階）

方形区画溝 SX22、区画溝 SD04・24 等、竪穴建物・土坑群の井戸 SE05 からは、布留3～4式の土器が埋没年代を示しており、上述した竪穴建物 SB03 も上面を覆う埋土から大型高杯が出土している点からみて、各エリアでこの段階に廃絶する状況がうかがえる。

SX22では初期須恵器が出土しているが、菅原東遺跡全体でみればほとんど出土はなく、布留4式の比較的早い段階に集落としての機能が失われたとみられる。

iii) 佐紀地域としての評価

従来、菅原東遺跡出土土器として報告されてきた遺構は、方形区画溝 SX22・井戸 SE26、区画溝 SD04・24 であった。これらの土器はいずれも布留3式以降に位置づけられるもので、集落の主要な時期を示すものとして評価されてきた。その後、岡田憲一や筆者による補足によって、布留2式段階まで遡りうる可能性を指摘してきた。

しかし、本稿で検討してきたように、菅原東遺跡の中

心部（方形区画溝 SX22 等）の開発は布留2式段階であるものの、北側に隣接する竪穴建物・土坑群、つまり菅原東遺跡としての開発は布留1式段階に遡ることが明らかとなった。したがって、秋篠川流域としてみた場合、これまで段階的开发であると評価されてきたが、ほぼ同時期に菅原東遺跡・山陵町遺跡が開発されはじめるものと再評価できる。このことは、佐紀古墳群との関連を検討する上でも重要な集落動態と位置づけ得る。

VI. 菅原東遺跡と佐紀古墳群

菅原東遺跡については、約500m南に位置する宝来山古墳との関連が指摘されてきた（岡田2011・村瀬2018）。集落と遺跡の時期や位置関係からみても妥当であり、本稿でも対比検討した山陵町遺跡は佐紀陵山古墳を含む佐紀古墳群西群に関連するものとみてよからう。以下では、このことについて、古墳出土埴輪等と集落出土土器の比較検討から、その妥当性を示したい。

i) 埴輪編年からみた古墳変遷

佐紀古墳群をはじめとする大型古墳群は、陵墓に治定されており、副葬品が不明確である場合が多い。ただし、埴輪については宮内庁による報告等で、若干ながら様相が全体を通して把握できる。以下では、埴輪から大型古墳の前後関係を概観する。

佐紀陵山古墳では、形象埴輪がいくつか知られている。なかでも、蓋形埴輪は肋木を有し、笠部を立体表現するもので、立ち飾りも最古段階の表現である（小栗2007）。円筒埴輪は良好な資料に恵まれないが、補完資料として、北東側に位置するマエ塚古墳出土埴輪がある（奈良県教育委員会1969）。黒斑を有する罎付円筒埴輪で、底部高が突帯間隔の2倍で潮り付けられたものや口縁部高が低いものが含まれ、埴輪編年Ⅱ期のなかでも古相に位置づけられる。

佐紀石塚山古墳は、佐紀陵山古墳の西側に接する前方後円墳で、東側周濠が極端に狭く、佐紀陵山古墳に規制されたことが原因と考えられることから、それに後出するとみられる。出土埴輪は段数構成等がわかるものはないが、罎付円筒埴輪や櫛形埴輪、蓋形埴輪の笠部が立体表現であるものを含む（宮内庁書陵部1996・1997）。時期を特定するのは困難であるが、埴輪編年Ⅱ期のなかでおさまる可能性がある。

宝来山古墳では、これまで埴輪の様相が不明確であったが、加藤一郎による資料報告がなされている（加藤2012）。それによると、口縁部高8cm程度の黒斑を有する円筒埴輪があり、形象埴輪では笠部を立体表現する

土器編年	菅原東	埴輪編年	佐紀古墳群	大和古墳群	古市古墳群
布留1式	様相1	I期			
布留2式	様相2	II期	マエ塚古墳 陵山古墳	行燈山古墳	
布留3式	様相3	III期	石塚山古墳	宝来山古墳	
布留4式	様相4			五社山古墳	
	様相5			渋谷向山古墳	津堂城山古墳

図13 菅原東遺跡の動態と佐紀古墳群

蓋形埴輪や軀形埴輪の出土が報告されており、埴輪編年II期に位置づけられている。

五社山古墳は、埴丘裾の調査が行われ、黒斑をもち二次調整ヨコハケに静止痕のない円筒埴輪が出土している(宮内庁書陵部2004)。鯖付円筒埴輪も存在するが透孔は円形のものも多く、若干方形のものもある。また、形象埴輪では蓋形埴輪の笠部が線刻表現であるものが出土している。B種ヨコハケの個体が現状みつつかっていないことから、埴輪編年II期の範疇であるが、笠部が線刻表現の蓋形埴輪や龍目土器が共存するのは、III期に下る場合が多いことから、時期的に下る可能性を考慮すべきであろう。

以上からみると、佐紀古墳群ではとりあげた4つの古墳がいずれも概ね埴輪編年II期の範疇にあり、立地的にみて佐紀陵山→佐紀石塚山古墳、蓋形埴輪や龍目土器の出土からみて、佐紀陵山→五社山古墳であろうと考えられる。宝来山古墳では軀形埴輪が出土しており、佐紀陵山古墳では現状知られていないことから、佐紀陵山→宝来山→佐紀石塚山→五社山古墳の変遷を想定する。

ii) 土器との併行関係

上述した4つの古墳からは、築造時期に関わる古式土器群が出土していない。したがって、他地域の大型古墳群との関連を考慮して併行関係を検討する。

大和古墳群では、行燈山古墳と渋谷向山古墳が検討対象となる。行燈山古墳では東側の外堤斜面葺石から小型丸底鉢が出土している(宮内庁書陵部1976)。口縁部がやや発達するものの、口縁部高=体部高となるもので、布留1~2式の範疇で検討できるものである。埴輪は良

好な資料が見当たらないものの、隣接する柳山古墳では定型化以前の鯖付円筒埴輪や柵形埴輪が出土しており、埴輪編年1~5期に位置づけられる。

渋谷向山古墳は、宮内庁の調査によって埴輪が確認されており、円筒埴輪は黒斑をもち円形透孔を主体とする(大阪市立大学日本史研究室2010、宮内庁書陵部2017)。B種ヨコハケはなく埴丘に配置されたものの多くは鱗のないものであったと考えられる。形象埴輪でも蓋形埴輪は笠部が線刻表現のものであり、軀形埴輪の出土もみられる。出土土器は前方部周辺から出土しており、口縁部の発達する小型丸底鉢等があり、概ね布留1式後半~布留2式に位置づけられる(宮内庁書陵部1974)。ただし、これらの土器が埴丘構築前後のいずれを示すかは不明確である。

また、補足として古市古墳群で最古段階にあたる津堂城山古墳では、B種ヨコハケの埴輪が少量出土することから埴輪編年III-1期に位置づけられるが、蓋形埴輪の型式は五社山古墳と同一のものであり、概ねこれらは同時期としてみることができる。

津堂城山古墳外濠の堆積土からは外面ハケ・内面ケズリ調整で口縁部<体部となる粗製小型丸底壺や、肩部ヨコハケを残す布留壺が出土しており、概ね布留3式の特徴といえる(藤井寺市教育委員会2013)。内堤外側斜面からはTK73~208型式の須恵器が出土しており、以上をふまえても、概ね布留3~4式にかけて外濠の初期堆積があったとみてよからう。

以上をまとめると、大和古墳群では埴輪からみて行燈山古墳(1-5期)→渋谷向山古墳(II-2期)であり、

土器併行関係としては補充資料を含めて、行燈山古墳(Ⅰ-5期:布留1式後半)→佐紀陵山古墳(Ⅱ-1期)→宝来山古墳(Ⅱ-1~2期)→渋谷山古墳・佐紀石塚山古墳(Ⅱ-2期:布留2式後半)→五社神古墳・津堂城山古墳(Ⅲ-1期:布留3式)と考えられる。

iii) 菅原東遺跡の動態と宝来山古墳

最後に、改めて菅原東遺跡と宝来山古墳の関連をまとめる。宝来山古墳の築造時期は、埴輪編年Ⅱ-1期に対応する良好な出土土器がないものの、前述の検討により概ね布留1式後半~布留2式前半段階にあたりと想定することができた。これをもとに、先に提示した菅原東遺跡の時期区分と比較し、その動態を検討する。

宝来山古墳の築造開始は、概ね布留1式後半~布留2式前半段階のなかで考えられる。これは菅原東第1~2期にあたり、方形区画溝は未整備で、竪穴建物・土坑群が造営され始める時期と概ね合致する。つまり、宝来山古墳の築造開始と菅原東遺跡の開発開始時期が一致する。この段階における菅原東遺跡の様相は、竪穴建物がいくつか存在する程度であり、その存続時期幅も、土器型式でいう一型式分に満たない。だからこそ、竪穴建物ごとの土器様相に一括性が認められるのである。したがって、これらの竪穴建物は、宝来山古墳築造のための仮設キャンプとみることができる。

次に、宝来山古墳の築造が完了する布留2式段階は、菅原東第2期に相当する。この段階になると、方形区画溝などによる区画が整備され、全国的にみられる古墳時代の首長居館としての整備がはじまる。

また、この時期の大型前方後円墳の多くは、一般的に寿陵と考えられることから、菅原東第3期は、宝来山古墳での埋葬が完了した直後の段階に相当するとみられる。この時期には、菅原東遺跡の整備が完全に完了しており、集落としての最盛期を迎えている。

菅原東第4期は、一斉に遺構が廃絶し、集落としても以後古墳時代後期に至るまで遺構がみられなくなる。

つまり、宝来山古墳の築造開始とともに集落が成立した菅原東遺跡は、そこでの埋葬が完了してほどなく廃絶するという様相を示す。つまり、菅原東遺跡は一般的な生活集落とは異なり、宝来山古墳の築造および、その被葬者の動態に関わる集落遺跡であると評価できる。

Ⅶ. おわりに

本稿では、HJ第169・173・182・184次調査出土土器の再整理報告を行い、これまで報告されてきた菅原

東遺跡出土土器をあわせて、遺跡内での土器編年を行なった。これをもとに集落動態を4時期区分した。

また、佐紀古墳群をはじめとする大型古墳群出土埴輪・土器からその変遷を明らかにし、菅原東遺跡に近接する宝来山古墳との関係を考察した。

その結果、菅原東遺跡は宝来山古墳の築造時期と消長をほぼともにすることがわかった。このことは、従来報告されてきた布留3~4式の土器類だけでは検証できなかったもので、再整理によって集落の時期幅が明らかになったことで、はじめて動態を検証できたといえる。

引用文献

- 大阪市立大学日本史研究室 2010 『玉手山1号墳の研究』
 岡田憲一 2011 『平城京右京三条二・三坊 菅原東遺跡』奈良県立歴史考古学研究所
 岡田憲一 2014 『奈良市菅原東遺跡の所説「首長居館」とその周辺整備』『古墳出現期土器研究』2 古墳出現期土器研究会
 加藤一郎 2012 『垂仁天皇嘗伏見東陵採集の埴輪について』『書陵部紀要』64 宮内庁書陵部
 宮内庁書陵部 1974 『原行天皇山辺道上陵の出土品』『書陵部紀要』26
 宮内庁書陵部 1976 『崇神天皇陵外堤及び墳丘濠区域の事前調査』『書陵部紀要』28
 宮内庁書陵部 1996 『狭城厩池地後整備工事区域の事前調査』『書陵部紀要』48
 宮内庁書陵部 1997 『狭城厩池地後整備工事区域の事前調査-第1トレンチの出土品-』49
 宮内庁書陵部 2004 『神功皇后 狭城厩池池上埴輪濠調査その他整備工事区域の調査および墳丘外形調査』『書陵部紀要』56
 宮内庁書陵部 2017 『原行天皇山邊道上陵整備工事予定区域の事前調査』『書陵部紀要』68
 寺澤薫 1986 『畿内古式土師器の編年と二、三の問題』『古墳遺跡』奈良県立歴史考古学研究所
 中野咲 2016 『奈良盆地北縁における弥生時代から古墳時代への集落動態の実態』『古墳出現期土器研究』4 古墳出現期土器研究会
 奈良県教育委員会 1969 『マエ塚古墳』
 奈良市教育委員会 1990 『平城京右京三条三坊一坪の調査 第169・173・182・184次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』
 奈良市教育委員会 1992 『菅原東遺跡の調査 第200次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』
 奈良市教育委員会 1993 『平城京右京三条三坊二坪 菅原東遺跡の調査 第256次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』
 奈良市教育委員会 1994 『平城京右京三条三坊二坪 菅原東遺跡の調査 第257・3次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』
 藤井寺教育委員会 2013 『津堂城山古墳-古土古墳群の調査研究報告Ⅳ-』
 村瀬隆 2016 『菅原東遺跡の首長居館出土土器-古墳時代前~中期における菅原東遺跡の研究Ⅰ-』『古墳出現期土器研究』4 古墳出現期土器研究会
 村瀬隆 2018 『HJ229・443-7次出土土器からみた菅原東遺跡と宝来山古墳-古墳時代前~中期における菅原東遺跡の研究Ⅱ-』『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成27年度』奈良市教育委員会
 村瀬隆 2019 『菅原東遺跡出土石見型埴輪の検討』『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成28年度』奈良市教育委員会

印刷・製本仕様データ

表紙紙：アートポストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色上質紙110kg/m²
巻頭図版：特アート紙135kg/m²
本文：白色マットコート紙104.7kg/m²
本文フォント：ヒラギノ明朝体
製本：左開き・糸かがり綴じ

©2021 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成30(2018)年度

ISSN 1882-9775

印刷 令和3(2021)年3月17日

発行 令和3(2021)年3月27日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地

TEL 0742-33-1821

FAX 0742-33-1822

URL <http://www.city.nara.nara.jp/>

E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1

TEL 0742-34-1111(代)

印刷 株式会社 JITSUGYO

630-8144 奈良県奈良市東九条町6-6

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA
2018

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL
EXCAVATIONS IN 2018

- II REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT
FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS
IN 2018

- III THE REPORT OF ANCIENT RELICS

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2021